

---

# 荷葉の路

鍋木恵梨

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

荷葉の路

### 【Nコード】

N4281C

### 【作者名】

鏑木恵梨

### 【あらすじ】

平城京を満月が照らす夜、前の右大臣の姫・中将内侍は刺客の襲撃を受ける。だがその刺客は姫に「逃げよ」と誘いかけた。逃れゆく二人をさえぎる、継母の怨念、神仏たちをめぐる思惑。奈良時代末の伝説を下敷きにした、身分違いの恋愛伝奇。

## 第一話 琴韻（一）

月は満ちている。

夜半、少女は目を覚ます。

羽織るものを探しあて、静かに立ち上がる。

灯皿の油は尽きていた。沈丁花の甘い薫りにいざなわれ、あふれる月あかりをめあてに、少女は縁台へ歩みを進める。ぬばたまの髪が揺れる。

少し肌寒い。それでも少女は月を眺めていた。

愛でるのは今宵かぎりやも知れぬ。

ならば、おのが瞳に月影を焼きつけよう。

そして月光の海を渡り、金色の仏のおわす彼岸へと旅立とう

そう少女が乞い願った月は、おぼろげな光を雲間に籠らせ、やがて静かに闇につつまれた。無情なる天の意志を見届けながらも、少女はただ、虚空の天をあおぐ。

懷に手を入れる。冷たいものが指に触れた。そのまま指をからめ、強くにぎりしめる。

「姿をお見せなさいませ」

少女が命じる。

凜とした声に続き、さあと風の音がした。

「わたくし、逃げも隠れもいたしません」

机帳きぢょうの裏で影がうごめいた。

「だれの命令ですか」

少女は机帳より視線をそらさない。

瞬時、火花を散った。

少女の黒髪が踊る。

身を翻した少女と相對し、黒衣の者が縁台に立っていた。その手には抜き身の刃。

少女もまた、懐剣を構えおのが身を守る。

火花は二刃のせめぎ合いゆえだった。

「知らぬまま冥途へ赴きたくはありません。お答えください」

「……横佩よこはきの大臣おんじが命にて」

静かに落ちついた、しかし若い男の声。

「父上が……」

少女は細く息をつき、再び縁の外を見やる。

やはり今生のみの月であつたか。

手中の冷たき懐剣を少女は投げ捨てる。

床に落ちはね返り、重く硬く、鈍い音が響いた。

守り刀を捨てる、すなわち命尽きたとの覚悟を意味した。

「手向かいはいたしません。父上の命とあらば」

再び、風が駆けぬけた。

頬にまとわりつく湿り気。むせるような花の香り。光り閉ざす空

と、夜陰の庭。

少女はすべてを受け入れ、まぶたをふせる。

月が再び、姿を現した。

目を閉じ闇に堕ちてさえ、少女はその光をとらえることができた。床の刀が冷たく光る。華やかにほどこされた懐剣の金具が、月光に応えて輝いていた。

そして、待った。

それは長かったのか、短かったのか。

突然、手首を拘束され、少女は肩をすくめた。

音もなく男は傍に立っていた。少女に手首をつかむ手の熱さが伝わる。

「中将の姫」

少女はその声の主を見上げた。

衣のすき間から見える瞳は、月を映し迷える色を見せている。

「馬は裏手に」

男はただちに強い力で少女を引いた。不意をつかれ男にもたれか

かった少女　中将内侍はあわててまっすぐ立ちなおす。  
そしてふたつの影は、庭を静かに駆けぬけた。

## 第一話 琴韻（二）

中將の姫の瞳から、涙があふれてはこぼれ落ちた。

続けてくしゃみと咳。何度もくり返しせきこんでは、むせている。ひとつ足を進めることに、ちりやほこりが舞い上がり、中將の姫の袴にまとわりつく。

男は黙って座っていたが、その黒装束も白くなっていた。

中將の姫もほこりを払うことを止め、そのまま座りこんだ。

ここは破れ屋である。かつては貴人の屋形であつたのだろうか、ほこりにまみれながらも、床几、几帳……調度はほとんどが品のよいものだった。しかし今は訪れる者もないのか、柱の脇には琴が、静かに眠りにについている。かつての主の帰りを待つこの廃屋は、ひたすら朽ち果てる日を待ち続けているようだった。

「ここは、どこですか」

中將の姫が問うや、あわてて袖で口元をおさえた。

男が答える。

「長谷寺付近」

「長谷寺。では、十二面の観音様がお近くに」

中將の姫が上身を浮かせると、ほこりが舞い上がる。はっと気づいた姫は両手で口をふさぎ直すが、間に合わなかった。またしても姫はくしゃみに苦しみだした。

「けふ、けふ……わたくしって愚か……」

あらためて袖で口元を覆いなおし、肩をすくめた中將の姫は、男の様子をちらりと見やった。男は声をくぐらせ笑っている。

「……観音菩薩は」

姫は不安げな目を伏せて、ゆっくりとした口調で語る。

「観音菩薩はわたくしの守護仏なのです。」

母は長らく子に恵まれませんでしたので、長谷寺に百日参籠して祈願しました。その百日目の夜更けのこと、夢に十二の顔をお持ちの

観音菩薩が現れて、子を授けると母に約したそうです。

そうして生まれたのがわたくしであると」

姫の手の中でなにかが光った。

小さな黒石をつないだ数珠。

姫はそれに頼るように力をこめ、かたく握りしめた。

一息つき、姫は続けた。

「わたくしはそう、幼きころより教えられてまいりました。それで観音菩薩を守護仏と定めたのですが、命を与えたもうたこの地に向かつて毎朝、手を合わせて経典を繰り、感謝の意を表してまいったのです。

それが今、黒衣どのに連れられて観音菩薩のひざ元にいます。この奇縁に、わたくし感謝いたしております」

ひとしきり話してなにかふっ切れたのだろう。

姫はしっかりと視線を男に向けた。

「あなたは、わたくしの命を断つおつもりでしたのに」

刹那、男の瞳に険しい色がうかぶ。中將の姫はそれを見てとったが、のどかな口調を変えずに続けた。

「父上の命令に背いて、いかなさいます」

壊れた軒から月がのぞいている。白い光が男に降りそそいだ。

彼はまぶたを薄く上げて沈思していた。なにか自問自答をくり返し、思い悩んでいるようでもある。

その心境を中將の姫が推し量れるでもない。姫はただ沈黙を守っていた。

月光の中、ちらちらと舞うほこりは粉雪のごとく星のごとく、瞬くさまが美しい。夜闇の静寂の中、姫はいつしか灰燼の舞いに見とれていた。

やがて男は中將の姫へと目を向け、口元を覆う布をはぎ取った。

姫は動きを敏感に感じとり、彼に意識を向ける。

両者、目があった。お互いの心底を探りあうように。

姫は緊張に体をこわばらせた。対する男は少し口元を歪めると、

静かに話しはじめた。



## 第一話 琴韻（三）

「神妙な振る舞いを感じ入った次第」

男はやや切り捨てるように言った。

「わたくし、ですか」

「理不尽な命令に従う気も失せた。それだけのこと」

「理不尽な命令」

姫が首をかしげる。

「確かに、父がむすめの私の命を奪うよう命じたのは、悲しいことです。ですが、なにか理由あつてのことと思います。父上が意味のないことをなさるうはずがありませんから。

…… 黒衣どのは、いかなることを理不尽とおっしゃるのですか」

問いかけた相手の目に迷いがつかぶのを、中將の姫は見てとった。

男はそれを隠すように顔をそむけた。

あやまたずそれは図星かと、姫は直感する。

唐突に男は立ち上がって、静かに妻戸を開けた。そして、

「すぐに戻る」

と背中越しに言い残し、廃屋から立ち去った。

廃屋には姫ひとり取り残された。

姫は目をふせた。

胸がつまる。恐怖はもはや捨てた。これは不安の塊だ。先知れぬ身の上への不安、敵か味方か見定め難いがゆえの不安。

しかし、それに増して姫はもの悲しさを覚えた。胸苦しさは不安だけではなく、悲しさも原因だった。

「なぜ、悲しいなんて思うのでしょうか」

黒装束の男は問いかけに答えなかった。一瞥をも示さず出て行った。それが悲しいらしいのだ。この身に刃を向けた凶徒なのに。

「どうしてなのかしら……」

長谷寺、泊瀬の谷。

あの人は「逃げよう」と誘いかけた。だから逃げた。そしてこの地に来た。

だが、果たしてほんとうに「逃げて」来たのだろうか。

命を奪おうにも、仮にも前の右大臣の邸だ。邸内での刃傷は障りがある。だから逃げよと誘いかけ、連れ出したのではないか。……

いや、そもそもここは、ほんとうに泊瀬の谷なのか。証拠はない。ただ男の口から「長谷寺付近」と聞いたただけだ。

「すべては虚言かもしれない」

中将の姫はひとり思う。

「でも、すべてが虚言であつたとしても、わたくしにはなすすべがない。ここから都まで独力で、どう帰ればよいのでしょうか。すべてが畏であつたとしても、どう……」

ならばあの人を信用しよう。それが姫が導き出した答えだつた。

馬は裏手にと告げられ、即座に逃げたあの直感も、信じよう。

とはいえ不安は去らない。なお増すばかりだ。

今の我が身をふり返ると、この山里の破れ屋にただ独り。すぐ戻ると言い残したあの男は戻らない。やはり取り残され、置き去りにされたのではないか。

同じ不安に再びかられる。

歌でもものして気をまぎらわせようとしばし考えたのち、朗じるが、

こもりくの泊瀬の山に照る月は

「下の句が出ないわ」

歌は、そこで止まってしまふ。

「やはり、わたくしって、歌はからきしだめね」

あきらめて部屋中に視線をはわせた。

壁に立てかけてある琴には、訪れた時より気づいている。

「琴に触れれば気がまぎれるかしら」

中将の姫は立ち上がった。

壁際に寄り、琴に触れた。弦が二本ほど切れている。

「でも音は出るはず」

弦にかけてある爪を指にはめ、残る五弦を順にはじく。  
軽やかな音。

これならば異存はない。姫は琴をかかえた。

「重、い」

琴ほど重いものを持ったことはなかった。

さりとして、心に決めたからにはやめたくはない。

ほこりを吸わぬよう息を止め、こわばる腕に力をこめて、板間の中央に琴をすえる。

「さあ、できた」

それだけで満足を覚え、笑顔ほころぶ姫だった。

がしかし、そもそも琴を弾いて気をまぎらわそうとはじめてこと。  
奏でねば運んだ意味がないことを思い出すと、ぺたりと座って指を  
弦にそえた。

「怖くない、怖くない。恐れも疑いも、消え失せたもう」

姫は月に、そしておのが心に祈りを捧げる。

琴は捨て置かれたものとは思えぬほど、澄んだ音を奏で出した。

## 第一話 琴韻（四）

男は廃屋の軒下から天をふり仰いだ。

星の瞬きに反し、その目は物思いに沈んでいる。

男は思う。

思いのほか中將の姫は強かった。まだ子供っぽさの残る姫ゆえ、さぞかし延々とすすり泣くかと思つたがそんなようすは一向になく、毅然とした態度を見せるし、いろいろと質問をあげせ、さらには「背いていかなさいます」などと問う。よくぞ刃を向けた不逞の輩に「なぜ命令を破るのか」などと尋ねたものだ。

なにより意外だったのは、懐刀を抜き、さらには投げ捨てたことだ。

右大臣邸で殺すつもりはなかった。一刀目は脅しだった。騒ぐならば口を押さえ、暴れるなら殴りつけてやろう、腰を抜かすなら見おろして嘲笑し、そして卑しい満足を快感に変える。

恐怖と絶望にうち震える前の右大臣の姫、三位中將内侍さんみちゅうじょうのちないし。その哀れな姿を心ゆくまでに見下し、満月のもと楽しむつもりだったのだ。それが思わぬ反撃。深窓の姫ともあろうものが懐刀でむかえ撃つとは。全く予想外、いや、抵抗は予想していたが、その身のこなしは想像をはるかに越えていた。あまりの驚きに動きを止めてしまつたほどだが、いや、さらに驚愕だったのはその次だ。姫は父の命令だと聞くと、迷うことなく刀を捨てたのだ。命を惜しむようすなどとは片鱗も見えなかった。

「どうしてそこまで潔い？」

背いていかなさいます、と問いかけられた。

あの時、答えられなかったのは恐れたからだ。

「数え十四の中將内侍に？ なにを恐れた？」

廃屋から流れる澄んだ音に男は気づいた。

「これは」

梟も鳴くのをやめ、木々に止まりその身を寄せる。

山の破れ屋より届く、乱れなき旋律。

「音に聞く中將内侍の琴……天上の調べ」

そして男はにわかに手で目を覆い、低く呻吟した。

「この琴の手、まさしく話に違わぬ琴の高手」

男はしばし、天人の旋律に身を委ねた。

そして思いはめぐり、くり返す。

廃屋を出たとき、中將の姫を直視できなかった。

中將の姫の澄んだ瞳に、よんだ心を見透かされはしまいか。恐れたのは、そのことだ。後ろめたさが心を支配し、いても立ってもいられなくなったのだ。

なぜ……久しく忘れていた罪の意識などを覚えたのだろう。捨て去ったはずだった良心がにわかに蘇ったのだろう。

彼は手を顔から外し、眉を歪めつつ虚空を睨みすえる。

やはり、答えは出ない。

木々の間からは星がこぼれ落ちそうに瞬く。月を隠した雲はどこかへ消えていた。谷間の泊瀬はふき通る風もなく、葉は静かに時を待ち、木々は互いによりそい眠っている。泊瀬川の速む早瀬のせせらぎが、遠くにかすむ。闇に隠され見えぬ遙か右手の山からは、若い馬たちのいななきが届いた。まるで姫の琴の音に、天人の呼び声に、我らはここぞと応えるように。

「馬、複数」

男ははつと我にかえる。

「だめだ、とどめなければ」

男は素早く身をひるがえした。

## 第一話 琴韻（五）

中將の姫は手を止めた。

影が手元を覆ったからだ。

顔を上げると男が立っている。自分を見下ろしていることに気づく。

「黒衣どの」

「夜が明けると追っ手が来る。出立する」

「今すぐ、ですか」

「今すぐに」

「さようですか」

姫は細く、息をついた。

「黒衣どの。できませんでしたら、この琴を持って行きたいのですが、馬にのせても大丈夫でしょうか」

男は絶句した。

その様子を見、不安を覚えた中將の姫が、ためらいがちに訴える。  
「とても良い音がします。弦は切れていますが、直せば良いものです。もう少し、さわってみたいと思ひまして」

「それはこの屋敷の方の持ち物。主人が不在とはいえ、琴を持って行くのは」

「いけませんか」

「それは盗人の所業」

「盗人」

姫はさも驚いたようすで目を丸くした。

「分かりました。琴は、置いて行かねばなりませんね」

悲しげな視線をちらりと落としてから、中將の姫は男に向き直った。彼は一顧だにせず、ふたたび廃屋の妻戸をくぐり外へ出る。姫は後ろ髪を引かれる思いをふり払い、男の後について出た。

月明かりのもと、男は大股で暗い山へと歩を進めた。はや歩きに

慣れない中将の姫を氣遣うようすもない。下草を踏み、枝を払いながら、勢い速足で登りゆく。姫が必死に追う。息を切らしつつ追った。

白い息が姫の顔の前にあらわれ、そして消え去る。山中は冷えた空気に包まれていたが、姫は先を急ぐがゆえに寒さを感じなかった。姫は時折、息継ぎし損ねたのか、顔をしかめ胸や腹をおさえている。だがそれをふっきると、

「あの馬にも」

と息継ぎまじりに、それでいてはつらつとした口調で話しかけるのだった。

「お聞かせ、さしあげ、たく思い、まして」

男はふり向きさえしないが、姫はかまわず続けた。

「馬は、林の中に、つないで参りました、でしょう。あの小屋からでは、あの馬に、琴の音、聞こえませんか、から」

「その口、控えてもらいたい」

「ご、ごめんなさい」

わずかに声がふるえている。

男は心が痛んだ。そう厳しく言わなくとも、と後悔もした。

（いや、間違っていない。これでいい）

姫自身の命運がかかっている。

しかもそれを姫に説く時間もない。

杉木立をくぐり落葉をふみ分けて行く。歩みは速く、上り坂。姫には経験のない山歩き。息も絶えだえになる。さらに進み行くと足元は落葉の下に木の根が幾重にも走り、木のないところは大小入り乱れた岩肌がむき出しで、姫が進むにはあまりに険しい道なき道となつてゆく。

「道を違えたか。それでも」

男は舌打ちし、刀を片手に行く手の小笹を切り払った。

「戻って追いつかれるよりは」

（追いつかれるとは、追っ手に？）

不安はあるものの、男の足が緩まったことの方が、姫には幸いだった。追いつけずに脱落してしまえば自分に生きのびる道はない。今なら息を整え、ぴたりと後を追ってゆける。

すると急に先を行く男が立ち止まった。

姫は男の脇から前方をかいま見た。

灯りが見える。ひとつ、ふたつ……幾つもの灯り、そして黒い影が、木々の合い間から姿をあらわした。

「これはいかなることだ」

影のひとつが鋭く問いかける。

（これは、いかなること？）

姫もまた、心の中で問いかけた。

男は落ち着きはらった様子で、静かに返答した。

「土地の者に見られたんでね。よそへ向かうことにした」

中将の姫は「だれにも会っていないわ」と内心想いつつ、なりゆきを見守る。

（落ち着きなさい）

と、自らに戒めて。

影は複数。次々、姫と男をとり囲む。

黒衣の仲間か。

だが影らは、姫と男がふたり連れだって山をゆくさまに疑いをかけている。男の語りはうまく切り抜けるための嘘であろうか。そうだと思いたい。姫は天上の月、そして泊瀬の谷の向こうにおわすであろう観音菩薩へと願いをかけた。

その月を次第に雲が覆い、山肌を映し出す光をも消し去り始める。影らはますます数を増し、もはや十に近い。じわり、と囲みを狭めてくる。

そして男は突然、身をひるがえした。



## 第一話 琴韻（六）

影らが「あ」と小さく叫んだ矢先、ひとり前にのめり、ふたり後ろに揺らいた。

闇中、落ち葉が激しくこすれ合う。

かん高く「裏切りだ！」と叫んだ声も途中で切れた。

姫はわけが分からない。

ただ、男は生き延びている。そうに違いない。

「走れ！」

「……黒衣どの」

安堵したのもつかの間、切迫した声がさらに届く。

「早く！」

姫は袖をひるがえした。

「逃げるぞ！」

「逃すな！」

影どもが姫を追おうとした、その背後を男は素早く突く。

別の影からの横槍が入る、幾人の影が男の脇腹を狙った。太刀筋を見切り、男は難なくかわしながら、中將を追わんとする影を追い、軽く首を撫でる。生温い血しぶきが飛散し、男は顔に少しばかり浴びた。

が、それはまだ良い。

さらに返す短刀を一闪二閃、やがて男の衣服は別の色に染まる。

多勢に無勢ながら、波状に襲いかかってくる攻め手をはじき返し、返す刀で見事に仕留めてゆく。が、次第に動きは鈍り、男は肩で呼吸し、荒い息を吐く。

（まだいるのか！）

相手するより逃げたい、と男は考えたが、両足が何かがからみついているかのような。視界定まらぬ闇の中、あとどれだけの人数が居るのか、どこに隠れているのか。それに自分はどれだけ斬り倒し

たのだ？ 短い刀が大剣ほどに重く感じる。

（これ以上いれば）

脳裏をかすめるのは最悪の覚悟。

その時、襲いかかられたのは頭上からだ。

「くそッ」

男が大振りに走らせた短刀はむなしく空を切った。

着地した人影がしゃがれ声で告げる。

「裏切り者め」

「……」

「われが拾うてやった恩を忘れたか」

「今までの仕事で、恩は返した。今宵」

男は深く息をつき答える。

「悪いが今宵の仕事、褒美はみな、俺がいただく」

「すべて殺しおって」

「すべて」

男は口の端を上げた。

「八条王、あんたで最後か。助かったよ」

「ほざけ！」

人影が狼のごとく飛びかかる。

男は刀で受け止めた。

が、火花が散るや、そのまま篠笹の藪に倒れ伏した。衝撃と笹で切れた全身の傷に男は声を漏らし、刀をとり落とし、笹の中に埋もれた。敵を目前にして背を向け藪を探すことなどできず、顔色蒼然としつつ昂然と頭だけを上げると、月が雲間から顔をのぞかせていた。怜悯な月光を人影が遮り、それが手にする打刀のみが光に応じて輝きを増している。

「いい格好だな」

人影 八条王なる男が薄笑いを浮かべた。

「今まで可愛がってやったというに」

男は八条王を睨みながら考えた。

（ここで時間を稼げば、姫は）

どうにか逃げおおせられるのではないか。朝になれば長谷寺の寺容が見えるだろう。寺に逃げ込めば、当面は八条王の魔手からは逃れられる……当面は。

「可愛がつてもらった分、俺も尽くしてやっただろう」

「おお、そうとも」

八条王が男の腹を踏みつけた。

「ぐっ！」

そして刀の切っ先でのどを数度つつく。

「字の読み書きができるお前がいたればこそだ。わしは貴人より仕事を請け負い稼げた」

「そうだろう。俺がいなけりや、今もあんたは佐保の河原でしかばね漁りをやっていた」

男は切っ先がのどに食い込まぬよう、小声で応えた。

「『王』なんてご大層な名乗りなぞ、できやしなかったんだぜ」

「驕るな。わしが拾ってやらねばとうの昔にのたれ死にだ」

黒衣の男は背中にかすかな振動が伝わるのを感じた。

それに八条王は気づいている様子はない。

一拍子置いて、男は何事も気づかぬふりで軽侮の笑いを見せた。

「ふん、まったくその通り。ありがたいことだ」

確かに振動は近づいて来ている。

「だがこれが潮時だ。正直、俺はあんたにうんざりしていた。従う気なんてもうさらさらない。従わずともやっていけると踏んだんでね。あの横佩（よこばい）の大臣さまのやんごとなき御前さまは、俺をいたくお気に入りとのことだ。つまりあんたなんぞはお払い箱」

「この薄汚れた逃げ雑兵が！」

「その貧相で卑しい姿と能無しの頭をかえりみるがいい。この俺を殺して先、どうする」

草木を踏みしめる、荒々しい地響き。

それはもうほど近く。

「何っ!？」

突如、草叢から黒い迅影<sup>はやかげ</sup>が飛び出した。獣、黒い獣だ。それは荒い息を吐き、木々の間を疾駆する。

「馬だ、馬が……」

正体に気づいた次には、八条王は踏みつぶされた。

男は即座に立ち上がった。拾い上げた刀で八条王の息の根を止め、馬へ向かって突進した。

「黒衣どの!」

馬の背にあるは中将の姫。

姫がたてがみを引くと馬はあえぎ、馬脚を緩めて方向を変えた。その機に男は馬の背へと跳躍した。鮮やかに馬にまたがるや、

「行け!」

と、男が命じた。

馬が一声、雄叫びをあげる。

乗馬の主の命じるまま、蹄が激しく土をけり上げた。

姫は首にしがみつки、男はその背からたてがみを握りしめた

馬は枝葉を薙ぎ倒し、風を呼び、険路を駆け下ってゆく。道筋、

黒い土と落葉が蹴散らされ舞い上がった。

寸刻前の死闘の場には、しばらくうめきが残った。此の世に思いを残す魂魄が、彼の地に縛られるがごとく……がしかし、怨嗟に満ちた声はか細くなり、やがて闇の中へと溶け込んでゆくと、誰気づくこともなきまま、消え失せてしまった。

## 第一話 琴韻（七）

払曉。

黒装束は普通の衣に着替えていた。

中将の姫は驚いた。

（継兄上たちよりもお若いかも）

彼は痩身で、目もとの涼しげな白晰の青年だった。どこか唐国の人めいた風情もなくもない。なにより中将の姫を驚かせたのは、想像よりもはるかに若いことだった。

（ともすれば、二十にも満たないのでは）

一見、幾人もの刺客を倒す武人には見えない。身なりから鑑みるに、宮人ではなさそうに思える。それでは家人。にしては、姫には見覚えがない。

「おうかがいしてよろしいですか」

男は無言で聡明な姫を見かえした。

「害せよと命ぜられたは、本当に父なのですか」

「黒幕はご想像の方」

「……継母上、でしょうか」  
はつちえ

男の無言こそ証明していた。

父の命にあらず。継母・照日御前の命令なり、と。

「嫌われていることは存じています。でも、わたくしは女の身ですから、お家を継ぐでもなし、命までとは思っていません」

「事実、闇に葬るよう頼まれた」

中将の姫はことばなくうつむいた。

「ああ、正確には殺せとは聞いてない。山に棄てて来い、そういう命令だったか」

「……同じことすわ」

父の、中将の姫の実母・紫御前への寵愛と労りは、ことのほか深かった。からだの弱い紫御前は縁を結んで以来、長らく子宝に恵ま

れなかったが、長谷寺の観音菩薩に百日参り、ようやく授かったのが中將の姫である。このことは昨晚、姫みずから男に語ったとおりだ。

そのとき、みかどにも吉兆があつたとして「従三位」の位と「中將内侍」の職とを与えられた。これより人は、姫を「中將の姫」と呼ぶようになった。

中將の姫の母が亡くなつたのは五年前のこと。寄る辺ない姫は、父・豊成の別の妻に引き取られることになった。姫の先々をおもんばかり、もつとも暮らしに不自由のない妻　　さき　　前の左大臣・橘諸兄　　たちにはなのもろえ　　という人のむすめのもとへ。その人こそくだんの継母、照日御前である。

父は紫御前のただひとつの忘れ形見、中將の姫をとくに溺愛した。一方で、照日御前との子である豊寿丸は、ほうじゅまるあまりかえりみられることはなかったようだ。それを恨んで継母が中將の姫につらくあたることは、日常のことだった。豊寿丸が不慮の出来事で亡くなつてからは激しさをまし、中將の姫にずぶ濡れの衣が用意されたり、食事が運ばれなかったり、唐櫃に干からびたねずみが入っていたり、そんなささいな嫌がらせはいつものことだった。着物を盗んだと言われ、雪の日に松の木に縛られ折檻されそのままにされたことだつてある。

「少しくらいのことでは動じない、そのつもりでした。ですが」  
「……」

「ついに今度は、命まで」

中將の姫は暗澹たる心地だった。

「どうしてわたくしを、そこまで」

事實は受け入れよう、しかし一方では納得がゆかなかった。

なぜ、事ここに至つたのだらう。知らぬうちになにかをしでかし、継母の逆鱗に触れてしまったのだらうか。

ふと、男は昔を思い起こすようにつぶやいた。

「美しい琴の手だった」

中將の姫は、答えの意味がつかめず首をかしげる。

「このまえ、みかどの御前にて琴を奏されたとか」

「はい、仲秋の日に」

男はゆっくりうなずいた。

「あの日のことを御前はおおせになつていた」

「あの日……」

姫は愁眉をよせつつ、記憶をたぐりよせた。

中將の姫の父・右大臣藤原豊成は出仕停止、右大臣を免ぜられ、そして九州は太宰府ださいふへの左遷を命じられていた。橘奈良麻呂たちばなのならまろという人が起こした、天下を揺るがす乱の報告を遅らしたとして、かの乱に加担したとされたのだ。そのうわさの元は豊成の弟で政敵でもある、左大臣藤原仲麻呂なかまろ。中將の姫からすると叔父にあたる。その仲麻呂におとしめられたことで、豊成は謹慎せざるを得なくなつた。手痛く、なにより業腹な処分であつた。

豊成は病と称して難波津なにわづにとどまり、太宰府下向を拒否、難波の別業べつごうでの毎日を悶々と過ごしていた。豊成はこの機に弟の仲麻呂が勢力拡張に励んでいるかと思うと、気が気でならなかつたろう。中將の姫でさえ、父の不安、いらだちは手にとるように理解できたし、実際、気鬱な表情を隠さぬすがたを覚えてもいる。

そんな中である。仲秋の宴にてみかどの御前で演奏を行うべしと、中將の姫が命ぜられたのは。中將の姫の琴の音こそ望月にふさわしいと、みかどが望んだという。

四年前、十歳のころには同じくみかどの前で奏し、幼くも琴の手の素晴らしさは語り尽くせぬと評されてはいた。位が「従三位」から今の「三位」となり、玉簪たまかんざしを与えられたのは、この琴の褒美ほうびだつたのである。

前の右大臣に味方する一派が策動し、呼び戻すきっかけをと、宴にかこつけたのか。

ともあれ、この好機をものにせぬ道理はない。

「決してみかどの気を損ねぬようにな」

と、異母兄の縄麻呂はその日、中将の姫の邸にまで出向いて来、強く申しつけて送り出したのだった。  
必ず、成功させねばならなかった。  
出仕かなわず、憂き目にある父のために。



## 第一話 琴韻（八）

中將の姫は継母の照日御前とともに参内することとなった。

だが、そのために大変なこととなってしまった。みかどが氣まぐれを起こし、照日御前にも琴を弾くよう命ぜられたのだ。

照日御前はたしなむ人ではない。とはいえ固辞するわけにもゆかず、母子で双琴を並べることになったのだが、案の定、照日御前は的外れの音をかき鳴らすばかりである。このままでは父の名誉回復になるわけがない、どうにかせねばならない。

中將の姫は即興で音を紡いだ。はずれた照日御前の音に合う音を求めて弾いた。

まるで異国の調べのようじゃ。

ある公卿は夢見心地に、ほう、と深い吐息を漏らす。

また、ある公卿は息浅く、意識を失ったかのように微動だにしない。

耐えかねた照日御前が琴の爪を投げ出した。にわかに夢を覚まされ、眉をひそめる面々。

姫は突然、激しく箏をかき鳴らした。そうして気を逸らそうとしたのだ。

溪流のごとく衝突する旋律は、殿上の人々をはっとさせ、中將の姫ひとりに視線が注がれた。期待と好奇に満ちた目が姫一点に集中する。その期待を裏切るまいと、姫は持てる技巧のかぎりを尽くした。

殿上人らは姫の音に心奪われた。彼らの目にはもはや、ほかの何者も映らない。爪を投げた照日御前など、皆が忘れた。まるでじめから存在せぬかのように。

そして最後に、姫は柔らかく心和む調べで音曲を結んだ。

すべてを終えた姫はひどく震えていた。さきほどまで無心で動かしていた手が、今にも腕から落ちそうな感触がして、両方の手首を

離すまいと、それぞれをしつかり握りあわせた。そうして震えをおさえながら、つくり笑いを浮かべて前を見すえると、誰しもが我を忘れたように放心し、しかし満足げに口元を緩ませているのが分かった。

無事に大役をつとめあげることができたかしら。

ほっと姫は胸をなでおろした。

……そのはずだった。

「どのような結果を招いたか、ご存じか」

男が冷淡に問う。

「うかがっております。みかどがどう、おぼしめされたのか」

姫はなにやら思いついたか、急に早口で問いかけた。

「もしや、みかどのお怒りに触れたのでしょうか。だからわたくしは死をもつて報いねばならぬと」

「みかどはかく仰せになったとか。その琴の妙手は並ぶ者なし」

姫はなにかを言おうとして、口をつぐんだ。

「あなたは御前に、みかどと殿中の人々の中で恥をかかせた」

「そんな！」

「恥をかかせるつもりは毛頭ない、その場をつくろうのに必死だった。おっしゃりたいことはよく分かる。

だが元来より御前は姫憎らしのご存念。姫の善意を素直に善意と取りはしますまい。姫のために、おのれの不調法をことさら世に知らしめられた、と屈辱に思われた」

姫の瞳は潤んでいた。

「どうすればよかったのでしょうか」

「逆恨みの理由など、突きつめても無駄なこと」

男は素っ気なく言った。

とても慰めようという口調ではない。

しかし姫を責めるでもない。それが気遣いなのか、率直な意見なのかは分からない。

ただひとつ、想像できたことがある。彼は命を下した照日御前を

「主人」に仰いではないらしい。子飼の下人ならこんなもの言  
い方はしない。「逆恨み」といった、照日御前に非のあるような言  
いは。

「あなたさまはどういった身の方で」

「名は、春時。御邸の門の守り番」

（それにしては、あなたのお顔を拝見したことはありません）

疑わしくはあったが、姫はあえて尋ねなかった。

「春時どの。これよりどういたしましょう」

「……とりあえずは危険はないと思うが」

素っ気ない春時という男がはじめて困ったような表情を見せた。

（もしかして、いきあたりばったり、かしら）

そう推測すると、姫は春時になんとなく親近感をおぼえた。数刻  
前、刺客として刃を向けられたことへの恐れそして継母の理不尽な  
仕打ちへの悲しみは、どこかへ消えうせたようだった。不思議なこ  
とに、こんな中でも心が安らいでくる。

「追っ手はもう、いないのでしょうか」

「首領は倒したが、確実ではない」

「でしたら、姫、姫と呼びかけるのは、よろしくありません」

春時が向き直る。

「どうお呼びすれば」

「これよりはわたくしを、れん、とお呼びください。本当の名は、  
藤原蓮子。真名で、蓮華の蓮、と記します」

男 春時は皮肉交じりの笑みを浮かべた。

「承知しました。前の右大臣の郎女、いらつめ中將の姫」

「だから、れんだって申しましたのに」

と、姫 れんは口をとがらせた。

## 第二話 落飾（一）

街道わきの山道を馬の背にゆられる男女。

女はまだ齡若年で色白く可憐さを残す。しかし可憐ながら堂々とし、典雅な雰囲氣が漂う。

男もまだ年若かつたが落ち着いており、凜々しい顔立ちで物腰に粗野な振舞いはみられない。

「では、忍坂おっさかの山中に、わたくしを捨てるつもりだったと」

女　　れんの尋ねに、男　　春時は短く答えた。

「そうです」

「それだけでよかつたのでしょうか、捨てるだけで」

「尊貴の方はおれのような奴とは違って、いろいろ大変だから」  
春時は皮肉っぽく笑った。

「と、申しますと」

「殺すと怨霊になってしまわれる。恐ろしいものです」

れんはさも恐ろしい、とばかりに身ぶるいした。

「え、ええ、そ、そうですわね」

「さらに怖いことには祟られた上、首謀者が分かってしまう」

「それも、そうですわ……ですが」

れんは口元に袖をあて、考えこんだ。

「なにか疑問でも」

「もし……もしもですよ。忍坂でわたくしを捨てて、命を絶たないままでしたら、山の辺の道をかよって、都に帰ることだってできるかもしれません。わたくしがどうかして、都に帰りついたとしたら、継母上たちは、どうするおつもりだったのでしょうか」

「悪口雑言を並べたてておけばよい」

「……それだけで？」

「厳しくあたった御前はまこと正しかった。邸に戻ってもこなた様に同情する者は誰もなく、さぞかし肩身のせまい思いをするでしょ

うな」

「悪口雑言とは、どういった」

春時は少し考えるようすを見せると、にわかに苦笑いを見せた。

「春時どの。なにをお笑いなのですか」

「男とできて家を出た、といった」

「えっ……ええ？ あのっ」

れんは頬を赤らめた。

「もしかして、ええと、あの、はた目から見て、春時どのとわたくしとは、その……いまもそのように見えるのではないですか」

「それはお答えできませんね」

「ど、どうでしょう……」

「なにが」

「だって、それは」

れんはこれ以上となく真っ赤になり、春時の顔を見るだけで精一杯だ。

「ご、ご迷惑なのは」

「仕方ない、お答えしましょう。こなた様をどう眺めたって色恋の雰囲気はありません」

「それは……どういう意味でしょうか」

れんと春時は同じ馬にまたがり、山道をゆく。

道々話をしてゆくうち、急速にうち解けつつあった。

不思議なくらいに自然に、お互い知己であつたとさえ思える。

（中将の姫　れんがそうさせたのだ）

れんは刺客である春時に臆することなく話しかけてくる。春時はそれを無視するわけにはゆかなかった。相手をするうち、いつしか垣根は低くなっていた。

れんの警戒心のなさは驚きに値した。れんに人並み以上の度胸と胆力があるのは間違いない。しかし、深窓の姫らしい世間知らずが、怖いもの知らずのふるまいに輪をかけているのではないだろうか。

（追いはぎに「来い」と言われて、ばか正直にのこのこついて行き

かねないな)

春時は不安を覚える。

あの山の破れ屋でもそうだ。中將の姫はただ心の赴くまま琴を奏でた。

(あの妙なる調べは人に恍惚の光を与え、鬼神さえも心震わせる。

……おれも一時、心奪われた)

だがその美しさが徒<sup>あた</sup>となるはずだ。嫋々たる余韻も去り、人の心が闇を取り戻すとき、かの奏者こそは中將の姫よと気づくだろう。現にそれは起こった。

琴をやめさせすぐに逃げようとしたが、ほどなく追いつめられた。八条王に命じられた遺棄場所は忍坂。その忍坂よりさらに東、泊瀬<sup>はつせ</sup>に向かい、都から追尾する八条王の一党を振り切ったはずであったのに、集団で待ちかまえられていたのだ。琴の音のせい、と考えざるを得ない。

八条王配下の関わる者は、おおかた息の根を止めたはず。首領の八条王もおそらく死んだ。だが確実ではない。八条王以外の手先の存在も考えておく方がよい。この姫はまだ狙われているかもしれない。

春時は思慮を重ねながらも迷いが去らない。

泊瀬からほとんど離れていない場所に、姫をひとり残してゆくのは危険極まりない。とはいえ、今後を考えるなら。

「まあ、村に出ましたのね」

れんが無邪気に喜んでいた。

確かに林がとぎれると、畦道があらわれた。秋の田は刈取りを終えて久しく、稲を刈った株以外なにもない。すべての用が済んださびしげな田のさまを眺めつ、馬の背にゆられ行くと、目の前を赤とんぼが飛んでいった。あつ、と小さく声を上げたれんは、追いかけるように手を伸ばした。すると体が傾きそのまま落馬……寸前で、脇を抱えて引き上げたのは春時である。

「あ、あの」

春時はただ、ため息をついた。心配の種は尽きそうにない。  
小屋が見える。

そこまでゆつくりと背に揺られ、軒下に馬をつないだ。

## 第二話 落飾（二）

「一時、都へ戻る」

春時は旅装を解かず、せわしく荷物を床に置き直している。

手伝おうとしてかえって邪魔者扱いされたれんは、ちよこんと床に座っていた。

「わたくしは」

「ここで隠れてもらいたい」

春時は包みをれんの前にすえた。

「入り口のかめには十分な水がある、この包みは干し飯が入っている」

「はい」

「干し飯の食べ方は」

「存じています」

「二、三日で戻るから、これを食してここでじつと静かにしているように」

「はい」

春時がれんに命じるさまは自称「右大臣家の門番」に似合わぬ居丈高さだ。

「我慢いただかねばならないことが」

「なんででしょうか」

「髪を頂戴したい。それもかなりの量を。童子頭になるくらいに」  
れんは反射的に頭に手をやった。

まげを解くと腰まである、黒く染め抜いた絹のごとく艶のある髪。それを隠そうというのだろう。当然、隠せるわけがない。

れんはひどく動揺していた。

無理もない。髪を切る「落飾」は出家し尼となること、切った時から世を捨てたと同じことだ。とはいえ、今のれんの境遇は世捨て人そのものだが、とにかく横佩大臣よこはきのおとこの姫、三位中将内侍にと



つては恥ずかしくて、とても人前に出られる姿ではない。動揺するのにもごく自然な反応だった。

「おまかせいたしますが、わけをお聞かせ下さいますか」  
そう言ってから、れんはあわててつけ加えた。

「決して春時どのを信じないのではないのですよ。でも、その……」  
うつむきがちになりながら、目は救いを求めている。

「こなた様を死んだこととします」

「……！」

「これ以上、追っ手が掛からぬようにするため」

「そこまでしなければなりませんか。継母上を謀るのとはともかく、父上や義兄上たちがお嘆きになるのは耐えられません」

「ではこう申しましょうか、中将の姫」

春時が厳しい目を向けた。

「こなた様を始末した暁には、多くの褒美が約束されている。それが目当てです。なぜ褒美が必要か。ただかないことには、ほとぼりが冷めるまで逃げるにも食うに元手もない」

「食う、元手」

れんにとって食べ物、決まった時間になれば女房が用意してくれるもの。継母の意地悪で食事を得られないことはあったが、食べるために元手、資財が必要と思ったことはなかった。

藤原南家、右大臣の家で食事の苦勞などありえないし、父が左遷されたとして暮らし向きは変わらない。

「食う、元手」

れんは数度、くりかえした。

れんには思いもかけぬ話であったから、意味を正しく受け止められているのか、ことばを言いかえたしかめる。

「おっしゃっているのは、ものを食するにも食べ物<sup>あがな</sup>が手に入れられぬ、ということですか。だから、わたくしの髪<sup>あがな</sup>の束で購おうと」

「ご理解いただけましたか」

どうやら考えは合っているらしい。

れんは小さくうなずきかえすと、さらに考えた。

「でも……継母上に収めるのですよね、この髪を。この髪をして、わたくしに呪いをかけたりなどはしないでしょ。うか。河原で拾った髑髏どくろに入れたり」

「死者を呪殺できますか？」

「あつ」

「怨霊祓いの呪法や祈祷くらいはやるだろうが」

「そうですね、たしかに」

まだ不安はぬぐいきれていない。

だが容赦なく、春時は宣告した。

「ご理解いただけたなら切らせていただく」

れんは「自分で切る」と口元まで出かかったところを、飲みこんだ。潔く切れればよいが、中途半端になってしまつと未練と思われる。

（そう思われるのは、いやだわ）

春時に任せて切り落としてもらうほうが、ましというもの。れんは黒い数珠を両手の指にかけ、包み込む。目を閉じ意を決し、きゅつとくちびるを引き結んだ。

「おまかせします」

春時は小刀を抜いた。

頭の頂点に軽い振動が伝わる。見ることはできないが、伝わる振動で分かる。髪がそぎ落とされてゆく。そしてひとふさ、ふたふさと、髪の束が床に落ちてゆく。

（軽くなってゆくわ）

髪が落ちるたび、頭が軽くなる。

（今までなにか、重いものを背負っていたみたい）

梅雨のころの湿り気のように、望まぬのに肌にまとわりつく。重くてわずらわしい、正体の知れぬなにか。今まさにそれをふり払っている、そんな気がしてきたのだ。頭が以前より研ぎ澄まされたようにも思えてきた。が、

逃すものか……

突如、女の手がむずと後ろ髪をつかむ。  
れんが息をのんだ瞬時、周囲は闇に満ちた。  
れんはただ一人、女の声を聞く。

けして逃さぬぞえ……中將内侍……

## 第二話 落飾（三）

目の前はただ漆黒。手を伸ばしても何も触れることなく、ただ空を切る。

（これは）

れんは自分に言いきかせた。

おかしい、これは現（うつ）のことではない。先程までは昼だった、夜のわけがない。

春時もいきなり姿を消した。

そんなわけがない。迷ってはいけない。

呪詛。

忌まわしいことばが頭をよぎる。

（こ、こんなときは、流されてはいけないのだわ）

気をふるい起こして闇のいずこかに焦点を定め、問いかける。

「ど、どなたです。わたくしの、髪を」

髪を切るか。おのれまんまと逃げおおせるところで……

女。

その声、れんには聞き覚えがあった。

しかも記憶に新しい。日がな刻まれつづけた記憶に。

頭が重い。

れんは半ば無理やり首をかたむけ、後ろを見やる。

「……」

声が出ない。

切られようとしている最後の長い一房。それを、白魚のような手がしっかりと握っている。

さらに片手が闇より現われる。れんの首に絡みつく。

いや逃さぬぞ中将内侍。

「は、は……」

両の腕を包み込むのは艶やかな朱の衣。伽羅（かろう）の香り芳しいその衣

の主は……

「ははうえ継母上さま！」

さくり、と最後の一房が落ちた。

「しばらくは我慢願いたい」

れんはしきりにまばたきした。

今は昼だ、ちがいない。

（夢からうつつへ、戻って）

春時が刀をさやに収め、怪訝そうにれんを見ている。

「れん」

「ええ、あ、はい。いいえ」

れんはあわてて首を横にふった。

「我慢など。すっきりしました。長い髪は動き回るのに難渋します」

「あまり動き回られても困る」

「あつ、そういえば」

春時はまた、ため息をついた。

「よろしいか。戻るまでの間ここにとどまり、動いて人目につくことのなきよう願います」

「はい」

「それから、人が来てもじっとしていること」

「はい」

「もし見つかっても人を待っているからこのまま待たせて欲しい、と頼むこと。自分のことは決して語らぬこと」

「はい」

れんは素直にうなずいた。

不審の目をむける春時だったが、結局は時が惜しいとばかりにさつさと小屋を出て行った。

去り際に、馬が荒い鼻息を吐いた。

数刻の間。

れんは筵むしろの上にぼつねんと座ったままでいた。

「まただわ」

ようやくして、ぽつんとつぶやいことには。

「また、置いてけぼり」

とはいえ、今度はあまり不安はない。

昨晩はひどく不安だった。「置いて行かれるのでは」と懸念したし、「置いていかれたらどうしよう」そればかり考えた。真夜中でもあつたし、人里はなれた破れ屋にいたためもある。なにより、春時がどんな人間か分からなかった。逃げようと連れ出されたが、本当に逃げているのか、それとも罠なのか。今は信がおける。みずからに害をなすものではないだろう。まだはつきりと人柄をつかんでいないが、悪人ではない、とは信じている。

「わたくしのために、破れた袖とお髪くみをたずさえて行つたのですから」

れんは破れたすそをたぐった。

髪と同じく、証拠とするために破つたあとだ。

「置いてけぼりじゃなくてお留守番。ことは間違つてはいけないわ」

じいっとしていると、昨日の晩が思い出される。

夜通し奔り抜けた　まさに激動の夜。

自ずから目を覚ましたら春時の襲撃を受け、かわしたら手をつかまれ、逃げよと誘いかけられた。ふり払うこともできず馬上にあれば、いつの間にやら泊瀬はつせの谷。廃屋を一夜の宿とすることもなく、さらに逃げねばと山中を歩き、八条王とかいう凶漢たちに囲まれる。見知った人々であつたらうに躊躇もどろなく、春時は斬り捨てた。

「思えば春時どのは」

そついう人なのだ。

「わたくしを、殺しに」

信じていいのだろうか。本当に……？

そう考えると不安が身に刻まれた恐怖に変わる。にわかには震えが来、止まらない。

## 第二話 落飾（四）

（なにを今ごろ恐れているの）

右手の震えを左手で抑え、唇をかみ、無言で自らに言い聞かせる。  
（わたくしは今、きちんとここにいて、息を吸い、吐き、つまりぬ  
ことに思いをいたし、今のありようを迷っている。

わたくしは今、助かっているのよ。あのお方はわたくしを助けにく  
れたのよ。なにも恐れることなどないはしないわ）

落着きなさい、と声に出さずに命じた。

掌中の数珠を揺らしてみろ。

かち、かち、と石がぶつかる。

そのわずかな音だけに耳を傾ける。

やがて 自分の吐息に気づくと我にかえる。れんはてのひらを  
広げ、数珠を眺めた。からだの震えは知らないうちにおさまってい  
た。

軽いため息をつき、ふたたび思慮を重ねてゆく。

「そうだわ、はじめにわたくしが襲われたときのことだわ。わたく  
しが、春時どのの刀をかわせるはずがない。春時どのの気配に、眠  
っていたわたくしが気づくのも不自然なこと。あれだけの人だもの、  
何人も敵に回して切り抜けられる、そんなお方だもの。気配を絶つ  
ことだって、実は造作なかったのでは」

れんは手をきゅつと握り立ち上がった。

顔を下げたまま手を口元にあて、ぐるぐると土間を歩き回りはじ  
めた。

「こうは考えられないかしら……春時どのわたくしを観察する時  
間を得ようとした。この眠れる女は本当に横佩大臣の郎女、三位中  
将内侍であろうか。この邸よりつれ出すべき女であろうか。いざい  
ざ、見極めん！」

そして、れんはぴたりと動きを止めた。

「ええ、これなら、きちんと説明がつかますね」  
自分の推理に満足したのか、ほおがほころぶ。

「なんにしたって、怖がっているだけでは始まらないわ」  
れんはそう自分に言い聞かせると、顔をひきしめ直し、腹に力を  
いれた。

きゆるる……。

おなかが鳴った。

「いろいろ考えたら、おなかが減ったみたい」  
さっそく干し飯のお出ましらしい。

水を用意せねばならない。器は、春時が置いていった一式にある。

「水は筒にあるけど」

外にもある。

「水はかならず要りますものね。筒の水は夜に置いておくとして今は。裏にたしか、しみずがあったわ。明るいうちはあの水を飲みましょう。夜に出歩きたくはありませんもの。」

ほらほら、やっぱり、春時どのおっしゃる通り、ここで、静かに  
じいーっと、なんてしていられるわけないわ」

れんは喜々として独り言を述べては楽しんでいた。

すでに静かに、じいーっと、などこれっぽっちもしてはいない。

「そうだわ。外には干し飯のほかにも食せるものがたくさん、ある  
のじゃないかしら。草とか、草とか、草とか」

草の名がとつさに思いつかないが、自信たっぷりだ。

その自信の根拠は、彼女なりに確固としたものがある。

ものごころついたときから、母・紫御前は病の床にあった。幼い  
れんは医師の薫陶を受け、母に薬湯を煎じていたのだ。

「身分の低い者のすることですよ」

と諭されても、れんはかたくなに煎じつづけた。

父も困った顔で小さな姫に理由をただしたものだ。

「どうしていうことを聞きわけないのだね」

れんはうまく説明できなかった。



どうしてもやらなければと、つよく信じていた。

最後にはみな、あきらめてくれた。薬湯より祈祷を信じていたし、  
姫が涙に袖をぬらし続けるよりはいいと思ったのだ。

わがママを通した理由、いまのれんは分かっている。

（母上がわたくしを授かったとき、夢で観音さまが『子を授ける代  
わりに母上のお命をお縮め申しあげる』とお告げになった。母上の  
お苦しみはわたくしのせい。だから、みずからの手で母上をお救い  
してさし上げたかったのだわ）

あどけない姫だというのに、れんは懸命に学んだ。

最初は薬師の言う通りにしかできなかったが、しだいに自らの判  
断も交えることもできるようになった。さらに興味が深まると唐土<sup>もろこし</sup>  
の薬書『新修本草』もひもといた。身近にいる家司のむすめにも処  
方したことだつてある。

「食せるものも、お薬になるものも、きつとあるに違いないわ」

ない状況などいつさい考えていないらしく、

「どんなものがあるかしら、楽しみだわ」

と、期待いっぱい外に出てゆくれんだった。

## 第二話 落飾（五）

れんはまずしみず、つまり井戸から水をくんだ。

水を満たした桶おけは重かった。昨晚の琴など比べ物にならない。

しかも、くんだまではいいが疲れきってしまった。小屋へ運ぶことはあきらめ、その場にしゃがみこんで手ですくい飲んだ。いつでも全て飲みきれず、井戸に水を戻したほうがいいのかどうか迷ったあげく、少しずつ周囲にまいた。

「今度からは、手間でも飲む分だけくみましよう」

今回学んだ教訓である。

それから小屋から離れ野に出た。食するための草をつむためだ。

「これはどうかしら」

しゃがみこみ、目の前の背丈の低い草に手をのばしたそのとき。

「食えねえよ。腹こわすよ」

どこからか声が出た。

顔を上げ、あわてて周囲を探るものの、人はいない。

すると、また声がかかる。

「ここだよ」

自分のひざ元だ。れんは目を丸くした。

そして、見下ろした地面に声をかける。

「あなたなの」

「そうさね」

間違いない。声の主は、れんがつもとした草だった。

すると右手からまたしても声がかかる。

「私なら食べてもいいよ。どうぞお取り」

ひと回り大きく育った草が、淡く小さな花を揺らしていた。

「あなたは」

「蓬よもぎ。ゆでたら美味しいわよ」

れんは少し考えた。

「あなたが蓬だというのは承知しておりますが、なぜ話せるのか尋ねたかったのだが。」

（まあ、いいわ）

れんは思い直す。

昨夜までの緊迫した事態に比べたら、頭を悩ますほどでもない。

れんはのんきにそう考えた。

「蓬といえば」

れんは記憶を探った。

「煮出した汁は化膿止めになるし、消化にもいいし、お通じの悪い時には煎じて飲んだらいいし。乾かしておけば灸治きゅうじにだって使えるし。いくらかお薬をつくっておこうかしら」

つくって……。

れんは思い悩む。

「だめだわ」

「どうして」

「だって、あなたをつんだら、なんだかわいそう」

「かわいそうでもなんでもないわ。根さえ抜かねば、また伸びるもの」

「そうだよ。伸びるんだしさ」

ほかの草も横からすすめる。

普段、薬を煎じるのに草をすりつぶしている。

なのにいまさら「かわいそう」だなんて、変な話だとれんは思う。でも、今はいつになく後ろめたい。

（お話してしまうとなんだか。ふしぎというか、困ったものね）

他の命のかけらをつむのは、健やかであるため。これまでも気づかず命をもらい、健やかに過ごしてきたのだと思うと、れんはなんだか申し訳なく感じた。

「では、つみますね」

と断わって茎に白い指をのばした。

引きちぎる音がかすかにだが、耳に残った。蓬が「痛い」と小さ

く泣いたような気がする。

蓬も摘まれればその身を断ち切られ、痛さに泣くのでは。

「ごめんなさい、ありがとう」

蓬は返事をしなかった。

そんなれんの姿を、野辺の路から見つめる者がいた。

竹籠を背負った女だった。頭を布で覆いながら髪はほつれ、すりきれた袖からのぞく色の濃い腕は、泥が白くこびりついていた。

「どこかの貴きお方じやろうか」

それにしては供もつけずにひとり。女は、何度か貴人が山を越えた寺社に参詣するようすを眺めたことがあるが、かならず目を見張るようにきらびやかな行列で、しかも車や馬を連ねていたものだった。このようにひとりで座っていようはずがない。

なにより、玉のように可憐な顔立ちの少女が草と語らうようすは尋常ではない。人ならぬ身であるならば天神地祇の類いか。

「もしか、天女が」

れんは立ち上がると視線に気づいた。

しまった、と思った。

女はふらふらとひきつけられるように近づいてくる。

「もしかあなたさまは」

れんは身をこわばらせた。

（どうしよう。逃げる、小屋の中へ逃げれば）

「もしか、天女さまではございませんか」

「……はい？」

れんはあっけに取られた。

「とんでもございません、わたくしが、天女さまだなんて」と、細かく首を振ったそのときである。

ぐうつ……。

と腹の虫が大きく鳴いた。

## 第二話 落飾（六）

れんは、自分のおなかをじつと見つめた。次いで女を見た。

女はどこか陶然とした目でれんを眺めている。彼女の目はきらきら輝き潤んでいた。

れんは全く当惑し途方にくれるばかり。

（ど、どうなっているの）

邸にいたところの中将の姫としてなら納得もしよう。よく手入れされた長いぬばたまの髪を結び上げ、華やかな単衣を重ねてまとった姿なら。

だが今は、髪をばさりと短く切ったあられもない姿。

（どうして、こんなことをおっしゃるのかしら）

それゆえか、

「おながが空いておるんですか」

「はい」

反射的に答えてしまった。

（ああ、なぜ答えてしまうの！）

れんは自分のまぬけさ加減に頭をかかえなくなった。

「さようでしたらわが家においでくだされ」

「そ、それは」

困ります、とも言い難かった。

（断ったら、きっとひどく落胆なさるわ）

もとより好意を袖にするのはあまり気が進まない。断り方も知らない。

一方で、去りぎわの春時が残していった言いつけが、幾度となく頭の中でくり返される。

人が来てもじつとしていること。

（無理！）

れんは必死にいいわけを探した。

（ええ、大丈夫。よこしまな考えをもつ方ではなさそう、ですもの）  
根拠無しだが。

ただ、目の前の人から受ける印象、それは素朴で穏やかで清々しい心地よさだった。

この人は疑うべくもない方だ、とれんは思った。  
というより、この期に及んで疑いたくなかった。

「お尋ねしてよろしいですか」

「へい」

「あなたさまの館は、ここから遠くはございませんか」

「いいええ、すぐそこ、林を抜けてすぐです」

「さようですか」

それならちよつと行つて帰つてくるだけ。ちよつとくらいなら。

「では、お連れくださいませ」

女の顔に無邪気なよろこびがあらわれた。

断らなくてよかった、とれんは微笑んだ。

荷を下ろした室からまた杉林に入り、坂を下りてゆくと、小さな集落があらわれた。そこは狭隘な谷間で、北側にあたる山の中腹にできた狭い台地に数戸の集落が身をよせあっている。女はその集落を迂回し、さらに道を下る。

「ここは、なんと申すところですか」

先を歩く女の背にたずねた。

「吉隠きこんの里です」

「ここが……」

吉隠とは歌に聞く里。

そして幾人もの皇子、皇女たちが葬られし岡。

降る雪はあわにな降りそ吉隠の猪養の岡の寒からまくに

やがて冬を向かえればこの山々に守られた里は、雪化粧に彩られるのだろうか。

記憶にあるというだけで、どこか不安も少なくなる。不思議なものだ。

「あなたはなんと呼びすればよいでしょう」

「きよく」

れんは名乗り返そうとしたが、聞かれるまではと思い直した。

自分のことは決して語らぬこと。

## 第二話 落飾（七）

椀の中の、華やかに赤いものは猪の肉らしい。青いものは山野の野草、蓬もあるかもしれない。れんには得体の知れない小さな穀類も、ところどころ団子のように固まっていた。

れんは一日、なにも口にしていない。山を縦走したり乗馬したりと、常にはありえぬほど動き回っていたから、緊張のほぐれた今となつては空腹が耐え難いほどだった。しかしそれでも「獣の肉は」と二の足を踏む。

見てしまった猪の頭。それはまさしく死骸だった。

血にまみれ、魂の抜けた屍。毛皮を剥いで、赤々とした肉と脂を削ぎとる。

それがこの椀の中の猪の肉。

あれを口にするのかと思うと、吐き気をぶり返しかける。

とはいえ、いびつな椀からあがる湯気。汁椀のぬくもりも指先そして全身へと伝わり、気がつくときと安心しきってほっとしている。その一方、相反する惧れと罪悪も感じている。

（そうよ。肉さえ食べなければ）

れんは汁をすする。

ほのかな甘みと温かさが口にひろがり、胸に流れこんでゆく。

「いかがでしょう」

「……あたたかい」

「それは良うございました」

きよくがうなずいた。

「今日は天女さまがいらっしやるから、神さまがご用意なさったんじゃないかなろうかと思うとるのです」

「神さまが」

「へえ」

なんて穏やかな顔をなさるのだろう。



れんはそう思いながらきよくの言葉に耳をかたむける。

「猪がかかって葉がたくさん採れてこれだけものが食えるようになったのは、天女さまと神さまのおかげです」

「いつもは、どういったものを、食されているのですか」

「この、粟をうすめて煮たもんです」

きよくは椀の中の穀類の固まりをかきまぜた。

「それを、二食」

「へえ。冬の終わりにはそれもなくりますがねえ」

れんは器の猪肉に視線を落とす。

いつもの食事は　一汁二菜、すなわち汁物におかずが二品ついていたはずだ。それに米の蒸し飯。季節だからといって二食を欠くことはまずなく、たまに一日一食となることがあったのは、継母の意地悪のせいだった。育ち盛りのれんは一食を抜いただけでも辛く思ったものだ。

「それで、足りるのですか」

れんが心配そうに尋ねると、きよくは穏やかにうなずいた。

「足りる足りぬと言うても、ねえときははねえですからね」

「……」

「どんなにひもじくとも、切羽つまってもうだめだというときには、必ず助けてくれなさる。だから今、こうしておれるんですわ」

れんは再び、椀より立ちのぼる湯気を眺める。

（ほんとうに、肉食は悪いことなの？）

戒めや禁令に沿えば確かに悪とされている。

では「神さまがくれたもの」とすすめるきよく親子は悪業を勧める悪人であり、れんが拒んで口にしないのは戒めに従う善行なのかいいえ、そんなはずはないと、れんはかぶりを振った。

この人々は粟のかけらで日々ようやく命をつなぎとめている。それが獣の肉を得たのなら、腹をいっぱい満たしたい、そう思うのは自然なこと。しかも天皇や殿上人、れんのような高貴の者の殺生だからと獣肉食を禁じることのできる　豊かな暮らしは、租

税を収めた残りもので生きている、きよくのような民が支えている。

（食う元手……そうだわ、これが）

気づかず、勝手に獣の肉食を悪と決めつけてきた自分の高慢さ。

（では、どこからが悪で、どこまでがそうでないの？）

再び昨晚を思い起こした。

杉木立の暗闘。かつて仲間として関わった人の命を奪う、春時の姿。

れんは改めて思いをはせる。まぎれもなく自分が「奪わせた」のだ。殺せとは口にしていない。願ってもいない。しかし、こうして自分が生きているのは、数々の命を間接的にしろ、奪ってきた延長にある。

「……るときどの……」

「ほう？」

きよくが心配そうに顔をのぞきこんで問う。

「え」

れんはつくろうようにあわてて微笑んだ。

「ええ、なんでもございませんわ」

そして猪肉を口にしよう、と決意した。

（早く戻ってきてください、春時どの。わたくしは、あなたに謝らなければ。あなたを疑ったこと、ほかにいろいろ、謝らなければ）  
口にした猪肉は、ことのほかさっぱりとして甘かった。

### 第三話 散華（一）

横佩大臣よこはぎのおうじが家の家司けいし・堅虫かたむしの律義ぶりはつとに有名であつた。

筒形に巻いた漢籍を入れ、積み上げた箱を背にし、謹嚴かきそのものという顔で端座している。夜というのに衣乱かされはなく、襲かさねの色目さえ氣遣つていた。応対する相手が、たとえ出自も知れぬ若者であつたにせよ、だ。

「姫はご無事です」

夜半、春時は堅虫のもとに訪れ、ことの次第を告げた。照日御前に姫の身柄の遺棄を依頼されたこと。姫は無事であること。そして、れんから預かつた上衣のあしぎぬの端切れ、切り落とした髪かみの束を示し、その身は無事でありこれらの品も姫の了承りょうしやうの上の持参、とつけ加える。

「これぞまさに証し。姫はいずこに」

「陰謀の正体をつかみ姫の安全が確保できるまでは、居場所は明かせません」

「そなた自身がかの御方の手先ではないとの証座は」

「証せねば、姫を救う手だては講ぜぬ、とでも」

堅虫がはじめて顔を曇らせた。

さらに春時は冷淡に言いはなつ。

「これを偽りとみるかは貴殿のご器量次第」

「そこまで申すなら了解するしかあるまい」

堅虫の声は平静なままである。

「ならば卒爾そつじながら尋ねたい。これよりいかにする所存であるか。私はなにをすれば良いのであろうか」

「私は姫を始末したと伝え、かくして油断を誘います。その間に貴殿おていには、女狐の悪事の尻尾でも見えぬか否か見張つていただきたい。大臣おていどのの耳に入る中將の姫にかかわる悪口雑言も、気づかれぬようにうち消すように努められたい」

「かの御方は疑り深い。ことばのみでは信用すまい。錦や髪だけでも不足とみゆるが、いかがであろう」

「おおせの通り」

春時が眉をよせた。

堅虫もまた、顔を歪める。

沈黙が続くなか、堅虫は目の前の若者をじつと見すえた。

彼の心を占めていたのは、今後の策よりも春時という男だった。

いや、もつといええば 惚れこんだのだのかも知れない。

貴殿の器量次第、とせまられたときには「この若造が」と思う一方、堂に入つたものの言いに納得させられた。それに加えて人品卑しからざる凛々しくも端正な面立ち。身分を隠したいずこの子弟ではなからうか、とさえ思う。

さらには「照日御前は信用せぬ」とつっぱねると、彼は率直にみずからの策の欠点を認めた。若者にはありがちな、賢明さをことさら誇ろうとするがゆえの危うさもなく、思慮深い。切れ者だ。

「堅虫どの」

春時がようやく口を開くと、堅虫は眉をあげた。

しかし春時はことばを継がず、逡巡する。

そのときだった。几帳のむこうより、

「父上」

と呼ぶ、か細い声が届いた。

「父上、お話が」

「なんだ瀬雲、客人在るのだ。あとにしなさい」

「……あの」

少女の声だ。ひどくふるえた声だった。

春時が一礼して堅虫に告げた。

「私にはおかまいなく」

「いいえ」

堅虫は憤激し声を荒らげた。

「どういうことだ、人払いしてよせつけるなと申しつけたはず」

「でも……」

少女は明らかにおびえていた。

しかしその声、春時にはなにか切羽つまった色も帯びているように思え、

「……では、私はひとまず退出いたします」

「待たれ、しばらく」

春時は几帳に向かい呼び止めた。

「今は一大事、わがむすめになどかまう時では」

「いえ、何か。どうぞお話を」

春時は座を立ち、几帳に歩みよった。

几帳のかげには白い寝衣に朽葉色の衣を羽織った少女が小さく座っていた。

「お邪魔いたしました」

春時のあいさつに瀬雲は顔を上げた。

ひどく顔が青白い。手もふるえていた。

（病持ち、か）

油皿の炎に照らされた瞳は、今にも涙をこぼしそうなほど潤んでいた。泣いているのか、それとも熱に侵されているのだろうか。瘡おこりを起こして寒気がし、ふるえているのかも知れぬ。そんな身体をおして話があるという。よほどのことに違いない。

（れんは無事だろうか）

村の小屋に残してきた中将の姫を、ふと思いおこす。

姫は狙われている。それにあの姫を一人にしておく、なにが起こるか分かったものではない。できるだけ早く帰らねば。

「堅虫どの」

ふり返って春時は言った。

「少し思案してまいります。つきましては、堅虫どのにお願いが」

### 第三話 散華（二）

春時は早朝の都大路を急いでいた。

ふところには堅虫より手に入れた上等の絹。東国の金を一袋。

さすが右大臣家の家政を預かるだけのことはある。これで一生涯、寝て暮らせるというもの。

（このまま雲隠れしてやろうか）

なんて思うと、その次にはれんの顔を思い出す。

ほがらかで無垢な笑顔を。

「……ふん」

なんて人のいい奴だろうおれは、と春時は自嘲した。

腹蔵はあった。

ただ、堅虫に伝えるのはためらわる、そんな策だったからだ。

目指すは「ヒトヤノツカサ」。

知る人があそこにはいる。しかし知る人がいることを堅虫に知られたくない。

それもまた、策を語らず邸を出た理由のひとつであった。

都の左京、人どおりの少ない寂しげなところに「ヒトヤノツカサ」はあった。刑部省ぎょうぶしょうの管轄で、奈良の都における犯罪の刑罰をつかさどる役所だ。

門の前には桤せんたん檀の木が落葉後というのに、実をつけたままだった。門柱に掲げられた看板には「囚獄司しゅうごくし」とある。薄汚れた門柱はところどころ腐食し、金具には緑青の錆が浮いている。そのくせ扉は幾重にも閉じられており、厳重に内外の行き来をさえぎっていた。

春時は懐刀を取り出した。

金色のさやに無骨な革張りの握り手。異様な風格を持つ逸品である。

春時は複雑な表情で、手の中のそれを見下ろしていた。

（どこの馬の骨、とあしらわれるよりは）

門番に懷刀を見せ、素早く口上を述べる。

門番が走り、やがて入れ替わりに初老の男がゆつくりと戻ってきた。

「ご案内します」

無表情で告げた初老の男のあとを追った。

朝は早かったが、竹簡ちくかんの束を抱えた数人の仕丁しちやうとすれ違った。その束の多さは、この「ヒトヤノツカサ」で扱われるべき刑の執行数をあらわしている。もしくは執行後、処分すべきモノ・ヒトの数。あの竹簡にある名のうちいずれかは、夕刻になれば門外の梅檀に首がさらされるのかもしれない。

石造りの獄舎へとつづく暗い廊下を横目に、春時は奥へと歩く。つきあたりの房に案内されるまま入った春時をむかえたのは、中年の、顔の丸い男だ。机の上の竹簡を持ったまま、顔を上げて春時に声をかけた。

「ああ、なつかしい」

「お久しぶりです。善永さま」

「東大寺の大仏開眼の儀以来かな。あれから数年、あんなことがあってどうしているのか気にはかけていたのだよ。面差しは変わらぬが、すっかり大きくなり……」

囚獄大令史・善永は言葉は丁寧だが、態度は横柄だった。

（後ろ盾を失った若造には礼儀さえも惜しい、か）

春時はただ慇懃いんきんにあいさつを返した。

「諸国を回遊し見聞を深めておりました。無沙汰をおわび申し上げます」

「それで突然、しかもこんな朝早くどうしたというのかね」

「かつて亡主のもとに貴殿がいらっしゃったことを思い出し、わらをもすがる思いで参りました」

「罪人の知り合いでもいる、という話かね。でも判決の後だとうしようにできないよ。もう竹簡を削り終えてしまっているならなおさら」

「いいえ、そうではありません。このことは内密に願いたいのですが……どうかお譲り願えないかと頼みにきたのです。罪人のしかばねを。それも身元知れぬ若い、できれば見目のよい少女を」

善永は薄気味悪そうに春時を眺めた。

「どういう」

「東国の土産です」

春時は懷から親指ほどの袋を取り出し、善永の目の前に置いた。さくり、と耳さわりのよい音がした。

「これは」

「大仏の年に献上されたものと同じ」

天平勝宝元年の東大寺での毘盧遮那仏開眼供養、これと同じ年に陸奥より黄金が献上されている。ありがたい大仏の開眼を演出するこのめでたい話は、世に広く知られ、ましてや都の役人なら末端まで知ってしかるべきであつた。

（これ以上説明させるなよ）

春時は無言で訴えた。

小役人が砂金袋など、まともに働きつづけたところで一生に一度拝めるものではない。

こんな物を持ちこんだ背後には、いずこの権門がついているか、もしくはもつと別の何か、があるはず。すこし目端の利く役人ならば、そう勘ぐるところだろう。

善永ののどが動く。ちらと春時を見やる。

春時は「手早く黙って受け取れ」と念じつつ、だめ押しを述べた。

「司の物部のみなさまにぜひおとりなしを」

「了解した」

善永は袋をさつと袖口に隠し、

「ほかでもない、我が身にこの職を世話してくれた、亡き大將軍さまへの恩返しのためで引き受けよう」

と細かく何度もうなずくと、部下の物部を呼びつけた。

ほどなく現れたのは、門からここまで案内した初老の男だ。彼に



案内されるままついてゆくと、牢獄の裏手の広場に出た。広場の真ん中には石畳があり、おんぼろの台がすえられている。落葉した木陰の裏に肉塊がのぞく。

刑場だ。

春時が物憂げに木陰に目をむけていると、一抱えある麻の包みを手渡された。初老の男は終始無言だった。春時も口を閉ざし、頭のみ深く下げた。

その足で、右大臣邸に向かった。

（堅虫どのに）

報告は必要だろう。

（いや、事後報告でいいか。なにより時間が惜しい）

すっかり日輪が中空に輝いていた。れんを右大臣家の屋敷よりさらった、三日目の朝のことである。

### 第三話 散華（三）

横佩大臣豊成公の室、照日御前。

美しい女性である。整然とした目鼻立ちはどこか作りものめいており、冷たく輝く、冬の夜の星のような印象を与える。

照日御前はその美貌を牡丹図の扇で顔を隠し、目を細めていた。

春時は庭先に平伏している。外にいてもなお香料の香りがつよく匂った。

というのも、照日御前は床几でも御簾でもその身をへだてず、賤しき輩である春時に、じかにその姿を見せているからだ。家にある女がなにも間に置かず男と対面するなど、異例のことである。

「遺棄せよとのことでしたが、かような仕儀とあいなりました」

春時は麻の包みを板にのせてさし出した。

尊貴の方の首実検、本来ならば美酒をひたした唐櫃に納め、御首をなくさめるもの。だが、そんな敬意はまったく払わぬぞんざいきわまる扱いを春時はしてみせたのだ。

照日御前は眉ひとつ動かさずにいた。一方、御前の横に侍る小侍従なる女房はあからさまに身をひいてのけぞった。さらには金切り声でさわぎたてた。

「おぞましや、御前様にさようなものをお見せできようか」

「では証拠の品は、髪と、上掛のあしぎぬくらい」

「それでよろしい」

音は低いが、どこかなまめかしい。

その声の主こそ照日御前であつた。

御前は桧扇をもつ手をゆらりと上げて、小侍従に指図する。

小侍従は立ち上がって歩み出、春時を頭上から見おろした。

春時は緩慢に頭を上げて半開きの目で小侍従を見、首を後ろにやっつて代りに髪と錦の片をのせさげた。受け取る小侍従は春時の手にわざと触れて、彼の顔をじつと眺めた。

「中将内侍はいかがであつた」

御前の問いに、春時は淡々と答える。

「お幸せな最期」

幸せじやと　照日御前は不愉快とばかり、さらに目を細めた。

「一晩明くるまで、楽しみました」

照日御前の眼が輝いた。冷やかな表情に垣間見える微笑は、まるでねずみを捕らえた雌猫のようで、ひどく残酷な印象だったが、それはまた凄惨なまでに美しく見えた。

その微笑をして彼女は雄弁にその胸中を語る。

観音菩薩の慈悲により生を受けたという清らかな少女、それを盗賊まがいの男にさらわせ、凌辱させた上で命を奪った。そこまでしたことを明かしてようやく、照日御前は満足をしめた。捨てよとは命じ、家から追い出し「中将の姫」を消した。しかしそれだけではあきたらず、が、心底には殺意があり、しかも女として姫を徹底的におとしめて存在を消し去りたかったのだ。

あらためてこの女の底深い怨念を見せつけられた思いがし、春時はわずかに眉を歪める。だがその顔はのぞかれまいと、ゆっくりと低頭した。

「ときに、八条悪王はいかがした」

「死にました」

照日御前はいかにも満足そうに微笑した。

「春時とやら、苦勞であつた」

厚く褒美をとらせよと命じる声に次いで、すそをはらうきぬ擦れが春時の耳に届く。御前は室の奥へと下がったのだらう。

首のことには触れずに。

春時の顔にもじわりと笑いがこみあげてくる。

それを認めた小侍従が不審顔で言った。

「なにがおかしいのです」

しまったと舌打ちしたいところを、

(ここは言いくるめるが無難)

と、あえて春時は冷笑を添えた。

「八条王を出し抜いたことを驚かないのには」

「御前様は見抜いておいでよ。凡下の目にあらず、盗人の頭ごときの下風に立つ者ではないと」

春時が顔を上げ小侍従に険しい目を向けると、

「おお、怖い顔なこと」

と言いつつも、小侍従は軽やかに笑み、媚びを見せた。

「それより褒美をいただきたい」

「お立ちなさい。案内しましょう」

### 第三話 散華（四）

通された部屋はどこも外に面していない板間だった。

中には葛籠くわろうや唐櫃からびがいくつも置いてあり、その間を人が通り抜けるように狭くるしい。日がささずほの暗く、人が通ったとしてもさつと身を隠せるその空間は、真昼の密会に適しているといえそうだ。この館に春時は数度出入りした。

だがこのように中にまで入り込んだことはない。

「小侍従どの、通してよいのか。お宝狙って押しこむぞ」

「ふだんは大したもののは置いていないわ」

小侍従はそう答えて流し目をくれた。

「おれの名を知っていたな」

「御前様が？ ええ、そうね」

「なぜだ。名乗った覚えはない」

お前がもらしたのか、と春時は小侍従を問いつめた。

名を知っていたことはまだいい。だが、小侍従が言った「凡下の目にあらず」は、春時にとっては捨て置ける話ではない。自らの身の上を調べられたのでは……。

「意外。私とのこと、名を売り込むためでは」

「右大臣家がいかなるものか聞かせ給うただけだが」

小侍従がふうん、とどうでもよさそうに納得した。

「お尋ねになつたので答えたわ」

「御前が聞いた、と」

「後腐れがなければ良いのよ。その点、のちのちこの件を持ち出して厄介ごとになりかねない、卑しげな人相の自称王よりは、その後ろで黙って低頭しながら剣呑に目を光らせていた、そなたの方が良いと」

「どうも春時の懸念は杞憂らしい。

「それは目つきが悪いと暗に言ってるのか」

「黙つてると確かに怖いわね。口を開くと可笑しいけど……まあそれで御前様は、顔は覚えておられたので名をご下問あそばされ……ああそうそう、その銅銭もまとめて持っていて」

「姫の玉簪はどこに」  
たまかんざし

「その箱よ。物の怪に变じぬよう、丁重に埋めてしまつてちょうだい」

「その分の代をもらえればね」

「わかつてるわよ」

白いあしぎぬに巻かれた箱の中を春時は確認する。淡くなまめかしい白色の色合いと冷たい肌触り。玉を磨いてつくられた簪は、中将の姫十歳のころ、天皇より下賜されたという。春時は丁寧に包みなおし、ふところの奥にしまった。

「ところで春時。御前様への話、本当なの？ あの女になつてさえない、あてない中将姫なんか」

「年増に飽きた」

まあひどい、と小侍従は派手にそつぽを向いた。

「この埋めあわせ、今宵してくれるのでしょうか」

「褒美を独り占めしてこの身が危ないんでね、すぐに京を離れる」

「まあ、まことひどい人！」

褒美の品をまとめ終えた春時は、早々に庫裏くりを出た。肩越しに小侍従を見て素っ気なく答える。

「先知れぬ賊の一夜や二夜の密か事など、とつと忘れてしまふがいい」

「去りぬる秋ゆえに飽き果てられた、というところかしら」

小侍従は、強気に笑つてみせた。

### 第三話 散華（五）

かつて春時は小侍従から聞き出していた。

人に頼んでまで中將の姫を始末する、照日御前の心底とはいかなるものかと。

それはなぜか。

春時は家の内実を知りたかつたのだった。

なにが横佩大臣藤原豊成にとつて手ひどい打撃か、その中で春時が実現に動くことができるのはなにか。それを見極めたかつた。ために、賊徒の首領・八条王にも内密に小侍従に近づいた。

「御前様は以前は宮中に仕えておられ、従四位下、尚侍局しょうしきよくづとめでおられたの。ところが右大臣さまの正妻とおなりになって、先妻のご子息らをご覧になると、みな自分と同じか、位がお高くいらつしやる」

「中將の姫はたしか正三位下」

「ご子息の方々は宮中にお仕えですが、なかんずく姫は、琴を称賛されただけで三位、宮中に仕えもせぬのに尚侍局の中將というのだから、小憎らしいと思われたことでしょう」

「小憎らしい、とはいえ殺意までは覚えまい」

「良く思わない理由は他にもあつた。御前さまは男子をお生みになつたものの、右大臣さまが豊寿丸さまを可愛がられなかつた。中將の姫がいるからよ」

「三人の息子がすでにいたからではないのか。男子はこれ以上必要ないと」

「御前さまはそうお受けとめではなかつた。それもこれも、右大臣さまが亡き紫御前さまの面影を中將の姫に見出だしておいでだからよ。紫御前さまは皇孫にあらせられ、御前さまのご実家は橘氏、皇孫とはいえ臣籍だから、御血筋のうえでもかなわない。二重の意味での嫉妬を感じていらつしやつたことでしょう」

「それが原因にしては」

「いいえ、それも遠因ね」

「では何が」

「直接の理由は、姫が豊寿丸さまを殺したこと」

姫はまだ幼いはずだ。

なのに「殺した」とは、尋常のことではない。

「続きを」

「もとはほんの小さな恨みでしかなかった。でもそれが積年のうちに折り重なり、ついに御前さまは中將の姫に毒を盛ろうとお思いになった」

「毒殺を？」

「いえ、死んでしまうとまずいでしょう？ 量は加減するの。それにあの変わり者の姫ったら毒や薬には詳しいから自分でなんとかするわ。でも苦しむくらいはするでしょうから、おのが目の前でもがき苦しむのを御前様は見たかったってわけ」

それほど忌避されている中將の姫とはどのような姫なのか。

琴の手は評判だがそれ以外というと、この女の話からは悪印象しかいだけない。

まあ、その方が依頼の遂行 連れ去り遺棄するには、良心がとがめなくてよいが。

「だから御前様は姫を呼びつけて親子ともに甘いものを食すことにした。片方に毒を入れてね。でも企ては成らなかったわ」

小侍従は笑いともため息ともつかぬ、小さな息を吐いた。

「姫が自分の白湯を、毒入りの白湯を、こともあろうに豊寿丸さまに飲ませてしまわれたから。小さな若君にはお命にかかわる量だったのでしょう、その夜昏睡し、翌明け方にはあっけなくこの世より旅立たれてしまった」

「不運というほかないな」

「そうね、不運ね」

姫が豊寿丸を殺したとするのは無理がある。



そのことは小侍従も分かっているようだった。不運、とさりと  
言い切ったのだから。しかし、この女は主人である御前の面前では  
「姫のせい」と憤ってみせるに違いない。

「その非業の日から、御前さまは中將の姫をわが子の仇とお定めにな  
り、生霊におなりになるやもしれないほどの憎しみを抱いたとい  
う話よ」

明らかに逆恨みだ。

そう断じる一方で、春時は照日御前の心情も理解できた。

ひとを憎むということは、理屈を越えた話だ。意に染まぬこと、  
気に食わぬこと、他愛のないこと。それらが氷解することなく幾重  
にも積みかさなるほど、憎しみは増幅する。やがて膨張しおさえき  
れなくなった憎悪は、ぶつけるべき対象を手近な者に定めなければ  
消化しきれない。御前はその矛先を姫に向けたのだ。ほかの誰かの  
せいになければやりきれない悲嘆、それを姫を苦しめることで緩  
和し、やがて姫の存在そのものを消し去ることを選んだ。

（同情はするさ。だが、知ったことじゃない）

藤原豊成が溺愛する姫を陥れ、そして褒美を得る。

春時の興味はただ、おのれの利得のみ。

### 第三話 散華（六）

そう、春時はおのれの利得にしか興味は持たないはずだった。  
にもかかわらず……。

かつて寝物語にのせて聞かされた話。

それらを思い起こしつ、春時は河原にひざまずいていた。

見おろしているのは河原の盛り土。盛り土の下には、今しがた首と銭とを埋めたところだ。首の主は名も知らぬ若い女罪人。銭はあの世へわたるための手間賃と、地守神への礼金。

この女は右大臣の姫の身代りを果たしたのだ、せめて地中より向こうでは「姫」であればと、春時は堅虫より得た銭の大半を、首にそえた。おそらくはこの若い女が一生かかっても持ち得なかった額だろう。意味のないことかもしれない。自己満足かもしれない。

（この女がどんな罪でこのような結果に至ったのだろうか）

春時は無言のまま、漠然と思いをはせる。

つまらない盗み、殺し、あるいは冤罪。

女の首塚はいずれ訪れる明日の姿だ。いや、こうして葬られることさえなく路傍に果て、犬に食われて醜い姿をさらすのかもしれない。そんな末路を春時は恐れてはいないし、覚悟はできている。だが空しいゆく末だとは思う。

（れんなら經典でも読んだかもしれない）

中將の姫は毎朝長谷寺にむかい、經典をひらき唱えていたという。ならば、今生からの旅立ちにふさわしい教えをこの首に説けたかもしれない。

春時は送るべき經典の一節さえも思い浮かばない。

經典に書かれた仏陀の教えを知れば、往く魂は今生に迷いを捨て、仏のおわす苦しみのない楽土へと旅立てる、という。かつて都のある寺で若い僧から聞かされた。あれは自分の存在に苦しみ、行く末

を迷っていたころだった。ゆえにその話は春時の心をつよくとらえ続けている。かつての立場を捨て去った今でさえも。

（もし真実なら、その教え……）

春時は首をかるく横にふった。

早くことをすませて戻ろう。堅虫の元へゆき、後は褒美の品を今後の隠遁生活に都合のよいよう、さばかねばならないのだ。

そうだな、都ですべてをさばくのは危ない。道々で開いている市などを回った方がいいだろう。行く先を探られぬ程度に。そうしていると時間がかなり要る。愚図愚図している場合ではないぞ。

春時は立ち上がると今一度、盛り土を見た。

布にくるまれたこの首を見、こう口にした女を思い出した。

「おぞましや、か」

そのことばを口にしてにわかにわき上がる、吐き気がこみ上げるような激しい不快感、胸につく嫌悪の念。

この悪感情を早々に消し去るべく、春時はかすれた笑いをもらした。

「おぞましいのは一体、誰だ」

### 第三話 散華（七）

堅虫は自らの上衣をむすめにかけた。

涙にまぶたを濡らすことを、おのれに禁じた。

平城京は霜月ともなれば真昼も冷える。火櫃の中には冷たくなつた炭の燃えかすだけが残っている。堅虫はそれと知らず、ごく自然に指先をかざした。炭は燃えていず、指先を暖めるものもない、指先は堅くかじかんだままだった。ああ、炭がないのだ。しばらくして気づき、長い袖に腕をからませた。

春時が足音も立てず堅虫の寢所に忍び入る。冷たい指をさすりつづけている堅虫は、春時に気づかないままだった。

「堅虫どの」

堅虫がわずかに顔を上げた。

春時はなによりも先に、広げられた堅虫の上衣に目をやった。

「我がむすめ、瀬雲です」

唐突に堅虫が告げた。

その刹那、刑場の光景が春時の脳裏をよぎった。木の陰に隠れていた肉塊。青白い脚や、黒くくすんだ面、幾重もの筋が竹の枝で刻まれた体、横線と模様を入墨した腕。不吉な想像をすぐさま否定して頭から追いやった。

「看取つてやつてはくれませんか」

堅虫の顔に日がさすと、春時は軽い衝撃を受けた。

堅虫の顔は急に老いたかのよう。白っぽく乾き、目の下がふくらしみ、肩を落として小さく縮んでいた。昨晚の颯爽とした精気や意力がまぼろしのように残らず消え失せてしまっている。

春時はすすめにしたがい上衣を取った。

きつとそこには受け容れ難い事実があると分かっているが、正面から受け止めるために。

ああ、と嘆息が漏れる。

「瀬雲どの。どうして」

「聞いていただけますか」

春時はただうなずいた。堅虫はうなずき返すと、あなたが去った後のことです、と思いつめた口ぶりで話しはじめた。

「むすめは私にかく申しました。『私の首を差し出して下さい』」

堅虫の切り出しに、すでに春時は気圧されていた。

堅虫は紫色の唇をなめると、続けて語った。瀬雲は中将内侍さまと同じ年で、同じ背格好です。お顔も恐れながら、似ております。瀬雲の首を持参すれば御前様も信用するでしょう。

死ぬというのか、と当然のことを問う父親に、瀬雲はかぶりを振った。

「姫さまの妙薬のおかげでいのち永らえていたこの身です。中将内侍さまがいらっしやらねば病で先は長くありません。ほんのすこし、時期が早くなるだけのこと」

瀬雲の青白い顔はますます青くなった。しかしその唇には強い意志が、まなじりには固い決意が見える。堅虫は弁をつくして翻意を説いてみたが、瀬雲は肯首しようとしなない。刻を重ねたすえ、どう説きふせようと決意をくつがえすことはない、とみた堅虫はこれ以上、なにも口出しはできなかった。

「姫さまよりいただいた薬」瀬雲は笹の葉の包みを広げて話す、「多くを服せば体内の臓腑に力がかかり死に至る、朝夕にひとつまみずつ分けるようにと、姫さまはおおせでした」

その笹葉に乗せた白い粉末を、瀬雲は一気に口に入れた。

ささやきを春時は聞いた気がした。

いや、まさにささやきは確かに届いた。それは春時を心の底からふるえさせた。

「この首を、あのかたに……」

瀬雲の顔は静かにすべてを待つようだった。

その永遠に向かつて眠る姿は、服用後に背中から転倒し、喀血し

て息絶えたという壮絶さを認めることができない。

春時は、莊嚴とさえ感じる彼女のなきがらより目をそらせずにいた。

この親子に不幸をもたらしたのは、自分なのか。

春時の血にまみれた手と、研ぐほどに使いこまれ鋭い光をはなつ刀は、これまで幾つもの命を奪ってきたが、今回は罪業深い二つのものは使ってはいない。にもかかわらず　どうしてだろう、より深い後悔にさいなまれる。春時はひざの上で拳を握りしめる。

「私が参上したばかりに」

堅虫は首をふった。

「かように申されては、我らは救われません」

「しかし」

春時が苦渋に満ちた顔でつぶやいた。

「手をつった後なのです。替え玉の首を御前に……」

堅虫の目が大きく見ひらかれた。

「よもやその首、疑われはしまいか」

春時は顔をゆがめ、そしてさらなる後悔の念にうちのめされた。

### 第三話 散華（八）

十中八九、疑われよう。持参したのは瀬雲の首と 照日御前は  
聡い女だ。

瀬雲のことを隠すわけにもいかない。物忌みに障るからだ。

命ぜられた通りにすればよかった。「山中に遺棄して戻った」と  
言えば、それで照日御前の望みを果たせた。なのに首を用意して虚  
偽を告げ、それがよけいな疑いを招く種となるうとは。

いや、後悔ばかりしている場合ではない、と春時は思案する。

行動は一刻を争う。照日御前が嗅ぎつけ追っ手をはなつ前に、春  
時はれんの身柄を確保し逃げおおせねばならない。

「ともかく早々に失礼致します」

礼もそこそこに立ち去ろうとする春時を、堅虫はとどめた。

「しばらく」

彼は机に向かうと木簡を手にし、筆を走らせた。

「この簡を持って姫さまをお連れになり、難波津<sup>なにわづ</sup>へ」

「難波津」

「右大臣さまとなれば、かつての宮都には別邸<sup>つかさ</sup>がございます」

「つい先ごろまで、大臣ご自身は太宰府へ下らずお過ごしになられ  
ていたとか」

「左様です。その難波の別邸<sup>つかさ</sup>の司は我れの知己で、姫さまの御生母  
であらせられる紫さまにお仕えした者の縁者。姫さまをかくまっ  
てくれるに相違ありません。

そして我れよりは時宜をみて右大臣さまに事の次第を申し上げ、姫  
さまが晴れて都へとお戻りになれるよき折りをはかろうと思います」  
春時はまたも自分の浅慮に愕然とした。

襲いかかる魔手から逃れるのは喫緊の回避策で、あくまで当面の  
話。それが堅虫の思案だ。中將の姫が家を逃れるのは不自然で、邸  
で暮らせるよう尽力するほうが自然なのだ。なぜなら中將の姫は前

の右大臣の姫なのだから 家司である堅虫からすれば至極当然の考えだった。しかし春時は、逃れ続けることしか考えなかった。

春時は瀬雲の眠る姿に目をやる。

穏やかな顔で、悲壮な陰りはどこにもない。恐れもせず動じもせず、おのが身の最期を受け入れたのだろう。

そして堅虫。彼は認めたくない事実を受け入れ、別人のごとくやつれはしたが、判断力は衰えていない。

（それに引きかえ、前後なく浮き足立った自分は）

なんて未熟な、とおのれを責めたい。が、責めている時でもない。僭越せんえつな申しようかもしれないが」

春時は顔を上げた。

「この堅虫、右公様のご悲嘆が今ようやく身にしみて分かりました。瀬雲を失って初めて……ですから、姫さまには瀬雲の分まで、お幸せであっていただきたい」

堅虫は力をこめて言った。

「貴殿にお任せいたします。貴殿の元にあらば姫さまはご無事でいられる。信じております」

声が震えていた。春時にも無理しているのが分かる。

春時も無理に力をこめ、

「承知」

そう言った。

夕刻。

日は陰り、風が強い。

春時は都を発つ乗馬の背で肩を狭め、片手でつよく衣服の胸元をつかむ。

堅虫のことば 「信じる」ということば。

それは、思いもかけないほど大きい不安を春時に与えた。

（どうして俺を信じようなどと）

春時は苦しさに耐えかね、丘に至って馬をとどめた。



すすき原の向こうに都を望む。

日が昏くらくなり、風がさらに吹きすさぶ。晴天なら立ちのぼる炊かしぎの煙は厚い雲で見えず、また風でかき消えた。枯れすすきがあられ、はげしく揺れ動く。

早く都を離れよ、と心は急いている。

しかし春時は、まだ馬の背にあつて遠方を眺め、胸をつかんでいた。

継母が憎悪に身をゆだね幾度も殺そうとし、一方では瀬雲という家司のむすめが身を呈する。双方向に両極端な感情を抱かせ、春時に畏怖の念を起こさせた、十五歳の中将の姫。その中将の姫を自分に任せれば、無事でいられる、信じられるという　なぜ彼は明言したのか、自分にはきつと力不足だろう、ましてや自分の未熟さに気づかされたすぐ後なのだから。

重い荷を背負わされた。そんな息苦しさを春時は覚える。

それでも彼は、自らに言い聞かせるように低くつぶやく。

「決して無駄にしやしない」

枯れすすきがつぶやきを受け入れるや、彼らは再び、夕陽の中を疾駆した。

#### 第四話 蓬粥（一）

れんはひとり、朝の食事をしていた。

小屋の中はまだ暗く、かわらけに乗せたわらくずの、小さな炎をちらちら揺れている。れんはその光を時折確かめながら、食む音をかすかにもさせまいというように、ひっそりと食べていた。

春時が去り、二日が過ぎた。

れんの顔には疲れがみえる。夜もろくに眠っていない。

一日めの昼は食事こそ吉隠よなばりのきよく親子に馳走になり、火をもらって帰ったが、そのあとはすぐ元の小屋に帰ってきて、じっと帰りを待っていた。

（ここにいないくは、春時どのがおさがしになる）

れんは同じことばかり考えていた。

たまに違うことを考えたら火をじいつと見つめて、

（火も絶やしたら、わたくしではおこせないんだわ）

と思い悩むばかりだった。

きよくは親切だった。

泊まってゆくよう勧められた。

人を待っているので断ると、吉隠たきぎの里は夜は冷える、と新しい筵むしろを持たせてくれた。一番立派な薪たきぎに火をとめてくれた。

れんは返すものも持たない。だから読経をあげた。すると、きよくの老母は涙を流して喜んだ。老母は仏心厚い人だったが、経典は知らなかった。「ありがたや」と、れんに向かって手を合わせ何度も拝みさえした。

よくよく話を聞くと、きよくの老母は若いころ、美濃みの国の住人であつたという。若かりし日に将来を誓った恋人は、仕丁しちようとして労役を果たすため都に赴いたのだが、そのまま戻って来なかった。悲嘆に暮れ、美濃の十二面の尊顔を持つ観音菩薩に願いをかけて、恋慕う人を追うこと六年。彼女は吉隠の里にたどり着き、思慕つる

恋人と再会を果たしたのだった。事情は問わずとも知れた。彼は帰らなかったのではない、帰れなかったのだ。寄る辺なくその日の糊口をぬらすこともままならず、吉隠の里の奥でひっそりと生き延びるのが精一杯の暮らしをしていたからだ。それは再会より幾十年、ともに暮らして自然に身にしみて分かった。

二人はものはなくとも幸せだった。幸福の中で十年を過ごし、やがて背の君に先立たれた。それでも老母は嘆かなかった。きよくという娘があつたからだ。

なにも思い残すことはない。そう思っていた。

でも欲を申しますなら。

老母は深い皺をよせ、れんにうちあけた。

死ぬ前に、あの観音さまに、お礼を。

干飯の粥を食べ終わると、れんは力をこめてつぶやいた。

「わたくしがおばさまの代わりに、参ります」

外で、なにか物音がしている。

れんは箸を置いて立った。妻戸を注意して開けそつと顔を外へのぞく。

曇り空の早朝だからか、あたりはうす暗く、風がかなり強かった。刺すような冷気に衿をかき合わせて、れんはちらと裏手をのぞいた。

#### 第四話 蓬粥（二）

ぶるぶる、といきり立ち、馬が鼻を鳴らしている。

「まあ！」

れんは思わず声を上げた。

「まあ、お帰り、ああ」

「ああ？」

馬の陰からひょっこりと顔がのぞき、れんは驚いた。

「ああ、びっくりしました。春時どのですか」

今まで馬に隠れて見えなかったのだ。

春時はげんそうな顔をしていた。

「ご無事でお帰りになったのですね。春時どの」

「この馬はああ、というのか」

「この子の名前です」

右大臣家の厩から家人に黙って拝借し（要は「盗み」）、右大臣邸から泊瀬<sup>はかせ</sup>、この里までの往復を連れ回った、この若い葦毛。名を「ああ」というらしい。右大臣の姫が馬の名を知っているとは驚きだ。もしかすると「ああ」は名を持つ駿馬なのか、いや、そうだろう、それだけの働きをこいつはしたんだからな。数日とともに過ごした春時は「ああ」に対しかかなり感傷的になっていたらしい。たてがみをなでて独り言じみたことを言う。

「頑張ってくれた。都の行帰り、品物の始末、いろいろと出来たのはこいつのお陰だな。よく休ませてやらないと」

（春時どの、人でも違ったよう）

彼の饒舌ぶりに、れんは「頑張った」ということばの重みを感じた。

「そんなに、大変でしたのね」

「この馬、ああ、という名だったのか」

「今、わたくしが名付けました。良い名でしょう？」

春時は水をやる手を止めた。それは一瞬のことだったが、やがてまったく疲れきったように長く、ため息をついた。

「春時どのはお疲れですわね」

「まあね……」

春時はぞんざいに答え、小屋に荷を入れて整え直した。

つづらの中には小さな袋が十ほどあり、あしぎぬ数本はかなり質のよいものだ。高価なものを少量持ち歩き、道々で普段使いの品や食料に替え、暮らすつもりだった。

春時は、置いていった干飯がまだふたつ残っているのを見てとった。

余分に置いて去ったはず。ふつつであれば残るのはひとつだけ、のはず。

「食を抜いたのか」

「えっ」

れんは虚をつかれて答えあぐねた。

春時が厳しい目を向ける。

「人と会ったのか」

（なんと勘のいい人でしょう）

驚きつつ、れんは正直に話した。

「夕餉を馳走になりました。あの方たち、よい方たちでしたので」

「あなたにはよい方に見えただろうが、だましたり偽ったりするのは難しくない。まして」

春時は言いよどみ、

「などと今さら、しかたないことが」

と言葉を切った。

だが、れんの頭の中でせりふが続いていた。きっと春時はこう言いかけたに違いない。

おまえは世間知らずだ、分かるわけがない、と。  
心にちくりとげが刺さる。

（たしかに、わたくしはものを知らないわ）

髪を切るくらいで猪を食べるくらいでおろおろと情けなく悩んだりした。食う元手のことを聞かされ、きよくたちの暮らしを見たあとは、なにも知らないのだと実感した。

それでも 分かることはある。

世の中にはたくさんの人がある。食うために大臣の姫をさらう者もいれば、どこの者とも知れないのに親切な人もいる。それはものを知らなくても知っている。家を出てから知ったことだ。

（なにも聞きもせず、親切にしてくれる人が、いたのです）

それはまぎれもない事実。

この目で見た、全身で感じた事実。

れんは自らにいい聞かせるように言いかえした。

「あの方たちはよい方でしたわ」

あきれたといわんばかりに、春時は首をふった。

れんは腹立たしくてならなかった。春時と目をあわせないよう馬に

寄りそい、たてがみを優しくなでた。

「ああ、ああ。おまえはわたくしの話、聞いてくれるわね」

ああは、れんに応えるように鼻をすりよせる。

「よしよし、いい子ね」

れんはしつこい程に首をなでた。

「春時どの、短い間でしたが世話になりました。わたくし、巡礼の旅に出ます」

「は？ 巡礼？ なにを言っ……」

春時は口にした愚痴をとどめ、れんに向き直って問いかけた。

「いや、巡礼とはいったい、どこへ」

そんな彼を見ないように前を見、れんは声高らかに宣言した。

「美濃の国！」

#### 第四話 蓬粥（三）

「ああだめだよ、この先は。龍田たつたの川が氾濫はんらんしている」

「あれしきの雨で、ですか」

春時が首をひねった。

春時と同じく馬を曳いている壮年の男は、春時たちが向かおうとしている坂道を下って戻ってきたところだった。彼の馬の背には粗朶そとがのせてあり、粗朶の束にくくりつけた竹籠の中身は、まったく空っぽ。なんの仕事も果たさず帰ってきた、というところか。

「あれしきの雨でこんな具合だから、みな頭を悩ませているのだよ」  
龍田の川の流れは川岸を削り、川がかき集めた泥の固まりが倒木を押し流している。轟々と音を立て、人が近づくことを許さない。

近寄ろうとした祈祷の僧をも数人のみこんだらしいし、この前はどこそこの大連おおいが濁流に流されたとか。川下の集落は農作物も水びだしでだめになり、自分たちが食う分はおるか、今年払う租の分さえ残っていない。里の者は飢え死にも覚悟し、悲嘆に暮れているとか。そんなことを男は語って聞かせた。

「なにしろ龍田川が使えねば難波津への行き交いもままならない。困ったものだよ」

「回り道はないのですか」

「回り道を使って峠を越えたところで、龍田の川ぞいは避けられん。無理だな。泊まるうにもこの山中のどの室屋むろやもひどいものさ」

「龍田の神をまつる社殿の手前、あそこの室屋もですか。一段高いところにあつたはずですが」

「あれはまだ無事だったか、分かったものではないぞ」

春時はちらりと、あおの背に眠るれんを見た。

「きょうはもうすぐ夕暮れだ、山を降りて、平群へぐりで宿を借りなさい」  
「相談してみます」

「悪いことはいわない、無理はせんほうがいい」

春時が礼を述べると、男は念押ししてから坂を下っていった。

龍田川沿いを通れないなら、斑鳩いかるがからひたすら北、生駒いこまの山より北までゆくか、もしくは忍坂おっさかへ戻り南へ向かい、河内かわちの方から。いずれにせよ難波津へ行くにはあまりに遠回りすぎる。

曇天で日陰もなく、時刻が解りづらいが、男が言い残した通り、夕闇がせまっているのは確かだった。はやく今夜の宿りを決めねばなるまい。

「れん、起きろ」

「はると……」

れんが、ふらりと態勢を崩して落馬しかける。

横からさっと春時が支えた。そして、あおにうつ伏せにしがみつかせた。

れんはまだ、ねぼけまなこだ。

「平群へ戻る」

れんはふっと、目を開いて背を伸ばした。

「平群、平群ですって」

「この先は行けないようだ。一度出直す」

れんは目を丸くして、頭を横に何度も振りつづけた。

だが、春時はあおの方向を逆にして、坂を下りる方向へと向けようと手綱を曳いている。

主人に従い小刻みに方向を変えるあおのたてがみを、れんは必死で引つ張った。あおは勘弁してくれ、と訴えるように「ふるる」と鼻を鳴らした。

「やめて、困ります」

「そっちこそやめろ」春時は鋭く言った、「困っているのはあおの方だ、どうしろと」

「夢を見たのです」

れんは思いつめた目で、春時を見た。

「川をなだめ、彼を救えと、わたくしに告げるのです。幾度も、悲しそくに」



「だれが」

「それは」

「知り合いなのか」

れんはしばらく放心したようになった。ぶつぶつと「だれ、だれかしら、うかがうの忘れてた」と唱えている。誰が告げたのか、そんなことは全く問題にしていなかったようだ。

春時は軽くため息をついた。

「義理のない相手なら取り合うことはないだろう。それよりもう日が暮れる。このあたりは狼が出るから、宿を得ないと命が」

そこで春時は口を閉ざした。

れんはまぶたを伏せていた。春時の言い分など全く聞いていなかったろう。春時が「れん」と呼びかけると、れんはゆっくりとまぶたを上げ、どこを見るときもなく宙に目をやって、ため息をついた。

「わからない、どなただったのでしょうか」

春時は再び息をつく。まったく……この姫は。

「その夢は山に登りはじめてからか」

「えっ」

「里で昼をとる前にその夢を見たのかどうかだよ」

「里を発つ前は、なかった、はずです」

春時はうつむいて考える。

「今度は俺が譲る番かな」

「ゆずる？」

「れんは巡礼だかなんだかに行きかったがやめた。俺は山を降りたいがやめる。これで、おあいこだろ」

れんはじつと春時の顔を見つめた。

春時がばつが悪そうに微笑をし、

「龍田神の室屋で休む」

坂を上る方角へ、あおを向け直した。

「夢の主とやらを探すには山の中にいる方がよさそうだし」

「春時どの!」

れんは飛び上がるほど喜び、また落馬寸前を助けられた。

#### 第四話 蓬粥（三）（後書き）

現在、平群は「へぐり」と読みます。文中のルビは万葉かなの読みにあわせてみました。

#### 第四話 蓬粥（四）

龍田杜たつたもりの室屋むろやは龍田川ぞいの川下に建てられている。数十人ほどは収容できる大きさではあったが、板葺きで、ひとたび強風が襲えば吹き飛ぶような粗末さでもあった。

龍田川の濁流によつて、下流では何力所も岸がえぐり取られていた。室屋の下の地盤は無事ではあったが、この先まったく無事という保証もなかった。

室堂を仮の宿りとした旅人は、春時とれんだけだった。川が氾濫しているうわさを聞き付けてか、行き交う旅人は元よりいない。

日も落ちきった今は底冷えがした。

春時が土間の薪に火を灯した。

闇の中だった室屋の中が、ほのかな温かみを帯びた、黄色い光に満たされる。

「なにかを食べて体を暖めて眠るか」

春時の提案に、れんははりきって絹袋から中身を取り出した。

「これ、昨日摘んだのです」

「蓬よもぎ」

「ゆでると美味しいとうかがい……」

両手にのせた山盛りの蓬はしなびていた。

（お世辞にも美味しそうに見えない）

れんは自分で差し出しながらそう思い、口ごもった。

「食べたことはない、か」

「はい。ゆでるって、どのようにしたらよろしいのか、わからなくて」

「ゆでるとか以前に、湯の沸かし方に火のおこし方は」

れんはさらにづが悪くなる。

「いいえ、存じません」

「見ておくといい」

「はい」

「あ、火うち石がないな。いきなり難問か」

と、春時は棒どうしを組み合わせた道具を用意した。

「もつとも、難波津へゆけば火をおこす機会などないかもしれないが」

れんは少しさみしげな顔をし、春時の手際を見とどけた。

手にした道具で互いをこすり合わせて火だねをおこし、わらしべ、炭とかけあわせて大きな火に育て上げる。一方で土鍋に水を入れ、かまどにかけた。水が沸いたところで米、そしてちぎった蓬を投入する。

れんは目の前の手順をはじめは座って見ていたが、

「春時どの、そちらに参つてよろしいですか」

肩越しにのぞき込み、または身を乗りだし、

「わあ、それはなんですか」

「もたれかかるな、危ない」

作業中に口を出し、質問を投げかけ、

「なにをなさっているんですか」

「それは？」

さらには手をも出し、

「やけどするぞ！」

結局、最後には邪険にされたのだった。

「見ておけとおっしゃったのは春時どのでしょう」

「見ておけばいいと言ったが、邪魔しろとは言ってない」

「邪魔なんてしておりません」

春時の言行不一致と理屈っぱさには、れんもさすがに気を悪くした。

が、あたたかな蓬粥よもぎがゆは確かにできあがっていた。

れん自身は嫌なことはとっとと忘れる得な性分らしい。継母の意地悪を受けても忍耐強い、というより氣にとめないで過ごしてきたからだろう。

春時が粥を器によそおい、皿に塩を持ってよこすと、  
「わあ！」

とはしゃいで不機嫌さもどこへやら、器からあがる湯気に顔を近づけて笑った。

「あたたかいですわ」

「これで体も温まる」

「はい」

粥のなかの蓬は湯にひたされ、かぐわしい。

平たい棒でひとすくい、口にすると口の中に香りが広がる。

「美味しい。たいへん、美味しいです」

あんなにしわくちゃだったのに。蓬さんがおっしゃったことは正しかったわ　れんはうれしさでひときわ美味しさも増すように思えるのだった。

ふと、春時に目をやる。

春時もまんざらではなさそう。勢いよく食べている。

れんは春時をまねして器を口につけ粥をかきこんだ。

「あつつ！」

「慣れないまねをするから」

「ああ、舌がぴりりします」

れんははじけるように笑いながら、目に涙を浮かべた。

「あたたかいものは、慣れておりませんもの」

邸では冷たいものしか食べなかった。蒸したものも冷えていた。

あわびに鮭、祝いの日には蘇チーズ　素材は贅を尽くしても、寒い中な

らあたたかな粥の方が美味しい。

（難波津にゆき、そして都にもどればもう、このような食事もいた  
だけない）

れんは再び、ひとすくいずつ、惜しむように味わった。

#### 第四話 蓬粥（四）（後書き）

蘇の読みは「そ」。

飛鳥・奈良時代のチーズといわれています。

話中で解説するとテンポが悪いのでルビにチーズと書いてしまいました。

#### 第四話 蓬粥（五）

粥を食べ終わったところで、春時は寢床の準備をはじめた。

土の上にじかに薄い板が並び、その上に筵むしろが敷いたなりになっている。寢床はこの筵だ。れんの昨晚の宿は床下のある小屋だった。さらにひどい寢床といえる。

さすがに春時も右大臣の姫には苛酷と思ったか、板を真ん中によせ集め、

「板を多く重ねれば少しはましになる」

「大丈夫ですわ」

れんは答えながら思った。

きよく親子の住まいを訪れていて良かった。かれらの住まいを目にしていなかったとしたら、今日はとんでもないところで眠らねばならない、と憂いたことだろう。

春時の心くばりも伝わってくる。頭ごなしのもの言いだから、そうとは聞こえないけれど。

「春時どの、お気遣いありがとうございます」

板を重ね終えて手をはたこうとした春時は、ふと動きを止めた。  
「難波津に行くまでに体を悪くさせたら後味が悪い」

「ええ。ありがたく存じます」

れんはにこりと笑った。

それを見て、ことさら不愛想さを増した春時だった。

格子窓からのぞくのは闇。すでに外は夜のとばりを開いている。

川の音は滔々（とうとう）と響きつづけていた。

恐怖こそおぼえぬものの、安心もできない。

れんは笑顔を崩し、うつむき加減の顔に悲しみを宿らせる。

「まだ、誰なのか分かりません」

あれから声は聞こえない。

だが思い起こせば、耳の中にその悲鳴は鮮明によみがえる。やは



り声の主は分からない。ぴんとくるものもない。やはり知っている人ではないようだ。

ではなぜ、れんにだけ呼びかけるのだろう。

理由を知るためにはやはり、救いを求める声の主をさがし出すしかない。とはいえ今はその手立てどころか、きっかけすら見いだせない。

「困りました。このまま分からないのでは」

「あせることはないだろう」

春時はれんに背中を向け、かまどの炭を拾い入れながら答えた。

「あせります。助けを呼んでいるのですから」

「だれも行き交わないこのあたりで」

れんは訴えるように春時の背を見つめる。

「だからこそ、助けを欲しているのではないのでしょうか」

「正論だな」

「あれはきつと、幻ではありません」

「助けを呼ぶ者がいないと思ってない」

「でしたら、わたくしたちしか」

すつくと春時は立ち上がり、れんを見下ろした。

「足元も見えぬ中をさがし回るのか」

「それは」

れんはうつむいて口ごもる。

「今できることは休んで旅の疲れをとることだ」

「わたくし、それほど疲れてはおりません」

「居眠りして落馬しかけておいて」

れんは、ほおを真つ赤に染めた。

「わたくしは、馬に乗るのは、慣れていません、ですから」

「ここもいつ流されるか分かったものじゃないから、しっかり眠るわけにもいかないが」

春時はれんの弁解を聞き流した。

「春時どのは、意地が悪いです」

「危険を避けるべく考えをめぐらせているだけだが、なにが意地が悪いつて」

「分かりました。もう眠ります」

れんはほおをふくらませ、すねたように言った。そして顔をつんと背けると、春時を背にして体を横たえた。

しかし 床に伏したはいいが、眠れなかった。

どうしてこう思う通りにゆかないのだろう。つらつらと考えていた。

（たしかにこんな夜中にわたくし一人で歩くのは無理だわ。ついて来てもらわないと。でも、もし、春時どのでなくて、邸のだれかだったら。怖がる？ いえ、怖がるどころか、夜闇の中、それも氾濫する川辺、だれもついて来てはくれないでしょう）

そもそもこの室堂に来るだけでも無茶だった。室堂には他にだれもない。万人にも危険だから、人がいないのだろう。その危険をあえて春時はおかしたのだ。れんの我がままのために れんはそう考えると、自らの思慮のなさにあらためて落胆した。

なにも一人で歩けないのは夜中だけに限らない。陽光の下であれ、れんは方角を定めて歩くことすらできない。歩くだけでなく、どこかへ行くのも、食べるのも、眠る場所を用意するのも。万事に春時の手助けがなければ、なにもできない……。

それに、きよくについて行ったこと。頭ごなしに怒ることないのに、と思っただが無理もない。春時は出て行く前に忠告したはずだから当然、怒るはず。

迷惑ばかりかけている。

でも ただ迷惑だけで終わりたくない。せつかくここまで来たのだから。

「春時どの」

春時はため息まじりに答えた。

「まだ寝てないのか」

（自分こそ寝ていないのに）

と、少しすねる気持ちをおさえる。

「あの……春時どのは、猪を食べますか」

「猪を」

「はい。猪を」

「食べるが、それが？」

れんはうれしくなった。

「あの、実は、昨晚、猪をご相伴にあずかったのです。獣の肉を食べたのは、生まれて初めてでした。少し恐ろしかったけど、おいしかったです」

春時のことを少し待ったが、無言だった。

れんは続けて語った。

「だから……だからわたくし、お礼に美濃に行こう、と思いました。あのおばさまの生まれ故郷で、いま一度、観音さまを拝したいとおっしゃっていました。あ、そのおばさまが、わたくしに猪をご馳走してくださったんです。なにも聞かれませんでした。なにもわたくしのこと聞かないで、でも良くしてくれて。だから代わりに美濃へ、そう思っ

わたくしにできるのは、そんなことくらいですから」

春時がようやく、ぽつりと答えた。

「それで美濃に」

「はい」

しばらくお互いに沈黙を守る。

遠くで、ぱしゃあん、と水音がこだまする。川に大きなものが落ちたのかもしれない。

「いずれ機会はある。家に戻り着いたら全て望むがままだろ」  
望むがまま。

果たしてそうだろうか。少なくとも二度と猪を食べることはない。あたたかな蓬粥だつて。

「そうですね」

れんは筵をつかみ、その身を包みなおす。

（望むが、まま……）  
ふさいだ目尻から涙がひとすじ、こぼれ落ちた。

#### 第四話 蓬粥（六）

目を伏せる春時の耳に届く、童<sup>わらへ</sup>の声。

さくらさくら

その声の主を探すべく、まぶたを上げた。  
行く手は乳白色の霧に包まれている。

しかし、旅の道程で見慣れた風景はここにはない。あの気の滅入るような湿気と行く手をさえぎる山々、その峰に重く垂れ込める雲はいずこへ去ったのか。草の薫りも血の臭いは。

ただ真白なる眼前の光景を      どこへ向かうかも分からず、春時は歩きはじめた。

童の声だけを頼りに、方角も定まらぬままに。

童はひとり川辺に座っていた。

黒い髪とほんのり赤い頬は、白い面にひととき異彩を放つ。彼の足元には川が流れていて、その川は泥と岩を含んで濁り、折れた枝と河原の泥をも流していずこへと去ろうとしている。

童はそれをつまらなそうに、足をぶらりぶらりと揺らしながら眺めていた。

ふぶかぬままに      ちりゆくを

にわかに風景が色づきだした。

川に沿って紅葉が並んでいる。穏やかな晩秋の光のもとならば、次から次へと競い合うように落葉した紅葉は、川面を紅に染めて流れて行く。そして、川は燃えるように咲きさかるはずだった。だが今、天は乱れている。紅葉は鋭い風にとばされ、否となく濁流へと身を投げる。すると美しい紅の色は、見る影も無く土色に染まり、

やがて汚泥の中へと沈んで消えてしまう。

しかし、春時の思考は情景の妙に流されることはない。

（なぜ紅葉の中で桜の歌を）

童の輪郭がはつきりと見えてきた。

歌声で春時を招いたのは、十歳に満たぬ、あどけない少女。髪を短く切り、顔は浅黒く汚れていて、粗末な衣服に身を包んでいた。

「真鷲<sup>まひづ</sup>」

春時はぐつと唾をのみ、そしてつぶやいた。

「いるはずがない。こんなところに。だから、夢まぼろしに相違ない」

女が泣いている。

振り返ると、女はすぐ近くにいた。

泣き叫び、狂ったように身もだえし、川へ飛び込もうとしている。

春時が走り寄ると、女はとびかかり彼に両手でしがみついた。そして異様な声で泣きわめき、髪をふり乱して地団駄を踏むのだ。

「わたくしの子が」女は叫んだ、「龍田の神にさらわれる、助けて、助けてください！」

「あなたの子……？」

あわれとおもえ たつたのかみかみ

すくいたまへ すくいたまへ

春時は女の手を振り払い、川へと駆けた。

すると目の前で、歌っていた童の下の子が川の流れにえぐり取られ、童は土の龍と化した濁流の中へとその姿を消してしまう。

「ああ！」

女の悲嘆が鋭く胸に突き刺さる。その一方、

闇の、その奥から。

ほど近くから、ざああ、と流水の音が聞こえていた。

まるで大粒の雨でも降っているような音。石ころの転がる音も交

じっていた。

「夢……」

うつつの世。

そういえば、眠りに落ちる前もそうだった。

（あれは龍田の川の音だ）

童、歌、叫ぶ女、そして。

「真鷲」

何だったのか。

夢占など知る由もない春時は、それらがなにを意味するか、判じるすべもない。ただ、額から首から流れ落ちる異様なまでの汗が一層、得体の知れぬ不安をかきたてる。

「落ち着けよ」

彼は自分にいいきかせて汗を拭った。

そして周りの様子を改めて確認した。

ここは龍田神の祠堂の川下に建てられた室屋。格子窓から光がもれている。すでに外は朝を迎えていた。川と木々がせめぎあう音が耳につく。川が氾濫しているうわさを聞き付けてか、ここを仮の宿りとした旅人は、れんと春時のふたりきり。そのはずだ。

「……れん」

れんの姿はどこにも、ない。

春時の体に悪寒が走る。

「どこに消えた」

そして、新たな音。

龍田神の宮からだろうか。鐘音が響きはじめた。

## 第五話 神南（一）

朝ぼらけの光にれんは目を細めた。

堂宇の棧の間から崖下に、ぼんやりとした視界の中に双影が形をなしてきた。影はふたり、いずれも僧形。ひざまで泥にまみれ、身を包む衣も朱塗を引きはがしたようなまだら模様であつた。彼らは速足で川沿いの土手を歩んで来る。朝日を望むや、平群の里から上つて来たのかもしれない。

「治水を祈願するそうな」

白い唐様の若者が一步、れんに近寄る。

「朝から御苦労なことじゃ。無駄なことで知りつつも祈祷をあげ、説法し、仏典を読む。今日は幾人が川に飲み込まれるのであるうな」

「無駄なこと。どうしてそうはつきりと、無駄と断じるのです」

「龍田の川の龍神の怒り、望み。それを知ろうともせぬ。ただ形ばかりの祈祷に頼ろうという心積もりらしい」

「それは」

れんは迷いつつ弁明を述べた。

「あの方々は、命ぜられてここにいらしたのでしょう。ですから」

「命令ゆえ、いささかの思量もなくともよい、か」

れんは黙って考える。

「すめらみことは元来、我のことばを聞く義務がある。ゆえに衆生より推戴されまつりごとを執る。にもかかわらず義務も果たさず、僧どもに我を治めよと命じたのだ。本末転倒とはこのことぞ。すめらみこととは残酷なものであるよ」

「あなたも残酷です」

れんは思つたことをそのまま口にした。

青年が冷笑する。

「そなたに何が分かるうか」

れんは一瞬、とまどつた。



（いえ、もの知らずがなんだというの）

しかし首をふり、思い直して言った。

「世の人々が困っております。お誘いどおり、わたくしは参りました。ですからわたくしの望みを叶えてください。どうか川を鎮めてください」

「中将内侍。ここは道半ば。参るのはここから」

「ついて参りましたら、鎮めてくださいますか」

青年がれんの顔を見下ろした。

美しい顔立ち。だが微笑をたたえる冷たき面相は、人間離れしていた。

れんは心底寒気がした。畏れ、だろうか。これ以上目をあわせていられず、ごまかすようにみずからの衣を見直した。

乾いた泥がこびりつき、さながら灰色の衣のようだった。僧と同じ目にあつたのだから。

この堂にたどり着くまで、どれだけ難渋したことか。峠を越すと道は下り、曲がりくねっていた。しかしすぐ左手は山、崖がそびえ立ち、右は川が濁流を作りだしている。山道はひどかった。ただでさえ狭隘な足元は泥まみれで、ごつごつした石がいたるところに転がり足をとられる。土崩れで半ばふさがれている箇所もあれば、水びだしですねの半ばまでが浸かってしまうぬかるみもある。ひどいところは濁流に道の半分が流されかけていた。

青年はそんな道を雲の上を歩くように進み、れんをこの堂に導いたのだ。

（この方は人にあらず。もしか、龍田の神）

「始まつたぞ」

摩訶補陀羅

陀羅尼の誦經、

それは先程の僧たちの仕業である

う。

神南大龍神、

結界三里内、

使打出水流、

急急如律令 束、

青年の身に葛で編んだ縄がからみつく。

「ごさかしい練行僧ども」

彼は嘲るような笑みをうかべた。

「踊れ」

彼は両手指先を動かした。大きく、円を描くように。やがて川面はゆるやかに、渦を描きはじめる。

一方、鉦の連打とともに僧らが唱和する。

縛 大龍神、  
緊 大龍神、

（この方は龍神）

やはり、とれんは思った。

（龍田の川の龍神。この方が、この川を荒れ狂わせて）

ぎりぎり葛縄は青年を締めつけた。まるで意志を持つ生き物のように、捕らえた獲物をけつして逃すまいと、腕・足・胴の動きを許さない。青年の真白い束帯もろとも幾重にも重なりあい、指の動きすら封じこめ、首から下は身じろぎすらかなわなくなっている。

「しつこい奴らめ」

青年がふつと笑い、そして大音声を発した。

「解！」

突如、川に渦巻く中心から一筋の水が噴きあげた。激しく空をはしる水は青年の体をかすめ、荒縄を切り裂いた。断片を霧が包みこむ、縄は微塵になり、全く形をとどめず消え去った。

「それ、返り討ちにしてやろう」

彼が腕をふり上げるや、

「返！」

川から泥水が噴きあがる。

あつ、とれんは叫んだ。

二僧は鉦を投げ出し、立ち上がって逃げようとした。が、なすすべなく中腰で 叫ぶ時すら与えられぬまま、濁流に丸飲みになれた。

れんは再び震えた。ぼう然と、龍の背のごとき乱れた川面を見つめた。

青年はふふ、と笑う。

「すめらみことの病の治癒は得意なれど、水難は不得手と見ゆる」

助けて、助けてくれ。

れんははつと息をのんだ。

（助けなくては！）

思うや否や泥のこびり付く袖をなぎ、堂の外へと飛び出そうとするも、寸前で足をとどめた。

「そんな……」

走るべき道はなかった。この祠は荒れ狂う川を目下に、中空に浮かんでいた。

## 第五話 神南（二）

「ああ……」

れんは嘆息をもらし、なすすべなくしゃがみこむ。

残酷な光景はまぶたを閉ざしても、目に焼きついている。

二人の僧たち。

その、流されるその瞬間。

（流されていった、目前で。なのに、わたくしはただなにもしなかった。）

この祠堂の中でつまらない言い争いをしているより、誦経を聞いているより、他になにかができただろうに。

（そう、なにかができたはず）

彼らは闇中、並んで端座し呪詞を唱和していた。

（川を鎮めたい、それはわたくしの祈りと同じ。でしたら）  
その一言一句、れんは思い起こす。

龍田の川よ鎮まりたまえ、

頭に、身体そのものに、じわりと染み入ってくる。

龍神よ怒りを鎮めたまえ、

ちからなき人々を救いたまえ……

「神南大龍神、結界三里内、

使打出水流、急急如律令」

節回しをそえて自然と口をついて出た、それは僧らのと違わぬ呪言。

「何だと」

しかし違うのは青年　もとい龍神があわてはじめたこと。

れんは変化に気づかない。僧たちの鎮めの祈りをなぞることだけに集中する。

「やめ……」

龍神は激しく息をつぎ、身じろぎする。やがて苦しげにひざをついた彼は、れんをつかもうと腕を回しもがく。しかしその腕は空を切り、やがては行き場もなくなぐらりと垂れる。

やめろ。

さらには口を裂けんばかりに開いて叫んだ　やめろ、中将内侍！  
れんは望みに従ったかのように、誦経を止めた。

「あなたこそやめてください」

そして手のひらを龍神にかざし、印相を結んでその双眸をとらえる。

「きつとお困りになるのは、きよく、おばさま……みたいないつも困っている人たちなんです。みかども、民のことを考えているはずです。だからあなたを鎮めよと、聖の皆さまにお命じになられた」

ようやく龍神の口から音がもれたが、うなるだけで声にならず、ただ口惜しそうにれんを睨めつける。

「あなたさまも、苦しみから逃れたいはず  
れんはたじろがなかった。

「さあ、川を、鎮めてくださいませ！」

龍神の白い顔はなお蒼白になり、懇願とも怒りともつかぬ相貌があらわとなった。

はじめに約したとおりだ。

「わたくしが行けば、よろしいのですか」

龍神はうなずいた。

「偽りではありませんね」

我は神。神は偽りを口にせぬ。言挙げの力を備えるため、偽

りは許されぬ理。<sup>じやうり</sup>

「言挙げとは、発したことがほんとうになるという」  
そうだ。

れんは思案した末、  
「あなたからお先に、川をお鎮めください」  
と、龍神に要求した。

そなたが先じゃ。譲れはせぬ。  
「どうしてです」

人は嘘をつく。  
「わたくし、嘘なんて申しません！」  
れんが印相を結ぶ手に力をいれた。

龍神はわずかに顔をしかめるが、れんはそれに気づかなかった。  
「だいたい、あなたが急きたてたものではありませんか！ 早く来ねば室屋を流してしまうぞ、って。わたくしは、せめて文でも置いて行こうかしら、と思っていたのです。それをあなたさまが、あんまりおっしゃるから」

我が知ることはない。

「龍神さまは、ずうっと、このままでよいのですか」  
よかるう。術が解けるまでこのままでいよう。

龍神は笑うそぶりをみせた。

そなたより我の方が長く生きるであろうしな。

「そんな。ずるいわ！」

確かに今は自分が優位にある。しかしそれは龍神にとって脅威ではないのだ。ただ待てばいい。

龍神の傲岸な態度ははったりなどではない。

（春時どの）

れんは頼りなげな目を泳がせる。

（どうしよう。このままだなんて。春時どの、わたくしをさがしまわっているかしら）

さがしていれば申しわけがない。

さがしていなければ？

（やっかい払いできた、と思っているかも）

ふとれんは悲しく思ったのだが……。

（いいえ、そんなことを考えている場合ではないわ）

れんは気をとりなおす。

「龍神さま。そもそも、わたくしがここに来たのは、川を鎮めてもらうためです。助けを呼ぶ声がどなたなのか、それで助けることはできませんかと、やって来たのです」

呪詞を返されて川にのみ込まれた僧たち。かれらは「助けよ」とはじめに告げた者とは違った。声が違う、そして雰囲気も。

では、だれなのか。

（声を聞いたのはわたくしだけ。このままでは、川は鎮まるかもしれないけれど……わたくしはすべて……投げ出してしまおう）

難波津にゆき、味方になってくれるという右大臣家別業の者に会わねば。

美濃に行くこともできないかもしれない。きよくの老母に約したはずなのに。

それに。

（春時どの……）

れんの印相がゆるむ。

龍神はそれを見逃しはしなかった。

「解！」

龍神、渾身の雄叫びが轟いた。

周囲の水が一斉に水滴をはじき上げ、何本もの水柱が激しく天上へと噴き上げる。

叫ぶ間もない。れんははじき飛ばされた。

思わずかたく眼をつぶった。

落下する。驚愕の声すら上げられぬまま　いつまでもいつまでも、落ちきる先もなくひたすら落ちていった。それを「落ちる」と呼ぶのか　「下」から抵抗を受けながら「上」からも抑え込まれ

る感覚に包まれていた。

れんが怖々、眼を細める。

ただ下へ下へと暗闇に向かってる。

（せめて、わたくしは、川を鎮めねば）

今度はしっかりと両目を開いた。

八つ頭の水龍が視界にとびこんだ。

水柱が林立する中、獣は誇るがごとく咆哮し、その声はれんの全身を震わせた。

「龍神」

逆さまに浮遊している。

落ちてはいない。

上下が逆転しているなんておかしい。

「これは……」

なにかが分かりかけた　とたん、れんは水の中に投げ出された。れんはもがいた。泥水に袖がからまり腕が動かない。衣は水を吸い重くなり、いずれ溺れ沈もうとしている。それでも、もがく。ほかになすすべがない。



## 第五話 神南（三）

春時は目を細めた。

川岸に打ち上げられている、黒い姿に気づいたのだ。

「人、か」

れんではない。黒衣ならば。

春時はそれに速足で近づいた。

なんでもいい、てがかりが要る。闇雲にれんを探すよりはましだ。足元は泥まみれで、走ることさえままならない。速足もひと苦労で、下手を踏むとぬかるみに足を取られ、川に転落しかねない。背負う剣を杖がわりに、慎重に、しかし急いで、岸に身をよせた。

黒い姿は剃髪ていはつの僧形一人だった。

ぐつたりと体を横たえ、意識は失っている。

春時は僧の胸元に手と耳をあてた。

息づかいがほとんどない。しかし胸の鼓動はしっかりとある。胸を何度か圧迫した。

僧が息をふきかえした。苦しげにあえぐ。

川上から流されてきたらしい。着衣はさほど乱れていない。つい今しがた川に流れつき、運よくすぐに助かったところだろうか。

そういえば室屋を出るまえ、社殿のある方角に鉦しょうの音を聞いた。

治水祈願でも行っ練行僧が打ち鳴らしていたのだろう。だが今はその音もやんでいる。ということは呪法は終わったのか。それもこの川の流れた。結果は失敗に。

とすれば、この御仁は。

「しっかり」

「は……」

僧があえいだ。

春時が背中をたたくと、僧は少し水を吐いた。

「上の社で」

僧はときおり咳をまじえつつ、息を整えゆっくり話した。

「聖上の御勅により、龍田の川を治める祈願を」

「人を見ませんでしたか」

春時には天皇の勅願などどうでもよい話だ。

「人を」

「童子頭の女子です」

「い、いや」

僧は幾度となくかぶりをふった。

「我らは朝から川下の、水びだしの里からここへ登り着いたが、道  
途もそのような者は、見かけなかった」

「確かですか」

「確かだ」

春時はひとたび黙した。

（一体どこへ行ったのだ、れん）

「若者よ。その童子とやはそなたの」

「血縁の者」

「然様か……残念だが流されてしもうたのでは」

（そんなことはとづくに考えたさ）  
といらつく春時だったが、

助けて。

「えっ」

と、とつさに身をこわばらせた。

「いかがした」

僧がけげんそくに春時を見る。

春時はすぐ冷静さをとりもどした。

「いえ、なにも」

僧には聞こえなかったのだろうか。では先ほどの空耳か。

（いや、今、是非を問うのは早計）

空耳か否か。よく見きわめて……

助けてください。

今度こそ春時は確信した。

夢で泣き叫んだ母親だ。春時にとりすがった女だ。確信するだけではない。彼はさらに推測を深めた。

（もし、れんが聞いたのと同じ者ならば）

れんもさがし回っているのではないか。

闇夜の中でさえ飛び出して行かんばかりだったのだ。いてもたってもいられず、朝一番で室屋を出たのかもしれない。ものおじせず、後先も考えず動く姫のことだから。毎度、迷惑な行動だと思うが、もうどうでもいい。

それならば。

世間知らずの姫にしつこく「助けよ」と告げた、いつそうはた迷惑な願主とやらをさがし出せばいい。れんも同時に見つかるかもしれない。

ほかに手がかりもない。だめで元々だ。

（もっと呼びかけてくれないだろうか）

春時は神経をとき澄ませた。

やがて、か細くすすり泣くかのような嘆きを受けとめる。

わが子が、流されてしまう。

「もっと上に」

春時は即、ぬかるむ坂を登りはじめた。

「上は行けぬぞ、危なすぎる」

僧が忠告したが春時は聞く耳を持たなかった。

（あんたは黙っててくれ）

うつつの声は聞き取りの邪魔となる。夢とおぼしき声のみが頼みの綱。その綱をたぐり寄せながら、追いかけて進む。

春時どの。

「れん」

春時は心高ぶったが、落ちつけと自らに言いきかせた。かすかな

希望に期待が過剰に高ぶり、無意味に空回りせぬように。

「待ちたまえ！」

僧もまた、春時の背を追ってあやうい足取りで泥道を登ってゆく。  
やがて彼らは川面に入ひとりの姿を認めた。

## 第五話 神南（四）

「巖妙どの！」

練行僧が叫んだ。

その先には中年の僧。沈みかけて、首から上だけを川面から出し、なんとか命をつないでいる有様であった。

「おお、巖妙どの、よくぞ流されずに」

「あの細木が命綱となっていたかと」

春時が指摘したのは僧巖妙の両腕が抱えている細い木の幹だった。しかし細すぎる。早くせねば木もろとも流されて」

まさに巖妙の命は風前のもしび。川の流れは強い。つかまっているだけで精一杯。自力で岸に上がる力は残されてはいまい。

「巖妙どの、今、お助けします！」

かたわらの僧が喜び半分に呼びかける中、春時は落胆していた。

（れんはいない）

声に従ったがれんはいなかった。

れんが訴えていたのもこの僧たちではない、と春時は結論付けた。練行僧らは今朝、山に来たと言った。一方、れんが助けを求めていると訴えはじめたのは昨天晚上から。時間が前後している。ゆえに、れんに救いを求めた「別のだれか」が存在するはず。

しかしそれは何処にいる？

助けてください！

今度ははつきりと聞こえた。

「だれを？ だれを助けると」

せかされた春時はいらだちをあらわにした。

道連れに、流されてしまいます！

「道連れ。ということは僧とともにいる」

僧は一人だ。では人ではない？

信じ難いが、衣服か、持ち物か。

巖妙が手にしているのは細枝くらいだ。その木の根元は脆弱で、巖妙が引っこ抜くが早いか、根こそぎさらわれるのが早いか。巖妙か木か、いずれかが力つきれば、いずれかの「道連れ」に。

「あの細い木が！」

「たっ、助けてください」

巖妙がかすれた声をしぼりあげた。

「玄岳どの、どうか、後生です、お助けを」

「巖妙どの、今少し耐えてください！」

僧玄岳が岸から身を乗り出し、やみくもに腕を伸ばした。

「危ない」

春時は彼をとりおさえ、

「貴僧まで巻き添えになる」

と言いながら考えをめぐらせた。

（まず僧、それから若木の順だ）

時間はあまりない。木の根元はすでに危うい。巖妙も力尽きるにはほどこないだろう。

春時は周囲を見まわした。道のわきの折れ枝が山積する中、太く長めの枝がある。それを春時は見てとった。ひっぱり出すと三尺はあり、しっかりした枝ぶりである。

春時は肩にかけた剣の革ひもをはずし、枝に結びつけた。

「剣をかける輪の部分に手を入れれば、水からひき上げやすい」

「名案！」

僧と春時はさっそく枝を降ろした。

「つかまってください」

「輪に手を通して」

巖妙はおそろおそろ小枝から片手を離したが、

「おお！」

と叫んだと同時に流されかけた。

が、離れた片手はしっかり革ひもを握っていた。  
「今だ」

玄岳と春時は一息に引き上げた。

「今、少し！」

引き上げきつたとたん、彼らは泥の地面にそろって崩れ落ちた。春時が身を起こしながら、

「御身ご無事か！」

と叫ぶと、声ならぬ呻きを厳妙は声をもらした。玄岳も厳妙も身を起こす余力もないのか、そろって顔だけ上げ荒い息を吐いていた。春時は苦みまじりの笑みを一瞬のみ浮かべ、泥から起き上がった。若木の枝。すでに葉は流されあわれな姿だ。やがて枝も折られ、根元から濁流の藻屑と消えるだろう。

どう「救う」のかは難題だった。相手が人なら「つかめば引き上げよう」と言える。相手が動けない木では、春時が動くしかない。人ひとり助けるより危険かもしれない。

（なぜこんなことに必死になってるんだ）

ふと思つたが、春時は腕を伸ばした。届かない。

さらに身を乗り出した。

「若木を抜こうというのですか」

玄岳が背後から尋ねた。

春時は無理な姿勢でいて、声も出せないでいる。玄岳はそれ以上尋ねなかった。

「手伝いましょう」

春時はちらりと彼らを見、「ありがたい」と口だけを動かした。

「我はここで枝を支えています。貴殿は革ひもを身にしばって下へ」  
春時は再度言い直した。

「ありがたい」

玄岳の申し出どおり、春時は革ひもで自身をしばりつけた。厳妙なる僧も回復したか、二人がかりで地面にさした棒を支えた。地面が泥まみれなため、それでも万全ではない。僧たちは力をこめた。春時もできるだけ上の二人の負担にならぬよう、そろりと岸の斜面

をつたい降りた。

枝葉の上で足をとどめた。若木は足元、すぐ下だった。

春時はそろりと中腰になり、手を伸ばした。平地ならばなんのことはない姿勢も、ぬかるむ岸の斜面では厳しい。無理な体勢をじわり、じわりと動かし、ようやく枝に触れた。指がふるえる。

春時が息をのんだ。刹那、根元をにぎりしめた。

（抜けるか）

手元を動かした。根元はゆれている。

いまし春時が体を伸ばす。と、

「水がつ！」

僧たちが狼狽の態で叫んだ。

春時が顔を上げると、土色の龍が牙をむき襲いかかった。春時と僧たちもろとも呑みこもうとするその時、彼らはただぼうつ然と、その恐ろしき顔を眺めるだけだった。



## 第五話 神南（五）

祀堂の入り口から青年は川面を見下ろし、つぶやく。

「意のままにならぬなら、我の水で封じこめ連れ去ってくれようか」  
荒れ狂った渦巻く奔流にとらわれ、れんは息もできずひたすらも  
がきつづける。五感はおろか冷たささえ忘れ、意識が薄らいでゆく。

（いや……）

てのひらの数珠をつよく握りしめた。意識をつなぎとめるため、  
決して離すまいと。

（し……ずめ……ないと……わたく……）

まなこ  
目を開き……見よ……。

誰かが命じる。

れんは従った。ふたたびまぶたを開く。

泥の中なのに前が見える。なにかが見える。

（……蓮）

幻か。蓮は泥沼の中で咲く。でもここは川……

れんは手をのばす。手首に揺れる数珠が輝く。蓮の茎に、手が届く。

（もう少し……）

思いどおりにはならぬぞ。

龍神は息をのんで頭上を見上げた。

かよう  
「荷葉の座」

荷葉 蓮の葉がゆつくりと、龍神の目線までおりてくる。

葉の上には、白土一色に染まった異形の者が胸をおさえて激しく  
咳きこんでいた。それがれんだということは即座に分かった。

「中将内侍、いや観音菩薩のしわざか。我が術を……かくもやすやすと破るとは」

れんは蓮の葉の上で荒い息を整えていた。川から引き上げられたばかり、無理はない。全身泥まみれだが、ぬぐうことも忘れて空気を確保しようとしていた。しかし、れんはなさない顔で龍神を見上げた。

「りゅ、龍神さま」

龍神は黙ってれんに険しい目を向ける。

「仰いましたね。まだ道半ば。参るのは、ここから、と。わたくし、お供するのは、かまわないのです」

と言うとれんは空咳をし、そのあと深呼吸をしてから続ける。

「……ですが、時を、くださいませ」

「時をとな」

「はい。まず……わたくしは家に帰り、父上に安心してもらわねばなりません。そして美濃に、観音菩薩のもとに、お参りせねばなりません。おばさまの為に、代わりに参りますと、そう約したのです」

「本当に父とおばさまのみが為か」

「本当に、と、お疑いなのは」

「分からねばよい」

龍神はわずかに笑った。

「それから、まだあります。どなたかから、川を鎮め彼を助けよとお声を聞いております。あの声の方は、あなたさまではございません。声の主がどなたかは存じませんが、わたくしはその方を助けねばならないのです」

「ふむ」

龍神は氷のごとく厳しい容貌に戻る。

「だれがそなたに乞うているか、我は知っておる」  
れんは狼狽した。

「ど、どなたですか」

「教えてやろうほどに、そなたは時来れば我が元へ来い」

「ほんとうですか。教えてくれるのですか」

れんは満面の笑みで龍神にすがった。

「偽りは申さぬ。一度そう言った」

「ほんとうに、教えてくれるのですね」

「そなたの名に誓えば」

「はい。中将内侍の名に誓って」

「よろしい。龍田神南明神の名に誓おう」

龍神は大きく気を吐いた。その深い息づかいに木々は震撼し、小枝は折れ飛び、地面の泥が宙に乱れ散った。

れんも風にあおられ、重い袖を上げて顔をおおう。

やがて、風がおさまると、れんはこわこわと袖をおろす。眼下に龍神の姿をとらえた。

龍神はれんを見上げている。

「蓮の葉！」

れんは今さらながら座っている場所の異常さに気づく。

「それも、宙に浮いて」

龍神が片腕を上げ、なにかを指し示す。蓮の葉の下には荒れた川が轟々と流れていた。そして 老木一本、川の半分に覆いかぶさっている。その木がある場所は濁流に地面がえぐり取られ、埋まっていたはずの根がむきだしに見えた。

「見えるか。あの年老いた」

「木でしょうか」

「そなたを呼びだてたのはあの川辺に生きる桜の親子」

「桜の、親子」

その桜に人の姿を認め、れんは腰をかがめて目をこらした。

老木の根から面に降りんとする若者。その彼をささえ縄を引っ張る僧たち。

「春時どの！」

れんは目を大きく見開いた。

「それに、聖のかたちたち」

春時が手を伸ばす先には、まだ腕一本分にしかない若木。

（わたくしを呼んだ方を、わたくしが申し上げた方を、春時どのが助けようと……）

れんは声も出せず涙があふれた。

（春時どのが）

「しかし、助け出せるかな」

龍神の声をとらえ、れんはふり向いた。

上流から　流水の音が激しくこだまする。れんはその音をとらえ、その正体を追った。いや、正体は分かっている。濁流だ。濁流が激しくうねり、崖を削り木々を幹までのみこみ、迫り来ているのだ。

春時たちのいる場所はすぐ間近。

れんは悲鳴を上げ、春時に届けと叫んだ。

「春時どの！　逃げて、逃げて！」

龍神は冷笑し、つぶやく。

「拝見させてもらおうぞ　仏の遣わせし女、中将内侍の力の源を」  
叫びは春時には届かないのか、春時たちは気づきもしない。れんは自分に乗せている蓮の葉を力いっぱいたたいた。

「蓮の葉さん、降りて、降りて」

蓮の葉はただ、川の上をふわふわ浮いているだけ。

「降りて！　春時どのに知らせないと」

桜を助けるどころではない。桜も春時も、濁流にのみこまれてしまふ。

勝手に一人で龍神について来なければよかった。いや、平群に戻ることに異をとらえなければ。助けを呼ぶ声がすると話さなければ。私がよいいなことばかりを　後悔の念がれんの心をさいなむ。

れんは大きく首をふった。

「考えても、なんにもならない」

れんは立ち上がる。眼下の桜を見すえ、

「いざ」

と、荷葉の縁から足をふみ出した。

## 第五話 神南（六）

やわらかな風につつまれた瞬間、春時は両手を伸ばし、空から舞い降りる白い者を受け止めた。

「れん！」

れんは答えず空へと数珠を掲げた。

「お助けください！」

どう、と荒波が押し寄せ、二人を呑みこむ。

春時は川面を呆然と眺め、立ちすくんだ。

川が治まっていた。目に映るのは穏やかな流れ。

最前の波こそが荒れ狂い流れつくす最後の力であったのだろうか。その脅威は黄土まじりで木っ端を浮かべた水面に面影を残すのみ。空はすでに晴れ間さえのぞいていた。

そして春時の腕のなか。

「重い……」

春時は苦笑した。

れんと小さな男の子が眠り、ちいさな肩をあずけていた。

次に疑問がわきあがる。突如、空から降ってきたれんは、受け止めると羽のように軽く感じた。なのに今は人なみに重さがある。もつとも、空から現れたことがすでに不条理な話。真相を追及するだけ時間の浪費だろう。

「あなたさま」

声のする方へと春時は向きなおした。

弱々しい女の姿が見えた。髪もすがたも夢で見た時と同じだ。ふり乱れた髪にくずれた衿えり。記憶する姿と寸分たりとも変わりない。しかし今、現実に見る彼女の方が、夢の中より存在感に乏しくはかなげであった。おぼろ雲に姿を隠す月のごとく微かな風にさえ

揺らいで消えてしまう、そんな印象を受ける。

「ありがとうございます、ほんとうに、ありがとうございます」

女は笑った。しかしその笑みは疲れきっていた。精も根も尽き果て、ただ感謝を示すことだけで精一杯のようだった。

「わたくしの、坊……」

「このとおり無事だ。お返ししよう」

春時が両腕にかかえる二人をさしたすも、女は力無く首をふった。

「わたくしにはもはや、冬を越す力はございません」

冬を越す？

春時はいやな予感がした。

「どうか……お預かりいただけませぬか。凍える冬を越え、あたたかな風待つ春まで。どうか、その子を」

「預かるって」

女は満足そうに笑った。足元から消えかかっていた。はかなげに見えたのは、本当にはかない命だった、ということか。

春時は笑い返すところではない。

「待て。預かれなどとそんな」

女は 消え去った。

「了承してないぞ！」

春時の背後で忍び笑いがもれた。

「誰だ」

「しがない龍田の川守よ」

春時はその青年、龍田神を睨めつけた。

「貴様のしわざか。川の氾濫も常識はずれの荒波も、そしてれんがどこかに消えてたのも」

「大意では肯であるな」

龍田神は楽しげに笑みを浮かべた。

「そのさくら木、余が預かっててもよいぞ」

春時はさらに警戒した。

「なにが望みだ」

「代わり、中将内侍に命ずるのだ。そなたから我が元へと赴くように」

「お門違いだ。そんな立場にはない」

「中将内侍のゆくすえはそなた次第」

「おれ次第？」

「そなたが逃げよと告げれば逃げ、難波津と告げれば中将内侍は従うた。天にゆけと奨めたならばまたしかり」

春時は肩をすくめた。

「そんなはずがあるか。おれの言うことなど」

「否、そなたの言挙げは中将内侍にとっては強力」

「言挙げ、それは」

「都から其を連れ出した折りを思い出すがよい」

龍神は白い指をれんに向けた。

「刃を握りし狼藉者の誘いに、なにゆえ中将内侍は従順について来た。脅して連れ出したか？ さはあるまい」

まったく同じ疑念は春時にもあった。なぜ見知らぬ男について来たのか。姫がこわいもの知らずだからか。疑うことを知らないからか。ただそれだけ なのか。

うつむくとれんが眠っていた。春時に支えられ安心しきっている。

「中将内侍はやかいな女だ」

龍神の声に春時は再び頭をもたげ、

「それは知っている」

くく、と龍神は笑った。

「我と手を組め、春時」

「おれと？」

「そなたは我と同じく仏の意に添わぬ存在よ。いずれ観音菩薩を敵に回す」

「観音菩薩……どういうことだ」

「中将内侍は観音菩薩の分身として生を授かった女」

「何？」



「その女は余を鎮めた」

「……」

「人ならぬ力を持つ女。神も仏も物の怪も、この女を欲しておる」  
春時はれんの寝顔を見下ろす。

高貴な生まれで少々風変わりな、ただの乙女でしかない。

「そんな、たいそうなものにはまったく見えないが」

馬上で眠りほうける、強情をはってはすねる。どこをどう見て菩薩の分身と思えというのだ。と言い返したい春時だったが胸におさめる。

「そしてお主は、共におればかならずや中将内侍を殺す」

「そんなことは」

ないと言い切れるか。刺客だった者が。春時は目をそらす。

「……難波津に送り届けるだけだ」

「いずれ解る時がくる」

龍田神は太刀を投じた。春時が受け取ると、龍田神が微笑した。

「持つてゆけ。必ずや役に立つであろう」

「なぜこれを」

「そなたと我は深い縁<sup>えにし</sup>。水神の舞を伝えし我を忘れしか、真春よ」

「その名を！」

鋭く叫んだ春時、すぐに戸惑いの色を浮かべた。

「思い出したか」

春時は平静さを装い龍神を見返す。

「持てと言うなら。ただし龍神よ、これは貸しじゃない。桜の子も預ける気はない」

すべて見抜くかのごとくに、龍神は酷薄な笑みをもらした。

「詮無いな。だが、それでよい」

川はゆるやかに流れている。まだ水は泥や木の屑を含んで濁っていたが、空はすでに青く深く染まり、林が木漏れ日で光り輝いてい

た。

すべてが過ぎ去り、新しいなにかに生まれ変わったようだった。春時は不意に軽くなった腕の中を確かめた。少年がいなくなり、代わりに桜の若木に姿を変えていた。おそらくこれが本来の姿なのだろう。そして若木はれんの両腕に抱かれていた。

れんはまだ眠っている。川を鎮めた疲れだろうか。それも春時の想像にすぎないのだが。

れんの小さな身体を抱きなおし、立ち上がる。まぶしげに崖の上へ目をやると、上から声がした。あの練行僧たちだ。二人も濁流から逃れ、無事だったらしい。

「ご無事か、若い人」

「この通り」

二人は良かった、と口々に言いあった。

「その女人は」

春時はもう一度、れんを見おろす。

きっと誰もこの女が川と龍神を鎮めただなんて、思いもしないだろう。そんなことを考えながら、春時は僧たちを見上げた。

「探していた……いもうとです」

## 第六話 難波（一）

おだやかな日の光を受け、いらか 薨が輝く。

難波津 なにわつ　そこでは多くの民が行き交っている。それも異相が多い。

奈良の都も異国の民は見かけけるが、難波津の比ではない。難波津は大和の海の玄関口と、その光景がしめしている。

皇都として遷せられ「難波宮」と称されること二度。一度は天智天皇の御代。そして先代、聖武天皇のころ。異例なことに、天皇ご自身が難波でなく恭仁の宮くににいるにもかかわらず、皇旗が翻ったときもあつた。

それゆえ殿上人は、難波に「別業」べつごうつまり別邸を構えていた。いつまた皇都となるか知れないからだ。中将内侍の父・藤原豊成はかつて右大臣から太宰府帥に左遷されたが、太宰府に向かう船に乗らず、この難波の別業ですごしたことがある。

今、れんと春時はたたずんでいた。

難波宮の大極殿の薨をすぐ北に望む、長く延びる築地ついでの日陰。築地の向こうは豊成の別業である。

「これを、門番に渡せば、よいのですね」

れんは竹簡ちくかんをにぎりしめて言った。

横佩大臣の家司・堅虫かたむしが春時に託した竹簡だ。

「春時どのは」

れんはためらいがちに尋ねた。

「いっしょにいらしてくださいれば、お礼などできますのに」

「人さらいがこの顔を出せるか」

「でも、わたくしを助けてくださいました」

「礼なら充分いただいている」

「継母上からですか？　それは、お仕事の報酬でございましょう」

春時は虚をつかれた。

れんの口から「報酬」という言葉が飛び出したことに。この姫には無縁だったはずの言葉だろう。邸より逃れて以来、前の右大臣の姫・中将内侍は今までかわりのなかった仄暗い世間をのぞき、素直すぎるくらいに吸収している。

そして、春時は迷う。告げるべきかどうか。

「春時どの？」

「……堅虫どのだ」

「堅虫、どの。平城京の、家司の」

「あの方から礼物はいただいている。この難波に住まい、時を置いて都に向かえるよう段取りを図ってくれてもいる」

「まあ！」

「都に戻ったら大臣おとぎに堅虫どのの忠義をたたえるよう申し上げますほしい」

「はい、かならず申し上げます」

れんは納得したか、にこりと笑った。

「父上にそつと。母上にはもらさぬように、申し上げますわ」

大丈夫だ。れんは分かっている。

「頼んだ」

「はい」

れんは深く一礼し、

「春時どの、お世話になりました。くれぐれも御身を大切になさってくださいませ。では、ごきげんよう」

顔を上げるとしずやかに門へと向かい歩んでいった。一度足をとどめたが、しかしふり返らずに再び進む。

春時は身を隠しそのなりゆきを眺める。

れんを門番がとがめた。しかし竹簡を渡すとすぐ、門を通り抜けていった。

ふう、と春時は太い息を吐く。

（これで終わりだ）

胸に広がるのは安堵感。

自分がさらった「れん」は前の右大臣の姫、中将内侍に戻っていた。

（襲うつもりが人助け、か）

この皮肉なめぐりあわせに、春時は思いをはせた。

なぜ助けたのだろう　潔い態度。そんな理由を口にしたこともあったが、あれは、でまかせに答えた理由にすぎない。

分からないでもいいか、とも思う。もう二度と会うことはないだろう。かたや藤原氏の姫、かたや住まう所も名も籍にない逃散ていさんの者では、住む世界が違いすぎる。

春時は腰に手をやる。

手に触れる冷やかな感触に、腰に佩はいた太刀の存在を思い出す。

この神具は不思議と重さを感じない。

記憶に龍田龍神の声がよみがえる。

おぬしに預けるぞ。

（分からない。なぜ太刀を預けた）

まだ都への道が憧憬の対象であったころの幼い自分と、龍神。

そして中将の姫を望む龍神。

姫の短い旅の道行きとなった自分。

これは偶然ではないのか……。

（いや、もう終わったことだ）

姫が無事に難波に到着した、と堅虫どのに知らせよう。

それでこの話は、終わるはず。

## 第六話 難波（二）

「なんという……」

「ひどうございます」

と侍女たちが口々に嘆くさまが、れんには不思議に思われ「なにがでしょう」と問いかけた。

侍女たちは声をそろえていわく。

「そのお髪でございます！」

れんは得心いったらしく、後ろ髪に手をそえてほほえんだ。

「でもね、かえって、すつきりしたみたいです」

「姫さまはたいへん優しいの心持の御方ですわ。みなに心配かけぬよう、気丈にふるまっていられしやるのですね」

年かさの侍女がわけ知り顔でひとり納得すると、ほかの侍女も、

「まあ……なんと」

「おいたわしいことすわ」

と、そろって袖を湿らせるのであった。

そんな大げさな。そう思いつつも、れんは口をつぐんだ。わざわざ場の空気を悪くすることもない。

袁比良おひらという侍女を筆頭に、四人の侍女が傍らを離れることなく、れんの世話を焼いていた。正直、世話を焼きすぎる。れんがそんな感想をいただくほど、彼女らはきわめて甲斐甲斐しい仕えぶりをみせている。

（少しはひとりにしていただきたいけれど）

れんはそれが高望みだとも分かっているから、口にはしない。誘拐され戻ってきた後だ。警護上、許されることではないだろう。

そんなれんの胸中を知るや知らざるや、袁比良は自身たつぷりに言った。

「姫さま。ご安心なさってください。ここは姫さまの御母上、紫御

前さまゆかりの方ばかり。みな、姫さまのことを心より慕い申し上げております」

「さようです。そんなに気丈にお振舞いにならずともよろしいのですよ」

「そうですね。髪が結えぬとお知りになれば、右相国さまのお嘆きはいかほどか」

「これ、よけいなことをおっしゃいますな」

「あつ」

叱られたのは若い侍女だった。名はたしか安佐女あさめといったろうか。肩をすくめて両手で口をおさえている。

「でつ、でも大丈夫です。なんでも北の方にゆくとかで、右相国さまはしばらくは難波にはいらつしやいませんか」

この邸では皆、藤原豊成のことを『右相国』と称している。豊成公が右大臣から太宰府帥ださいふのそちへ降格となるも赴任を嫌って滞在し続けたのがこの難波だ。それゆえ邸の者はあるじが『右大臣』であることにこだわり、右大臣の唐名を呼称とし続けているのだった。

それはさておき、れんは少しばかり肩を落とした。

「父上が嘆かれるのですね」

無理もない。この短い髪はとても世間に出せる姿ではないのだ。

縁組や参内はおろか、右大臣の姫の名で寺へ詣でようにも姿をさらせない。おばさまの代参をするための美濃行きなど、もつてのほか。人前に出ることがことごとく『はばかられる』のである。由々しき問題だ。

「どれくらいで、元どおりまで伸びるかしら」

「元どおりになるには三、四年はかかるでしょう」  
れんは目をぱちくりさせて驚いた。

「三、四年。そんなにかかるのですか」

思いがけない長い年月。「すつきりした」とのんきに構えていた自分が、やはり考えなしだった、と情けなくなる。

「それでは、その間、父上とお会いすることも叶わないのでしょうか」

か」

「いえ。さすがに右相国さまとの面会を幾年も行わないわけには参りますまい」

れんは思わず身を乗りだした。

「妙案があるのですか」

「挿頭花かざしをして短い髪を覆えばよろしいのです」

なるほど。短い髪は仏道に入った者を表す。ならば世俗の者らしく飾りたてよ、ということか。そう知れば急に望みが高くなるというもの。

「ああ、今すぐにも父上にお会いしたいわ」

「右相国さまがごく自然に難波においでいただけよう、とり計らっております。姫さま、しばしのご辛抱にございますよ」

「その日が楽しみですわ。それでは……そうだわ。竹と筆はないかしら」

袁比良が首をひねる。

「なぜそんなものを」

そう問うので、父上に消息を知らせるのだとれんは答えた。

と、そんなものは侍女に書かせればよい、と袁比良が言う。高貴な姫が手づから文を書くなど考えられないといわんばかりだった。

「せめて、わたくしの筆になるものを、父上にお送りして差し上げたいのです」

「わかりました。しかし、姫さまのための御筆をとりよせねばなりません」

数日ほど待つように袁比良は告げた。

今、邸にあるものでいいのに、とれんは思った。なぜ数日かかるのだろう、とも。新たな筆をとりよせるにしても、難波津の市にゆけば筆はいくらでも手に入る。小ぎれいな衣に替えるため、春時に連れられて市を回ったので、れんはそのことを知っていた。しかし反論する気も起きず、れんは小さくため息をついた。

（春時どの）



もう、お会いすることはできないのかしら。

春時とすごした数日は貴重なことを知った。邸の内にいれば何年かけても学べないことだろう。筆など市にゆけば手に入る。知らなければ、数日待つことに異論もなかったろう。

（もう火をおこすなんてこと、ないのでしょね）

ふっと笑みが漏れた。

確かに春時の言うとおりだ。ここにいれば木っ端をこすり合わせて火をおこすことなどない。「逃げよ」と告げられ、従ったことも結局はよいことだった。彼の言は正しい。

その春時の最後の頼みは、堅虫どのの忠義なはたらきを称揚することだ。

堅虫どのを……

「あ」

「姫さま。いかがなさいましたか」

堅虫のむすめ、瀬雲のことを思い出した。

瀬雲の胸の薬はじき切れる。早く作って送らねば、瀬雲は発作で苦しむことになるだろう。

だがここに、煎じるための道具はあるだろうか。なにより材料となる薬草は。

市には多くの唐人がいた。筆以外に草木の束も見かけた。きっと売っているに違いない。邸内を探させるよりは購入するほうが早いようにも思える。

「薬草を、頼みたいのです」

「薬草でございますか」

「ええ。これは、急いでいただきたいわ。ないと病で苦しい思いをします。今夜には煎じて冷まさねばなりません」

袁比良はまた首をかしげ、

「病でしたら薬なんかより祈祷がいちばんです。すぐに僧をお呼びします」

「いいえ、薬草が必要です」

れんはきつぱりと告げた。

「唐人のいる市なら、あるはずです。市にゆき、探してきてください。今から必要な草木の漢名を書いて……筆がないのでしたね。では、お話しますから、それをそのまま、薬の商人にお伝えなさい」  
袁比良は納得いかないようだった。病には祈祷がいちばん効くというのが貴族の常識。あやしげな薬草を姫が所望するとはいかなる了見、といったところだろうか。

しかし、他の侍女の前で姫の要求をなおざりにするわけにはいかない。袁比良はみずからすぐに市にゆくと答えたのだった。

れんは少しだけ期待した。

（ついでに筆も調達してくれたらよいのですが）

## 第六話 難波（三）

ざわめく酒家の中、なまりのある言葉に春時は顔を上げた。

春時が手で了解を示す。と、浅黒い顔の男がにんまりと笑って座り、春時のそばの高坏に手をのばす。大きく手をたたく音に遅れて、「啞！」

といった小さな叫びが座台に響いた。了解したのは相席だけだ、と春時が軽く笑うと、男も手をぶらぶらさせつつ懲りない顔で苦笑した。

肌の色は濃くぎらぎらした目、小さな身体にそぐわぬ隆々とした腕。男は津に停泊する外つ国の船 新羅あたりの船乗り、それも歴年の水手であるうか。

「海を渡り、唐土で暮らすか」

悪くない、と春時は思いつつ、ひさげを傾ける。

とはいえ、思いつきで飛びこめる世界ではない。多くの船は狂った波にもまれた果てに沈み、選ばれし船こそがこの地を隔てる海を越えられる。目の前の男はよほど海神に恵まれているに相違ない。

だが、海に消えるのも悪くない しかばねは海の底に眠り続ける。人知れず海原の底にたゆたい、やがて朽ちて藻くずとなり消えるのだ。刑場の露に消え獄吏の手で処理されるよりは、路傍で虻にたかられる醜惡な姿を衆人の目にさらし、狗に喰われるよりは、よほど報われる終焉ではないか。

そんな虚無的ともいえる想像から、いまひとりの少女の姿を連想する。

（刑場の露 首の女。そうだ、代えの首、堅虫のむすめ、瀬雲とあったか）

れんが都に帰れば瀬雲が死んだと必ず知るだろう。いや、難波でも伝え聞くかも知れない。瀬雲が姫の身代わりにと服毒した、と。その事実をれんが知ったとしたら。

（いや、堅虫どのが漏らすまい）

春時は即座に否定した。

が、すぐに否定もできないと思い直す。話の出所は堅虫だけとは限らない。家人や出入りの下人からうわさを聞きつけることもあるう。

瀬雲のことを知った時のれんの嘆きはいかばかりだろう。やはり堅虫の名を出したのは失敗だった。彼の忠義と奔走ぶりは、恩賞で報いなければならぬほど安っぽいものではないはずだ。

「かわいらしいお方だったよね！。父上」

「え？」

横には色白の男の子が座っていた。

「だれだ」

「かわいそうなおいら。一日前のことなのに、もう忘れられてらそう言われ、ぴんときた。」

「桜の小枝か」

「おうよ！」

桜の木に助けを求められ、龍神に剣を託され、次は桜の小枝。春時はもう驚く気も失せている。ため息をつき、男の子から目をそむけた。

正面では例の相席の男がニヤニヤしている。

「イル的兒子」

（おまえの子供って。俺はそんなに老けてるか。どんな若気の至りだ）

顔のはしで不満を表明する春時に、桜の枝の少年がにっこり笑っていわく。

「よろしく頼むぜ、ちちうえ」

「それが父上に対する態度か」

春時が皮肉を交じえるが、桜の小枝はまったくこたえていない。

「ところでさ、あのかわいらしい方は戻ってこないの」

「かわいらしいとは」

「川からここまで馬に乘せてた、あの女の人」

れんのことだ。

「戻ってこないな。この難波津のお邸に来るのが目的だったから」

「そうなの。残念だなあ。天女さまにお仕えできてうれしかったのに」

「天女さま」

いぶかしげに春時が問う。

桜の小枝はまじめな顔になり、卓の上で両手を結んでまぶたを伏せた。

「水龍さまがお怒りの中、ずっと天から声が聞こえてたんだ。母上とは別の、若い女の人の声、あの人にすごく似てた。いま少しこらえて、必ず、助けるから」

「そうやって励まされたから濁流の中も流されずにすんだ」

「かも。いや、絶対そう！」

桜の小枝はぱつと笑って、ひさげを手にして春時の高杯に酒を注いだ。

天からの声。あの状況下ではれんがその主、そうとしか思えない。ほかにだれがいるだろうか。桜の小枝を励ましつづけるような、悠長で奇特な少女が。そして、

観音菩薩の分身として生を授かった女。

龍神にそう語らせた、不思議な力の持ち主が、ほかにいただろうか。

桜の小枝が春時の袖をひっぱる。

「父上？」

「ん？」

春時の傍らに若い男が立っていた。春時の目に、男は上流の者と映った。身を包む袍ほうは新品同様で、頭巾は麻ではない（世間ではあまりお目にかかれないうような）良い衣を使っている。人相も穏やかで卑しさがみられない。

「商人か」

「まあな」

かたわらに堅虫から託された荷をおいている。間違われても無理はない。

「すばらしい太刀だな」

「これは売らぬ」

春時は即座に言いはなつた。

「吾は良い太刀とみれば糸目はつけぬ。どうだ、交換は米か、銭がよいか、それとも絹がよいか」

「無駄だ」

「言い値でよいが」

「あきらめてもらおう。こう見えて金には困つていない」

男は退かず、春時の斜め前に座つた。春時が太刀を引きよせた刹那、女が通りすぎてゆくのが見えた。

（あれは）

春時が立ち上がると、

「おいおい、あからさまにすぎるぞ」

若者は不平を口にする。春時の肩に手をかけた。

「急用ができたのだ」

その手を春時は穏やかにおしとどめ、

「再び縁あらば俺も一考しよう」

「気が変わつたら都の田村第を訪ねてくれ。『刷六よしりくに太刀を見せる』と伝えればよい」

田村第　左大臣の藤原仲麻呂ふじわらのなかまろの屋敷。仲麻呂は前の右大臣豊成の弟、れんの叔父にあたり、兄をもしのぐ権勢をほこる。その縁者としたら、酒家ではじめて会った男の太刀の代しろに大枚はたく酔狂も、気まぐれのひと言で片付く程度のものか。

春時は若者から顔をそむけると、わずかに顔をゆがめた。

（仲麻呂、その名を思うだけで忌々しい）

卓に銅銭を置いて早々に店を引きはらう。桜の枝も立ち上がり、春時を追った。

同じ卓子の男は春時の残した銅銭が「おごり」と分かると、大声で次々と酒を要求しはじめた。太刀を求めたあの若者も、そのタダ酒争奪戦の喧騒にまきこまれたか、それとも素直に「この場は」いったん退いたのか。春時を追いかけてくることはなかった。

## 第六話 難波(三) (後書き)

相席の新羅人には朝鮮語でなく当時の国際語である唐の言葉でしゃべらせました。



## 第六話 難波（四）

女は、春時に気づくことなく去つてゆく。

土堀の影に身をひそめる春時。かの姿には見覚えがあつた。いや、顔かたちだけのみならず、女についてはそれ以上のことも知っている。

（小侍従）

れんの継母である照日御前の侍女、小侍従。

あの女がこの難波津にいる。ひと波乱があるのか。龍神が告げた「いずれ解る時がくる」あれはあながち間違いではなかったか。ただ難波に送り届けただけではすまないというのか。春時は腰の太刀に手を触れた。

（いや、だが待て）

「小侍従さま」

枯れ松の下、いま一人、女がいた。女は侍女筆頭の袁比良その人であつたが、春時は知る由もない。ひそやかな会話をはじめる二人。周囲には彼女らのほか、気配もない。

春時は顔を伏せて通りすがりをよそおい、至近の築地へと動いて身を隠した。話を盗み聞かためだ。

「……なのですが、いかがいたしましょう」

問いかける袁比良。対する小侍従は、

「薬草は買い与えなさい。むしろ都合が良いわ。今晚は生薬と土瓶のそばにかりきりになるでしょう」

と指図した。

「筆もお求めですが」

「右相国さまの手に渡る証跡の一片でも残されてはならない」

「しかし市に行きながら筆を手に入れないのは、不自然で」

「姫にふさわしい良いものがなかったとも言えましょう。それくらい頭をお使いなさい」

「申し訳ありません」

「とにかく貴女は戻り、中將の姫を安堵させ、門番を取り込む。それだけよ」

袁比良がこくりとうなずく。

「それだけで、貴女はこの難波の別業の主になるわ。良いわね」

「はい」

「では明日、あけぼのの刻に」

会話を切るや、二人は足早に別々の方向へと立ち去った。

春時は息を殺したまま、短い会話から推論を組み立てる。

袁比良のことは知るよしもない。だが別業の侍女だろうと、会話から察しをつけた。しかも小侍従の配下もしくは協力者であり、照日御前の思惑に従う者である、と。春時もと堅虫にとっては痛恨の事態だ。姫の身を御前の手が及ばぬよう遠ざけたはずが、姫を陥れんとする者がなにくわぬ顔でれんのそば近くに控えていたのだから。

だが悔やんでもしかたがない。それよりも「明日のあけぼのの刻」だ。明日の日の出とともに、あの侍女の差配でなんらかの動きがあるとみていい。だがなにが起こるのか。門番を取り込むというのなら、御前一派を邸内に引き入れるのか。それともれんを連れだすか。端的に示すことばを会話から見いだすことはできなかった。

では、ひとまず彼女らを泳がせるか。それとも先手を打つか。

（なによりも大事なものは）

春時は足元に視線を向けた。小さな木の芽にすぎないそれは、寸時前は少年の姿をしていたものだ。

「桜の小枝、もういい」

すると、どういうわけか木の芽はぐん、と伸び、少年の形をとった。

「やれやれつと」

「桜の……まどろっこしいな。おまえ、名は」

「ない。つけてよ」

「では、桜だから佐久さく」

「適當あたすぎない？」

「そのとおりだ。で、佐久には重要な任務がある」

春時の耳打ちに桜の小枝　佐久はにこりと笑った。

「できるよ」

「託たくしたぞ。天女さまを救い出すんだ」

佐久は春時の期待に応じるべく、こぶしをふり上げて宣言した。

「まかせて！」

再び舞台は横佩大臣よこはぎのおいでの別業へと戻る。

時は夜更。れんのいる西の対屋の母屋まで、ほのかな月あかりが差しこんでいる。

袁比良は拝礼し、入手した薬種を載せた高杯たかつきを母屋のあるじに献じた。

「ありがとう」

目前に控える侍女筆頭に、れんは謝意を示した。やはり筆はなかった、と内心気落ちはしたものの、一方ではやはりそのない仕事ぶりに感心していた。口伝で五種ほど頼んだというのに、間違いも欠けもなかった。なじみのないものを求めるのは難しいものだし、しかも求めるものは覚えづらい、漢名の薬種なのだ。

れんは薬種を手にとり吟味をはじめようとした。するとそこへ侍女が、

「姫さま、姫さま」

と喜々とした呼びかけをくりかえし、とびこんできた。安佐女だった。

「なにことです」

「右相国さまからのお文でございます！」

そう述べて安佐女が差し出したのは、木簡の束とすすきの穂。袁比良はするどく詰問を浴びせかける。

「右相国さまのお使い、名はなんと申したのです」

安佐女が困惑の態でいると、袁比良はたたみかけるように問いた  
だした。

「名乗りはなかったのですか」

「あの、都の右相国さまのお差配と申しております。名は、うか  
がいませんでしたか」

「どこぞの者とも知れぬのにやすやすと信じて受け取ったというの  
？」

「あ、あの、口上も立派でしたから」

「不埒な輩みながみな、あやしげな物言いをするはずがないでしょ  
う」

安佐女はもの言えず顔も青ざめ、縮こまっている。険悪な雰囲気  
の侍女らを見るに見かねて、

「袁比良、あまり責めないであげてください」

と、れんが仲裁に入る。

「されど姫様」

「安佐女は、わたくしが喜ぶであろうと、早く渡そうとしたのでし  
よう」

さすがに袁比良もこれ以上責めるのは分が悪いと察したか、姫の  
面前で騒いだことをわびた。安佐女はまさにほっと息をつき、元来  
楽天家なのだろう、顔色ももとの紅をさしたようなほおに戻った。

安佐女のように胸をなでおろしたれん、気をとり直して木簡の  
束を広げた。すると、ひざ元に小枝がはらりと落ちた。れんはその  
小枝を手に取り、次にすすきに目をやり、そして五本の木に記され  
た文字をしげしげと見つめる。

「まこと右相国さまからでしょうか」

袁比良がたずねた。

れんは木簡から視線を外すと、おもむろに歌を朗じはじめた。

秋萩の花野の薄穂には出でず

わが恋ひ渡る隠り妻はも

「すてきな恋の歌ですね」

感じ入っている安佐女に、袁比良が違うと一蹴。

「右相国さまはなんと情けないことをおおせなのでしょう」

れんはただ愁眉をよせた。

秋の花野のすすきのように、表に出ぬよう隠している恋しい妻はどうしているのか　歌は恋情にあふれていた。しかし『隠り妻』に仮託した姫のありようは、世間より隠れ人目を忍ばねばならない身の上。いいかえると、しばらくは都に戻すわけにはいかない、そう命じられているも同然なのだ。

れんはいまひとつ、淡々と詠じる。

山の峰<sup>を</sup>の上の山桜咲かむころ

難波の浦に寄する釣船

袁比良が確かめるように言った。

「右相国さまがここ難波に来られるのは桜のころ、ということですか」

「半年以上も先のことはありませんか！」

まるで我がことのように安佐女は憤りをあらわにした。

れんは袖口でまなこを覆い、物思いに沈んでいたが、やがてかすれた声でふたりに告げた。

「今宵は、わたくしひとりにしてください」

侍女たちは思った。姫は寄る辺なき身を嘆いてひとり涙を流したいに相違ない、と。でも侍女がそばにいる限り、髪を短くされようが、半年は会わぬと宣言されようが、気丈にふるまう。それが中將の姫なのだ。そんな痛々しくもけなげな姫の心をおなぐさめするには、おひとりにしてさしあげるべきだろう。それに警護がなにより大事とも言いつらい。

袁比良は静かに礼をし、安佐女とともに侍廊の奥へと下がったのであった。

そしてただひとり母屋に残ったれんは、小さく嘆息する。

「春時どのもつて、やっぱり意地が悪いわ」

第六話 難波（四）（後書き）

「秋萩の花野の薄穂には出でずわが恋ひ渡る隠り妻はも」（「万葉集」巻10 2285）

## 第六話 難波（五）

ややあつて、れんは音もなく立ちあがった。

そろそろと西の孫庇まごひさしへと歩み、足をとどめる。

外は闇。数歩先までままならぬ。

れんは思案した。邸内と大路を隔てる塀まで、どれほど離れてい  
るのだろうか、と。闇の先にあるはずで、灯りを差し出せば判るか  
もしれないが、女房たちの耳目を集めることはしたくない。日も高  
い時分には考えもなかったことと、れんは苦笑した。

あらためて耳を澄ますも、周りに人の気配は感じられない。虫の  
音さえない静謐の中、草木と風のささやきや、灯りのゆらぎさえも  
聞こえそうだ。

れんは軽く安堵の息をつく。

ゆつくりと背後の母屋へと目を向けると、蓮向かいからはわずかな  
光りが差し込んでいた。れんは暗闇の中に浮かぶ人影を認めた。

「お話してもよろしいですよ」

月あかりを背にして少年が立っている。れんは彼に問う。

「桜の、小枝どの？」

「はい。佐久といいます」

少年の声は少し緊張の色を帯びていた。

一方、れんはその答えに納得した。木簡の束よりこぼれ落ちた小  
枝。それを見るや、れんは予想した。小枝は龍田川の濁流から春時  
が救い出し、連れて来た桜。そして木簡の送り主は春時に違いない。  
れんは佐久に近づいてゆく。彼はおのれより小さな子どもだ。

「佐久どの。ことづてがあたりだそうですね」

佐久はぎこちなくうなずいた。

「桜が訪れたから、釣船、寄せてもいいですか」

「釣られるのはわたくしですね」

れんは固まっている彼の手をとった。



「行きましょう」

佐久はうつむいたままだ。

「ええと、では、春時に知らせてきます」

「どのように？」

「外までひとつ走りを」

「いけないわ、捕まってしまう」

佐久は驚いてれんを見上げた。

「じゃあ、どうしたら」

「狼煙のろしをあげてはどうかしら。今から、この場所から動きます、と煙でお知らせすることができます」

しばらくの沈黙ののち、佐久が一言。

「目立ちます」

「狼煙は、目立つものでしょう」

「姫さまが、目立ちます」

「大丈夫ですよ」

れんはにこり笑って答えつつ、矛盾だらけだと思った。先ほどまで目立つまいとした。が、今そのこだわりはない。れんが捕まっても身の危険はない。なら、佐久や春時になるべく害が及ばないように、注目はおのれにのみ集めた方がいい。

「これよりわたくしは、薬を煮たり煎じたり、することになります。物音を立てたり、煙をあげたりしても、それほど不自然ではありません」

「でも」

「大丈夫ですよ」

れんは再度言い切ると、早速せつせとそこらのものを集めはじめた。荷造りだ。あとは着替え。この邸でくつろぐ姫の身格好ではまづ逃げ切れまい。

佐久はもう反論できないと悟ったか、細い小枝に戻った。れんが外へ飛び出すその時を待つばかりだ。

袁比良は奥の控えてひとり悩んでいた。

姫が邸に入られたのがつい昨日、今夜は薬とやらをお作りだ。そんな中、邸内の者に不審がられぬよう姫を外へ連れ出せ、というのが小侍従の依頼。無茶をおっしゃる、と袁比良は心の中で愚痴をこぼした。姫が外へ赴く理由づけは難題にすぎる。

小侍従は焦っているらしい。十人を超える供まわりの男を集め、夜中に船を出して木津川を下り、難波津に入ったという。

（姫がおひとりで難波にいらっしゃるなんて、前代未聞。小侍従どのが焦るのも無理ないわね）

当の横佩大臣・豊成公から歌まで届いている今、焦ったところで手遅れだろう。が、知ったことではない。姫を託す役割さえ果たせば済む。それで袁比良は前の右大臣家の難波津であるじも同然の立場になる。

袁比良は姫のようすを見ようと座を立ったのだ。

「けむり……！」

彼女は庇の中からあがる煙を認めた。そして庭を横切る孤影。一瞬盗人と見まがうが、目を凝らすとその小さな影は姫に違いない。

「誰か！ 姫さまがお外へ……」

侍女たちも奥から表に飛び出してきたが、袁比良が姫の追跡を命じて、

「走られているのが姫さま？」

「あつ、築地をお登りに」

と、狼狽するばかりだった。

「門外の小侍従さまにお知らせせよ」

と、その場を仕切ったのは若い男の声。築地を追いかけるのは間に合わない、馬を曳け、と次々に指示が飛ぶ。小侍従の連れて来た供まわりたちだ。

その若い男が袁比良以下、別業の家人たちに告げる。

「ご心配には及びません」

「されど」

「もの狂いの姫さまは必ずや吾らにて都へ連れ帰ります」

「もの狂い……」

「夜ごと邸を抜け、いかがわしいふるまいをなさるのです」

あの姫は物狂いであつたのか。ならば話はつながる。姫が突然現れたのも、姫の短い髪も、妙な薬づくりや父からの便りに淡々としていたのも。夜を徹して難波へと下り、姫の引渡しを求めた小侍従の行動は、世上のうわさに上らせないため。小侍従が別業の外に身をおいたのも姫に顔を知られているからこそだ。筋の通つた説明に、難波の別業の者たちは納得した。

ただ一人、袁比良を除いては。姫を逃した失態、まずあるじ『右相国さま』への悪印象は免れないだろう。彼女は悔しさに歯噛みした。

れんは目に映つた桧垣によじのぼり、築地塀の上から飛びおりた。周囲を探ると人がいて、目が合った。どちらともなく笑みがこぼれた。れんは安堵の笑い、春時は、苦笑。

「春時どの」

「佐久はどこに」

「あ、はい。ふところに」

れんは衣の袖をさぐる。

と、ごろん、と小さな香炉が転がり落ちた。

「それは」

「きつと、食う元手になります」

「……確かに」

「でしょう？」

得意げに微笑したれんは香炉を拾い上げた。

精巧に金格子細工の逸品で、確かに高値には違いないのだが。

「盗賊の所業だろう」

「ぜんぶ、父上のもの。むすめが、少しばかりお借りするだけですわ」

れんは悪びれずに答えを返す。

れんは背中に妙に大きい包みを背負い、玉で装飾を施した懷刀を腰帯に差し、男の童の姿でいる。本人としては万端の旅支度を装っているわけだ。賊からすると歩く宝のようでも。春時はわざとらしく嘆息するが、これ以上触れないことにした。時間の無駄だ。

築地塀の向こうが明るくなる。邸内が騒ぎはじめたのだ。

「佐久、馬を。例の場所へゆけ」

「わかった」

香炉とともに転がり落ちたか、いつの間にか人になっている佐久が走っていった。

「佐久はあおを操れない。だが、あおはれんの言うことなら聞く。

佐久から行く先を聞いてれんがあおを走らせるんだ」

「春時どのも、ともに行かないのですか」

「寸刻ほどはな」

「なにゆえ」

「客人だ」

闇から突如、黒影が飛びかかる。

春時は抜き打ちに影へと一刀。

「……ぐ……っ」

激しい音がし、男が飛沫を上げ転倒した。

「春時どの」

「難波も魑魅魍魎の巣窟らしいな」

れんは小さくうなずくと、れん姫さま、と佐久が呼んだ。

「あおを連れて来たな」

「うん」

すぐ近くでたいまつ灯火がいくつも浮かび、次々と怒号が上がった。

「いたぞ！」

「賊じゃ！」

春時はすばやく告げた。

「くい止める、早く行け」

「春時どのは」

「一人では、怖い」

春時が揶揄するように笑った。れんの小さな顔は血気をなくしていたし、指先は細かに震えていた。だが、自らの手で、切り抜ける覚悟をさせねばならない。

れんはくちびるを結んだ。春時を強く見返し、すそをたぐった。

あおの手綱を持つ佐久が、姫さま、と再び声をかけた。春時の言うとおり、佐久はあおを動かせないらしい。ただ、背には乗れるように、佐久は曲芸師のようにあおに飛び乗って見せた。れんは佐久にあおの背へと引つ張りあげてもらうと、あおのたてがみを柔らかくなくて懇願した。

「あお、行つて」

れんの願いにあおはひとつ荒い息で合図すると、駆け出した。

## 第六話 難波（六）

春時はあおのひづめの音を聞いた。ひとつ憂うべき材料が減ったところだ。

「さて、姫も消えた」

相對する者供、逃げ道を断たんとじりじりつめ寄りつつある。その数、十人は下るまい。

「この場にあるはすべて、都の御前の手の者か」  
答えはない。かわりに刃の垣が縮む。

春時に彼らが何者かを知るよしはない。ただ、覚えのある顔が見える。八条悪王の手下であつたところに見た顔だ。そんな素性の悪い輩もあり、事実かくの如く問答無用で刃を向ける好戦的な連中なら、姫が館にあつてもその身の安全は保証のかぎりではなかつたろう。つまり、難波津も姫の安息の地にはなり得なかつたのだ。

左手から一人が矢のように打ち込んだ。

春時は右足を下げ身をひねりざま、太刀を前に繰り出し左へ動く。敵がどつと足元に倒れた。

また背後右手より、突きが入る。と、正面より上段から叩きつけられる。挟殺の形となる中、半身を返した春時、がつり

と打金が響くとともに、一刀が空を舞った。

正面より踏み出す一人が勢いのめり転倒すると、背後の男が瞬時、動きを止めた。隙を逃さず春時は太刀を打ちこんだ。血飛沫が舞い、ひとりにはひざから崩れ落ち、今ひとりには横転。そして春時は元の位置、元の態勢に戻る。

その間、息わずか五つ。

「回り込め！」

「わきをつめろ」

「落ち着け！」

短い叫びが春時の耳朵を襲う。

「姫を追うのが第一だ」

首領格か。かなり後方にいる。首領をしとめて混乱に乗じて逃げるのは……無理か。

「しかし」

「すぐ助勢が来る」

それはまずい。十人足らずならば凌駕する自信はある。しかし、まともに戦えば無傷ではいられまい。助勢が加わればさらに危険は増す。必要以上の足止めもくらう。

逃げよう。

春時は即断した。追っ手を減らしたかったが、そこまで危険をおかすこともない。れんが逃げおおせる時間を確保すれば、あとは遁走あるのみだ。

「春時」

聞き覚えのある女の声。

気をとられた刹那、猛然と白刃がひらめく。

（しまった）

避けるとつさに足元が揺らぐ。右横に倒れかけるところ、

吾を離せ。

（分かっている！）

太刀の望みどおり手放し片身で受け身をとったところから、空いた手で地を払い、回転の勢いで立ち上がり駆け抜ける。定めた目標は名を呼んだ者。覚えのあるその声の主は……。

「ああ！」

女の叫び声は春時の両腕の中から上がった。

さらに声をも封じるように、春時の左手が女の喉元にあてがわれる。

「動くな」

「小侍様！」

やはりと春時は納得し、抑圧する腕に力を込めた。

小侍従は全身をくねらせもがき、なんとか逃れようとする。が、抵抗するほどにその動きを押さえ込まれ、動くことさえまもらなくなつてゆく。悲鳴を上げようとするも、声ならぬ吐息が漏れるだけだ。

春時は相対する『敵』に強圧的に迫つた。

「下がれ」

彼らには目に見えた動きはない。

「下がれ！ この女の喉を絞めつぶす！」

じわりと包囲がゆるむ。距離は歩数にして十歩あまりか。邸の灯りが頼りの暗がりの中、かろうじて互いの立ち位置が分かる程度の距離だ。これなら小侍従を派手に突き放して、かく乱させた隙に逃げおおせることは可能だろう。

だが三步ほど先に太刀を転がしたままだ。太刀は回収したい。龍神の太刀ということもあるが、それ以前に手持ちの得物がないのだ。「この場にあるはすべて、都の御前の手の者か」

春時は再度、同じ問いを投げた。時間稼ぎだ。小侍従を抱えながら、徐々に歩を進めて太刀へと近づく。

「答えられないか。右大臣どのの御意向は、刃を以って姫を追うことではないからな」

答えはない。なくともよい。出まかせだからだ。太刀を拾おうとする動きを気取られぬよう、揺さぶりをかけるための問いに過ぎない。これはどうだ。さらなる動揺を誘おうと、

「見覚えがあるぞ。そうだ、都の十輪院で……」  
「……！」

追手の者たちの間に動揺が走つた。今しかない。

小侍従を締め付ける右腕をゆるめ、太刀に手を伸ばした。小侍従はすきを逃さず、自由となつた右半身をひねり、背後の春時に肘撃ち。太刀に気をとられた中でのわき腹への衝撃に、春時の左手も思



わずゆるんだ。好機とばかりに小侍従が渾身の力で春時より逃れようとす。が、春時は頸部に手刀を振り下ろす。小侍従はその場で崩れ落ちた。

「小侍従様！」

春時は足元の太刀を悠然と拾いなおし、

「おっと、動くなよ」

と、倒れる小侍従の背中に刃先をあてる。

「今度は喉を潰すんじゃない、背中を突き通してみようか」

形勢は変わらない。距離も時間も十分稼いだ。もう逃げ時だ。

「みようか、ではないな。突き通そう」

そう宣言した春時は、大きく太刀を振り上げ、振り下ろす。

大丈夫ですか。

この身に呼びかける声が重なって聞こえる。意識はある。だが空るだ。後頭部には鈍痛が残っている。それでも小侍従は痛みをおして身を起こした。そして、おのが身を支える若い男に告げる。

「問題ないわ」

虚勢だと男は見抜くが、あえて気づかわず本題に入る。

「春時、とおっしゃってましたか。ご存知なのですか」

「……八条悪王とかいう悪党の一味よ」

「なにゆえその賊の一味が姫を助け、連れ去るのですか。ましてやそんな小者が十輪院の衆を知っていたり、賊の一味が右大臣どのの御意向うんぬんを口にしたりするものですか」

「知らないわよ！」

小侍従が顔を上げてわめくや、また顔を伏せた。両手を握りしめて痛みをこらえているようだ。この小侍従が髪が乱れるのも忘れてくつてかかるところ、春時という者は相当小侍従の情緒に触れる存在らしい。

だが小侍従も取り乱したと悟ったのだろう。毅然と頭を上げ、冷

静さを誇示するように男に流し目をくれる。

「……嘉羅<sup>から</sup>」

「はい」

「姫を追って」

嘉羅と呼ばれた若き男、肩をすくめて小さく笑う。

「なぜ？ おそらく中将の姫は都に当分還らぬでしょうし、充分外聞の悪いことになりましたから、これ以上は人手を割くこともないと思うのですが」

「姫がこの世にいる限りはそなたの本望に障りがあるでしょう」

嘉羅は答えず近くの者を呼び、小侍従の身柄を預けた。そして立ちあがると素早く撤収の段取りを指図する彼に、小侍従は鋭く問いただした。

「追わないというの？」

腰の刀をすえ直しつつ嘉羅は答えた。

「すでに追っています」

「ならそう言いなさい」

「安請け合いはよくないですから。あ、そうです。小侍従様にお願  
いがあるんです」

「なんです」

「傷が癒えましたら都へお戻りを。わざわざ、このような場に足を  
運んでいただかなくともよろしいので」

小侍従は分かったわ、と切り捨てるように答えた。

嘉羅の言い方は丁重ながらも、小侍従を暗に責めるものだった。

彼女が場違いにも顔を出した挙句、人質となつて追撃を阻んだ。二  
度としゃしゃり出て邪魔するなという非難なのだ。

たかが門番のくせに　小侍従は反発を覚えたが、確かに小侍従  
が春時の存在に気をとられ、彼らの足を引っ張ったのは事実だ。

なにより、中将の姫が難波に向かうと突き止めたのも、この若い  
右大臣邸の門番なのだ。加えて、物狂いの姫と吹聴して邸内での騒  
ぎをおさえた機転、十輪院から借り受けた者たちを率いた手腕も見

事で、彼の能力は認めている。小侍従は素直に引き下がった。ただし、都で吉報を待っている、と嫌味も忘れない。もつとも、

「ええ、いずれよい知らせをお届けしますよ」

と、まったく嘉羅にはこたえたようすはない。

「それと小侍従様にいまひとつ確認しておきたい」

「なに？」

「今度はあの春時は、斬りますよ」

小侍従はきつと厳しく目を細めた。

許さない　春時。今や行動のすべてが許せない。あの男はなにかの目的がある。その目的のために八条悪王も、そしてこの私も利用したに違いないのだ。でなければ中将内侍を守らんとする意味がない。その目的がなにか。それは分からない。けれど……知る必要もない。私を利用した。それだけで許せない。

そして中将内侍、春時の手により包囲網より逃れた横佩大臣の郎女<sup>つめ</sup>。あの忌々しい姫も、どこに行こうとも追いつめてやらなければ。首を届けて頂戴」

小侍従を見下ろして嘉羅は微笑した。

「ご希望の旨、了解しました。それでは御前様によろしく」

## 第六話 難波（七）

れんはあおにしがみついてもう一度「お願い」と言った。

あおはそのささやきだけで、れんと佐久を目的の地まで運んできた。足取りに迷いはなく、命ぜられることなしに足は止まり、

「着いたのね」

と、れんがたずねるとかるく鼻を鳴らした。

頭上を見上げると十八夜の月。その光は欠けゆく途とはいえ、未だ明るい。れんは神経をとぎすまし、周りを観た。

まず、耳にするのは虫たちの声。多すぎてむしろ騒がしい。目の前には大きな丸太がいくつも積まれており、右手方向へと多数の小山をなしていた。丸太山の山脈の山すそには小屋があるようだ。左手はというと長いすすきや葦が茂り、正面は丸太の山のその先に大きな湖が広がっている。あおに乗りながらわずかに前のめりになっているのは、湖までに傾斜があるせいだろう。

湖……いや、難波は唐ゆきの湊がある場所だ。それなら、

「海でしょうか」

「川だそうですよ」

背後で佐久が答えた。

「あんなにも広くて大きいのに、川なのですか」

「ええ、川だそうです」

「海ではなく」

「春時が『この川岸で』どうこうって言っていましたから。おいとも驚いたんだけど」

「わたくしも、たいへん驚きました」

たくさんの水をたたえる 川の対岸は暗闇にとけ込んでいる。

寧良の都の東を流れる佐保川は、漆黒に包まれる新月や陰り夜でもないかぎり、向こう岸はじゅうぶん見えた。だが、目の前に横たわる「川」は水平線さえわからない。

「ところで、春時どのは『この川岸でどうこう』なんとおおせでしたか」

「待つ間は材木の陰にひそんでいるようにと確かに隠れるにはうってつけた。」

「わかりました」

れんはあおの背中から下りた。すると、足が少し沈みこんだ。ぎよつとして足を上げ、そろりとまた地面に足を置く。

（こんな地面はじめて）

妙にざらりとした感触でいて、やわらかく、湿り気を帯びている。削った氷に蜜をかけたような感じだ。しかし、泥の中のように足の上げ下げに難もなく歩けそうだと感じたれんは、手綱を腕に巻きつけた。

「岸へ、行きましょう」

「岸へですか」

佐久は不安そうに言った。

「あおに、お水を差し上げようと思います。たくさん走っていただいたのですから」

佐久は迷う。川は怖い。濁流に流されかけたのは一昨日の話だ。

「佐久どのはここにいらして」

「でも材木の陰に」

「あおが満足なさったら、すぐに戻りますから」

しばらく悩んだ佐久だったが、

「すぐに戻ってくるって言うてるんだしね」

言い訳がましく姫さまの言うことだから、と独り言をくりかえしながら、丸太にどんと腰を下ろした。

かたやれんは、川岸まであおと歩きながら、あおのおしりの両横に下がる荷袋が気になった。春時を待つ間は、荷をおろしておけばあおも楽ではないだろうか。そう思って、袋どうしを結ぶ縄に指をのばした。結び目は固く、川岸に着いてゆっくりほどこうとしても難しそうだ。

「やっぱり」

否、と首を横にふつたれんは手をひっこめる。

「春時どのが載せた荷ですし、春時どのにほどいていただいたほうがいいかも」

今一度、両手をのばし、荷を下から支えてみる。麻袋は目が粗く、持つと手指が痛くなりそうなさわり心地だが、中身は柔らかな感触の品のようだ。袋そのものはさほど重くはない。

「ああ。申し訳ないけれど、もう少し、負ったままでいていただけますか」

そんなのどちらでもいいよ、といわんばかりにあおは適当に首をゆらした。

「ああ、ありがとう」

川岸に近づくと、右手のすすきと葦の茂みがなくなり、視界が開けた。眼前に広がる川の大きさへの驚嘆もさることながら、茂みに隠れていたその風景に、れんは息をのんだ。

「きれい……」

上流、といっても今立っているところからはほど近い場所だろう。何十もの光が闇の中、静かに舞っている。

川岸にはかがり火が等間隔に並び、そのあかりが川面にも映っていた。地上には高床の建物が並び、川には数隻の大きな船と、数えるのを途中で断念してしまうほど多くの小船が停泊している。それらがすべて黄色い炎で暁色に染まっていて、まるでこの世のものは思えない壮麗な光景に見えた。

「祭礼、かしら。あんなに大掛かりなのは、見たことがないわ」

大きな川。無数の燈火。

なにを奉る祭礼だろう。間違った名を呼んでは失礼だろうし、拝趨せずにただ眺めているだけでも無礼だろうし、どうしたものか。そうだ、ここを「川」と知っている春時に聞けば分かるだろうか。あの火を捧げるべきが仏か神か。御名をなんと唱えるべきか。

「春時どの」

その名を口にとすると、思い出した。  
最後に聞いたことば。茶化す口調までもそのまま。

ひとりでは、こわいか？

あのときはからかわれたようで、くやしかった。でも今は、

「……怖い」

が、正直な気持ち。

「春時どのと離れ、ここまで来るのは、怖くありませんでした。でもこうして待つのは、とても怖い」

今、ひとりになって、気づく。

「もしも……春時どのが、来なかったら。わたくしはどうしたらよいのでしょうか。都にも帰れない。難波にもいられない。これが川であの火がなにで、右や左になにがあるかさえも分からない……なのに、春時どのおひとりを渦中に置いて逃げてくるなんて、なんの意味があつたというの……」

あおが荒く息を吐く。

れんははつと我にかえつた。

「そうね、あお」

れんは白い手のひらをあおの首によせた。

「きつとご無事ね。そして今、こちらへ向かっていらっしやるに違いないわ」

あおに導かれてれんは砂の上をゆつくり歩んだ。再び、闇の中に広がる炎の宴はれんの視界から消えてゆく。虫の声は岸边から遠ざかるほどに大きくなっていった。

が、その声がにわかに途切れた。

丸太の山と山の谷間でれんとあおは立ち止まる。

「佐久どの」

違う。大人だ。

「春時どの」

違う。人影はみつた。

背後で、じやり、と小石をこすりあわせる音がした。ふりかえると影がもうふたつ。影の足元でざらりと銅光が鈍く光る。光る抜き身の刃のその先は砂にまみれていた。

何者かとたずねる間もなく人影がれんに飛びかかった。

あおがいなき、れんは大地をけり上げた。湿った砂がはじけた。目の前の二人がひるんだすきに、横から小さな影が飛びかかった。

「佐久どの！」

「うわあつ……逃げて、姫さま！」

人影の肩にしがみついた佐久がふりまわされている。助けたい、れんは思った。しかし、いざとなったら佐久は小枝になって身を隠せるのだと思いいたる。

（今、わたくしがやらないといけないことは、逃げること）

れんはあおの手綱をつかんだ。あおは鼻息荒く地団太を踏んでいる。

「あお」

そして手綱を腕にからみつけて、乗った。あおが暴れだした。

「あお、逃げるのよ」

れんはあおの首にしがみついて命じた。あおは一人けり倒し、さらに興奮して前脚を何度も上げると、どこともなく駆けた。ふり落とされないよう、れんは渾身の力をしてしがみついていたが、いったいどこへ向かっているかわからない。

（どこへ行くの）

手綱をからめた腕が痛む。

（どこへ逃げたらよいの）

たてがみをにぎる手がすべる。

（分からないわ！）



## 第六話 難波（八）

あおが竿立ちになり、れんのからだはこらえきれず投げ出された。

れんの目の前の世界がぐるりと回った。川面が見える。月が半分、雲で隠れようとしている。丸太の山が縦に並んでいる。

自分の周りから水しぶきが上がった。

と思うと、背中や頭に痛みを感じ、次いで全身が水に覆われ沈みこんだ。

（川に落ちたのね……また）

妙に冷静にれんはそう思った。それと、この前の泥だらけの川よりはましだ、とも。

自分の周囲をあぶくが取りまいては次々と水面へと逃げてゆく。あぶくが消えると今度は、さらに細やかな光のつぶが右へ左へとちらちらと舞っていた。

おしりが川底についたとき、水面は手をのばせば届くほどに近かった。川は浅くて、立ち上がればよいだけだ。川底の地面は川岸よりもさらにやわらかい砂場。立とうとして足をとられ、一度おぼれかける。今度は慎重にひざをついてから立ちあがると、胸から上が水面に出た。

川岸を見た。あおが取り囲まれている。取り囲んでいるのは三人ほどだ。

「あお、助けないと」

れんは急ぎ、両腕で水をかき分け岸へ向かった。

あおの横にいる男が香炉を手をしている。こいつは相当のお宝だぞ、と不愉快なしゃがれ声が聞こえた。いつの間にかれんのふところからこぼれ落ちたらしい……が、香炉はこの際どうでもよかった。むしろ、香炉を落としたがゆえ、今まさに、あおを危険にさらして

いる。そのことをれんはつよく悔やんだ　　あおはわたくしが必ず助けなければ。

喜々とした男の声がれんの耳に届く。どこの若様のお馬さまだ？　まあいいだろう、お宝だ。荷の結び目を強引に切ろうとした。あおが抵抗する。

「やめてください」

丸太のわきに人のままで佐久が倒れているのが見えた。

あおは、手綱を強引に引っ張られ、首や尻尾を押さえつけられていた。

「やめてくだ……」

あおが全身をねじらせる。いらだった男たちのひとりが刀をふり上げた。この糞馬が！

「　やめて！」

れんは懷刀を抜き、ひざ元の水をけりあげて走った。

「あおから、離れて！」

そのとき、川下より激しい勢いで水柱が立ちあがった。

賊どもが川へと顔を向ける。と、水柱は狂える三頭の大蛇の姿となり、走るれんの頭上を追い越した。

れんはにわかに覚えた畏怖で足をとどめた。

賊たちには見極めるときも、声を上げる間さえもなかった。大蛇は男たちに襲いかかった。ひとりはじき飛ばし丸太の山に叩きつけ、ひとりを葦の茂みに叩きこむ。と、それはすぐに姿を消した。

寸刻ほど

静寂があたりを支配した。

おずおずと、れんは後ろをふりかえる。

川はもとどおり穏やかな流れをたたえ、水面に月のすがたを映していた。少しばかりの風が通りぬける。と、映し身の月はゆらゆらと形を変え、葦の茂みが揺れてすすきの穂どうしがささやきあった。

（なにが、起こったの）

わからない。だが、れんにはわずかに自覚はあった。すなわち、自身のあおを救いたいとの願いに大蛇は応じたのではないかと。（わたくし自身が、呼んだ……まさか、そんなことがあるはずが）れんは頭をふって一度、

「いいえ」

と強く言いかけ、その考えをふりはらった。

まだ油断はできない。あおは無事。だけど、あおの影にとっさに隠れて難を逃れた男がまだひとり、残っている。

れんはその男を見すえた。短刀を手にかく握りしめ、胸元でかまえる。

「な、なんだ……今のは……！」

その男は叫んだ。なんなんだ、なにが起こったんだ。幾度となくくり返し叫んでいた。

れんは気づいた。男のすぐ後ろにえぐり掘られたような大きな窪みができていた。あの大蛇が大地に刻んだ傷跡だろうか？

さらにあおと男に近づくと、男はれんを見るやますます恐慌をきたし、わめいては後ずさりをした。男は悲鳴をあげつづけた。化け物、化け物だ、化け物があらわれた、近づくな、化け物、助けてくれ、殺される。後ずさった彼は窪みに転がり落ちた。

「化け物。わたくしが、化け物？」

れんはうめき声を聞いた。葦の中に埋もれる男は苦しげに倒れ伏して、うめいていた。つづいて、丸太にたたきつけられた男。意識を失っているのか微動だにしない。そして砂の穴の中の男は支離滅裂なことをわめきつづけている。

れんはふるえた。

あらためて思う。怖い、と。

腕がふるえ、手がかじかみ、その手から短刀がこぼれ、砂上にとり落とした。れんは短刀には目もくれなかった。ただ目の前の惨憺たる情景をぼんやりと見つめ、絶望を吐き出すようにつぶやいた

化け物。

「そこで何をやっている」

どこからか若い男の声がし、続いて子どもの声がした。

「役人だっ」

逃げ来た方角、斜面の上には二、三の火がゆらめいていた。その火が、れんたちのいる場所に近づいてくる。

もう一度、男の子がどこから呼びかけた。

「役人がきたぞっ」

助けてくれと悲鳴をあげていた男はすぐに走り去った。葦の中に飛ばされた者もはっと目を覚まして身を起こすと、その火が近づくのを見てとるや、役人が来たと叫んで逃げ出した。

れんはその火が近づくにつれ、緊張や恐れがほぐれていった。そして自分に向けられる、皮肉がちなのに優しい、安心できることばを待っていた。

「大活躍だな」

「春時どの」

ふたりはお互いに歩みより、向かいあう。

「わたくしを、ああや、佐久どのが、助け……」

れんの双眸から涙があふれる。頭がいつぱいでろれつが回らない。「待たせて悪かった」

あふれる涙をれんはぬぐおうとした。が、川に落ちて全身ずぶぬれになったからか、黒髪がほおや鼻や額や目元、口元にさんざんへばりついている。ぼろぼろと双眸からこぼれる涙は、頬を伝い、髪に沿って流れたり、鼻の先からしずくになって落ちたり、口の端にたまったり。

「あの、春時どの」

「どうした」

「今、わたくし、化け物みたいな顔、してませんか」

「気にすることはない」

「やっぱり」

れんは半分やけになって、ふふつと笑った。そうよね、そうに違いないもの　みずからに言い聞かせて、笑った。

春時が不審に思い、どうしたんだとたずねるが、

「なんでもありませんわ。大丈夫です」

れんは微笑んで、首を横にふった。

「そうです。だいじょう……」

大丈夫、と言い終わらぬうちに、れんは足元から崩れおちた。

佐久が小さな声でつぶやいた。

「姫さまは」

「寝入った」

春時はれんの顔に視線を落としたままだ。

「佐久、なにが起こった」

「悪いやつらに襲われてたら、川からたくさん蛇がでてきて、やつつけたんだ」

「蛇……」

れんの安らかな寝息が腕の中から聞こえる。小さく白い手は、春時の衣をしっかりとつかんで離さない。春時がそつと丸太の山にもたれかかると、れんの寝息が一瞬みだれ、左手首にかかる数珠が少しゆれて、音をたてた。

れんの睫毛が、その頬に影を落としている。

春時が駆けつけたとき、その佐久いわく、悪いやつらの叫び声を聞いた。化け物、確かそう耳にしたはずだ。そして、れんは泣きそうな顔でこつたずねたのではなかったか　今、わたくし、化け物みたいな顔、してませんか　。

（人ならぬ力と、龍神は告げたが）

佐久が春時、と声をかけると、彼はふつと困惑めいた笑いを見せた。

「おまえのおかげだ」

「おいら、なにもしてないよ」

「いるだけで救われる」

春時は眠るれんに視線を落とす。童子のような短い髪に指を通すと、髪はさらさらと指からすべり落ちた。

## 第七話 禅師（一）（前書き）

これまでの話中のうち、れんの父藤原豊成の官職を『右大臣』から『前の右大臣』やニックネーム的な『横佩大臣』、単に『大臣』おとどなどの表現に修正しました。最新更新分から読まれる方は戸惑うかもしれませんが、ご容赦ください。

今回は古代難波トラベルガイドです。

## 第七話 禪師（一）

春時は川に足をひたして、糸をたれていた。

「このあたりは堀江と呼んでいる」

そして岸辺にならぶ高床の建物郡を空いた左手で指さした。

「堀江の館むろつみそうの倉だ。

倉は船で運んできた荷物を荷揚げして、保管する。やがて別の小船に載せかえて川瀬をゆくか、荷車に載せかえて街道を進んで、都へと運びこむ」

水際かられんは北の方角をながめた。

高床の倉を見下ろすように大きな館が築かれている。それを堀江の館むろつみといい、官吏たちが詰めており、ときには外つ国からの賓客が滞在した。

一方、川岸には小船、大船とりまぜて密集しているが、八丈にもなる大船が十ほど並んでいる。その光景はなかなか圧巻であった。「では、昨夜見たたくさんの火は」

「倉の警固のためだな」

川岸と川面を覆いつくしていた昨晚の無数の燈火は、祭礼ではなく、都へ向かう貴重な荷を守るための灯りだった。祈りをささげなかったことをれんは悔やんでいたが、その後悔は不要だったようだ。

「春時どのは、お詳しいですね」

「そうでもない」

「春時どのは市人いちひとだったのですか」

「盗人だ」

「盗人だから、お詳しいのですか」

「満載のお宝を売りさばくうちにな」

春時のはぐらかすような応答もさることながら、表情が一瞬こわばったのをれんは見逃さなかった。身の上話に踏み込まれることを明らかに拒んでいた。だから、れんもそれ以上はたずねない。



「でも今は、盗まないで商いをおこなってます」

「でもついこの前は、流浪人さ。お、またひっかつた。佐久」

「いいかげんにしろよう……」

佐久はだらだらと魚籠びくを抱えて、川に入ってゆく。

「おいら、川は大嫌いなんだって言ってるだろ」

「大嫌いつてほどでよかつたな。慣れただろう」

そりやそうだろうけど春時はやっぱり横暴だ、と佐久はぶつぶつ不平をこぼした。れんもそうね春時どのはとっても横暴ですわ、とつぶけた。あおは静かに立っている……どうも寝ているらしい。そして、春時はため息をついて言った。

「姫さまにうまいハゼを献上する手伝いを頼んでいるだけだ。ここが横暴なんだ」

佐久はぶつぶつ言いながら春時の釣った魚を魚籠に入れる。

朝の食事はさばきたてのハゼの刺身。酢とれんが持ち出した醬ひしおで堪能する。

ちなみに食するのは人たるれんと春時のみ。佐久は桜の小枝なので、水を飲むだけだ。だから佐久は不満たらたらだったわけだが、ただ、れんが、

「こんなおいしいものはじめて」

と喜んで佐久にお礼をくり返すうち、佐久の機嫌もすっかりよくなった。

食事をとり終わると、れんの旅装もおおかた乾いていた。

釣りすぎた分は丸太山のはしの小屋まで行き、干しハゼと交換した。削って湯に浸すと味がでるので旅の保存食にする。余った分は山村に持ってゆけばよい取引ができるだろう。

そんな算段をしている春時は、やはり市人かその周囲の人だったのではないか。そのようにれんは想像するのだった。

「では行くか」

あおの背にはれん。男物の旅装束だが、それなりの身分の子どもに見えた。

あおのわきには頭には頭巾、白衣に黄褐色の袍ほうをまとう春時。

麻の貫頭衣に勾玉を下げた佐久。

やや目立つ。逃げるのにはふさわしくないとれんは言ったが、春時はその方がよいと返した。かえって目立つくらいの方が、街道筋の駅役人の目にとまって不審に思われないうし、市での購入も信用されやすいというのだった。

（でも、わたくしたち、どこに行こうとしているのでしょうか）  
都にも戻りがたく、難波にも居場所がない。ほかに行く場所を知らない。

春時が知る土地にでも行く？ 春時は身の上を詮索されることを嫌っているのに？

丘陵を登りきると、東には広い湖が見えた。

「湖は草香江という」

草香江から流れ出す川は、堀江をとり東西へ横切っている。一方で、堀江には北側からもうひとつの川筋が合流していた。

南に視線を転じると、草香江の南側から四、五本ほどの川が南へと川筋を作っている。そのひとつはやがて方角を東に変え、一昨日越えて来た生駒の山々へと伸びていた。山の端から昇りきった太陽の輝きがまぶしい。

今度は左手……西方に目をうつす。と、おびただしい数の礫洲れきすによる島があり、島々のむこうに海がひろがっていた。

れんは空想の中で目の前のすべてを黄金に染め、その美しさにひたる。

難波の海に夕日が海に沈みゆくころの絶佳な美景は、幾人もの歌枕に詠まれ、世に知られていた。

「思ったより船の便は多そうだな」

れんは北へ伸びる堀川へと視線をもどす。

瀬戸内海から難波津へ入り、ほかの湊をめぐる航路は定まってい  
るらしい。北の川筋からやってきた船は堀江へと入り、堀江を出て  
ゆく船は草香江を周回する。

「江を回遊する渡し船で東岸の江へゆこう。幸いにも資銭は潤沢に  
あるしな」

「船を降りたあとは」

「東岸から北へ向かい、淀川に沿って歩いてゆく」

「その淀川という川は、船に乗ってはいくこと、はできないのです  
か」

「その便もあるが、遅いし、あおもいるなら乗らないほうが賢明だ  
な」

「あおがいると？」

「あおを乗せられるくらいだと、それなりの大船に乗らねばな。渡  
しだけならよいが、その先は悠長な船旅になるよ」

難波津より先、川の航行は櫓をこぐのではなく、小船で棹を差し  
て進むものだった。あまりに浅いところは船の舳先<sup>へさき</sup>に麻綱<sup>ひ</sup>をつけ、  
船を下りた水主たちが岸から麻綱を曳いて動かしていた。

夏の夜は道たづたづし船に乗り

川の瀬<sup>せ</sup>ごとに棹さしのぼれ

ましてや、大船は喫水<sup>みづ</sup>が下がるために、川に入ると航行が困難に  
なる。水量の少ない時期は淺標<sup>みおつくし</sup>を見逃して航路を逸れると、川底に  
船がついて座礁<sup>ざせう</sup>してしまう危険性があつた。それに、川の流れに逆  
らつて川を上るのは、櫓をこいでも容易には進まない。航行は西風  
を利用していたから、風の助けがないときは立ち往生も同然に、ほ  
とんど動かなくなるのだった。

難渋する航行のようすは和歌にも歌われている。

堀江よりみをびきしつ御船さす  
しづ男の伴は川の瀬申せ

「遅いとは、どれほどですか」

「堀江から山崎湊まで四日。対岸まで渡し船、そこから歩きなら二日もかからない」

「歩くほうがよほどまだね」

佐久が笑ってそういうと、

「おまえは水辺に近づきたくないだけだろう」と春時がつつこんだ。

ただ、佐久の言うとおりにはちがいない。あえて川の瀬を上る船に乗る用途といえ、至急ならざる公用、資材の運搬、それに貴人の川遊びくらいのものであった。

「ちよつと待った」

春時があおの腹を軽くたたいて止める。

「どうしました」

「荷台がずれている」

春時はあおの左側に回りこみ、れんのすぐ後ろの荷物かごを上げた。荷台とかごをつないでいる縄がほどけかけている。縄の両端をひっぱり、しっかり結びなおした。

「まあ、こんなもんでいいだろう」

春時は納得するのだが、れんは少し不審に思った。若干慣れない手つきだったからだ。商いのことには詳しいが生業なりわいとしているようには見えない。盗人にしても盗んだ荷物を運ぶ機会はあるう。

れんは沈鬱にうつむいて考える。

詮索はしたくない。けれども、一度ふに落ちないと感じた疑問は、簡単には振り払えない。せめて、どこに向かうつもりかだけでも知りたい。

「春時どの」

れんは意を決してたずねた。

「これよりわたくしたち、どちらへ参るのでしょうか」

「美濃に決まってる」

れんははっと息をのんだ。

春時は当たり前だというように、淡々とつづける。

「良くしてくれた人がいたんだろう、なにも聞かずに。なんの見返りも求めず、親切にしてくれた人が。その人のために、美濃へゆくんじゃないかったか？」

ええ、とれんは大きくうなずいて笑った。

第七話 禪師（一）（後書き）

「堀江よりみをびきしつ御船さすしづ男の伴は川の瀬申せ」  
「万葉集」巻18 4061）

「夏の夜は道たづたづし船に乗り川の瀬ごとに棹さしのぼれ」  
「万葉集」巻18 4062）

## 第七話 禅師（二）

「なにか、忘れていた感じがしております。なにかわからないのですか」

れんは馬上で首をかしげた。

しかも未だ心ここにあらざる面持ちである。

「きっと、大事なことははずです」

「忘れるようなら大事でもないだろう」

「春時どのは、あげ足とりばかり」

文句を述べたあと、れんは再び思い悩む。

逃げることで頭がいっぱいだっただ。今でも無事に落ち延びることばかりだ。それで、大事なことを忘れてしまった。思い出せなくとも大事なこと。それはただの勘違いでは？

ひとたび迷いが生じると、すべて自分の思い込みではと疑わしくなる。

「わたくしは、ほんとうになにか忘れていたのでしょうか」

「そのうち思い出すさ。あまり考えすぎるとまた落馬しかける」

「しかけません」

言い切った。そのくせ、落馬しない自信もない。春時のからかい……ではなく忠告のどおり、深刻にならずほどほどに考えることにした。

津にはたくさんの船が並んでいたが、春時は大きめの船に近づいていった。船の曳き手らしき男になにかをたずね、次に違う男のところへゆく。

「船頭」

ひと声かけた先、男がふりかえる。

春時が手振りで行き全員をさし示し、外つ国の言葉で話しはじめた。

彼らの言葉は唐のものだ。れんは話せないが、音読はできた。宮

廷への出仕には『論語』『孝経』といくつかの経伝が素養として求められるからだ。ゆえに、れんには彼らの会話をつまびらかにはうかがい知れない。しかし、断片的に推察はできた。江を渡るための交渉だろう、と。

にしても春時の交渉は場慣れしている。

（やはり商い人であつたのかしら）

たずねてみたいが嫌がりそうで、もどかしい。

「半刻もなく出帆するそうだ」

春時が急いた。

渡し板から船上に乗ると船尾にゆけとのこと。主屋形より後方にある、小さな<sup>ともやかた</sup>艦屋形の軒下に陣取った。少し興奮気味のあおを春時がおさえる。

佐久は水ぎらいなわりに船は気に入ったらしい。あちこち歩き回って、さっそく話を聞きつけてきた。

「あおが暴れたら即、船からたたき落とすって言われたよ」

「まあ、それは大変」

れんが見たところ、あおはまだ落ち着きがない。

「たたき落される前に他の乗員を道連れにするがね」

春時は好戦的なことを言いだした。

だが、二、三人ばかり道連れにしたところで状況が好転するでもないのだ、

「あおは姫さまにお任せしたら」

「それがいい。あおが暴れたらだれよりも真っ先に川の中だ」

「わたくしが入水するときは、春時どのが、どなたかを道連れにしてからです」

「非道いな」

「姫さま可愛い」

「それで、わたくしは、あおの心が安まるよう、声をおかけすればよろしいですね」

あおをなだめることが肝要と結論づけられ、それはれんの役目と



なった。れんが幾度か大丈夫と声をかけると、あおは落ち着きを取りもどし、端然と起立した。

空中で大声が飛び交っている。おそらくこれも唐の言葉だ。

「帆を開くんだって」

見上げると空を横切るかのような帆桁に、二人ほどが座っていた。彼らは落ちないように帆桁に足をからませて座り、器用に網代帆と帆桁を縄で結った。やがて結び終わると、するすると支柱を降りる。風を受けて帆が弓なりになった。

銅鑼が鳴り響き、船が揺れた。

あまりの大音量にれんの顔がこわばる。

「だ、大丈夫よ」

あおをなだめるも、当のあおはすっかり平然とすました顔で起立していた。

船の揺れは最初だけだった。水をかき分けなめらかに進む。潮流や波のほとんどない江をゆき、主に網代帆で受けた風の力で航行しているため、あまり船体は揺れがこない。海洋や、逆風のとき、水の底に棹差して進むようになると、船がぎこちなく動いて揺れを感じやすくなるという。これも佐久が聞いてきた知識だった。

佐久の好奇心はとどまることを知らない。

「春時つてさ、外の国から来た人？」

れんは佐久の遠慮なさにむしろ感謝しつつ、春時を見た。

「酒家でも唐人の話にふつうに応じてたしさ」

春時が面倒くさそうに言う。

「おまえくらいの年かつこの頃には自然と覚えていた」

「自然と覚えるって、どうしたらそうなるのさ」

「そういう者たちが来るところにいれば」

「どんなところ？」

「難波みたいな」

面倒くさい、というよりはまともに答える気がなさそうだ。

「難波にいたの？」

「さっきまでいただろ」

「じゃなくてさ」

やはり答えをはぐらかされる。

「それよりも佐久」

「なに？」

「俺とお前が父子という設定はどうしても認められんな」

「なぜだい。酒家ではごく自然だったでしょ」

世間が認めるよ、と言う佐久。そこまで年を重ねてないと主張する春時。彼らは設定を偽親子とするか偽兄弟とするかで論争をはじめた。

れんは、あおをなだめるふりをしつつけた。意見を求められては困る。どちらかの肩を持たねばならないからだ。ただしれんは性格から、まじめに意見は考えていた。養い子なら父子でもまったく不自然ではない。商い人ならなおさら。そもそも春時どの、そうおっしゃるからにはおいくつなんですか。

かくしてあおはれんの逃避行動のダシにされた。大丈夫とくり返しつつやかれるのを聞き流し、ため息ならぬ鼻息をひと吹きさせていた。

## 第七話 禪師（三）

西の空に日が傾きつつあるころ、樟葉くすはの里を通りかかった。

淀川水運の上流の拠点であり、山陰道との分岐である山崎まではあと数里もない。船は山崎湊に拠せることが多いからか、岸边には漁をする小船がいくつか並んでいるほどだ。

ただ、人通りは多かった。

難波と違って、官人らしき人は少ない。

疲れきったうつろな目をし、薄汚れた装いで行き交う旅人が目立った。

かれらがどういった人々なのか、れんは耳にしたことはあった。

兵士か、土木工事か、国衛か寺の造営か。そのいずれかの徴発をうけて現場に赴くか帰郷をする人々だ。いずれの雑徭ぞうように携わるにせよ、かれらが郷里と現場との旅のあいだに飢えに苦しむことは珍しくない。かれらは日々の暮らしも苦しい。その上に、手持ちの装備や食糧を持ち出さねばならなかった。旅の途中でなけなしの蓄えがなくなれば、やがて衰弱して命を落とす。

生きつづけて再び出会えた、あのきよくの老親たちはまだ幸せなほうだった。

苦しい思いを飲み込むように空を見上げた。雲を眺めるにつけ、世の無常さを感じずにはいられない。れんの目に映るのは空ではなく、やはりどこか苦しげに前へと進む人々の残影だった。

春時と佐久は、れんがどこか上の空になっていることに気づいていた。

「姫さま」

「佐久、邪魔をするもんじやない」

「どうして」

と佐久が問うと、

「やんごとなき方は、世の在りようをその目で見、そして世を良く

するために考えることがつとめなのさ」

横であれこれ言っているのに、れんは無反応だった。

「父上つてももの知りだね」

「兄だと言っている。親子設定は認められんとあれほど」

「だからそれは世間が認めてくれてたじゃない」

再度論争をくりひろげる彼らだった。

が。

「れん？」

邪魔をするなど言った当の春時がれんに声をかけた。

「……………春時どの」

「どうした」

「思い出しました！」

れんは突然大声をあげた。そして、あおから落ちかけた。

毎度のことと春時が支えたのだが。ため息をつきながら何を、とぶつきらばうに言う春時に、れんは身を乗り出さんばかりに答える。

「薬を作って、届けねばならないのです」

「どこに。誰に」

「都の、家の司の、瀬雲せぐもにです」

瀬雲　春時は思い出した。都の右大臣家司の堅虫のひとりむすめ。

蒼白となった顔に、うるんだ眼。堅虫に人ばらい中だと叱られながらも、几帳のかけで小さな体をふるわせながら平伏していた。あれは、春時があの子を見た最初であり、かつ最期の姿でもあった。

もはや瀬雲はいない。だが、そのことを春時はれんに話していない。身代わりとして命を落としたのだ、とはどうしても告げられないでいる。

だから説得理由はひとつしかない。

「都には戻れない」

「しかし」

「追っ手がかかっている」

「瀬雲は今も苦しんでいます」

れんはみずからが苦しんでいるように訴える。

「昨晚のことをもう忘れたのか。やつらは簡単に刃を向けてくる。命を落とせば、その瀬雲が苦しむようになる。なにも変わらない」

「薬を届けたら、また逃げればよいではありませんか」

「簡単に考えるものだな」

冷ややかに春時が言った。

れんは常ならぬ不安を感じる。今まではあきれたと言いたげな口調だった。思えば、れんの無知をとらえて冷笑はしたが、受け入れる余地があつてこそその揶揄や反論だったのだ。今の応答は違う。あきらかな拒絶だ。

「……春時どの」

「山崎までゆき、泊まれるところを探そう」

春時の誘導にしたがい、あおが方向を変える。

れんはことばを継げなかった。

しかし、彼が冷笑とともに態度をひるがえすことを望む。

難波へとゆく生駒越えでは、望みは受け入れられた。仕方ない、とおおをれんの望む方向へと向けたのだ。山崎からも、南へ進めば都に戻ることはできる。

西からの風が北からに変わる。九月、陽が傾くととたんに寒さを感じはじめる。だから今夜は山崎で足を落ち着ける。それだけだ。

そう信じたい　ほんの少しの期待をして、れんは無言で手綱を握りしめた。

すると突然背後から、

「そちらの行き商いの方。もしや」

と声をかけられた。れん、そして春時は振りかえる。

十歩ほどあとから僧侶が二人歩みよってきた。若くて身ぎれいな黄色の法衣の僧と、初老のみすばらしく色のはげた衣を着けた僧。二人はあまりに対照的な姿をしている。

「あなたは」

と春時が困惑したようすでいると、初老の僧が柔和な笑顔を見せた。

「やはり真春まはるどですね」

## 第七話 禪師（四）

れんは、はじめその場所がこの世のものとは思えなかった。

暗い小屋の中にはいやな臭いがたちこめ、びっしりと人が横たわっていた。口々に不調を訴える者、すでに意識を失っている者、衣がどす黒いもので染まりうめき声を上げる者。

一緒に来た若い僧は、部屋の隅に座すると、ただちに経をはじめた。

初老の僧は、横たわる病人たちを診ていった。話せない病人の身体に素早く触れては板になにかを書き込む。だが、話のできる者はじつくりと不調の具合を聞いている。

れんはしばらく入り口で立ちつくしていた。

「ここが布施屋<sup>ふせや</sup>」

人を救いたいという切なる願いがおりなら、ぜひ布施屋をみていただきたい。ここからほど近い、久修園院<sup>くすおんいん</sup>にあります。

その僧は、春時との言い争いの始終を聞くとその是非には触れず、れんにすすめた。れんが春時に行つて良いのかと聞くと、春時は一晩、屋根を借りることができると了承したのだった。

道すがら、その僧はれんにたずねた。

「布施屋をご存知ですか」

れんはいいえと首を横にふる。すると若い僧侶が話を継いだ。

「布施屋とは、租税や労役、兵役へとおもむく民が困ったとき、手助けするところです。民が手持ちの食べ物や銭をなくしてしまったとき、食事をお渡しします。病氣やけがになれば、一時的にですが治療をほどこします。

今から参りますのは、拙僧の大師である行基大僧正<sup>ぎょうきだいそうじょう</sup>がおつくりになられた布施屋のひとつ、久修園院です。拙僧は師のご引導にて赴く

のですが、禅師は偶然、和泉国で道行きになったご縁でともにご来駕くださることになりました」

そして若い僧侶はとなりで微笑む僧侶に対して敬意をあらわした。禅師　そう呼ばれるからには高位の医僧であるらしい。衣のほころび具合だけなら、まるで若い僧侶のほうが高位に見えるのだが。れんどの」

れんははっとして初老の僧のもとに急いだ。彼が今、診ているのはやせた若い女だった。

「ぜひ診てください」

「わたくしが、ですか」

「はい」

僧は厳しい目で言った。

とまどいながらもれんは女性を見た。けがではなく、病持ちだ。女の手をとって脈をみる。

「お悪いのは、どちらでしょうか」

「おなか、とても、痛くて」

女は疲れた声でとつとつと答える。

「どんな感じに痛いでしょうか。ええと……刺されるとか、押されるとか」

「ぎゅうぎゅうと、押されるみたいで、あとひきつったりすると、血が」

れんは女が痛みを訴えている下腹部に手をあてた。息をひそめて脈を感じ取り、手を離すと、疲れているのにごめんなさい、と断つてからさらに問いかけを続ける。十ほどの質問を終えると、少し考えてから、禅師に顔を向けた。

「流産なさったとのこと、右下のおなかにひどいお血けっがあります。下焦虚寒から全身まで虚証がおよんでいます」

「なるほど。では、処方はどうお考えですか」

「生姜あと当归、人參、甘草、それと半夏に麦門冬ばくもんとう、もしあるのですしたら、呉茱萸……」



いつの間にか黄衣の若い僧が座っていた。彼はれんの答えた生薬の名を薄い板に書き写していく。答えたままを患者に施すつもりなのだろうか。れんは不安になった。

「あの、禅師さま」

「拙僧も同じ診たてです」

禅師はすりきれた袈裟を直すと、はじめて会ったときの柔和な笑顔を見せた。

（わたくしの診たてが合っていた）

れんは喜びにふるえそうになった。

はじめて会った人の病状を聞き、病の原因を判断し、処方を決める。れんがこれを行うのは、はじめてのことだったのだ。瀬雲にしろ亡き母にしろ、病の原因はあらかじめ聞いていた。原因を知っていて、経過観察した内容を医書突きあわせながら、処方をつくうしていたにすぎないのだ。

だが、喜びにひたる間もなかった。

「次の方を診ましょう」

たくさんの方がまだ横たわっている。

何人いるのだろう。

ふしぎと疲れは感じない。ふと気がついたのは、小屋に入ってきたときの不快な臭いを感じなくなったことだ。むしろかぐわしい香りが広がっている。

（どうしてだろう）

理由を探す時はれんには与えられなかった。横たわる男の腕をとり、傷のぐあいを診る。

「これは、ひどく失血したのでは」

「金創です。手当ての方法はわかりますか」

「たしか……」

外傷、全身の虚弱　この小屋には旅のけが人と飢えで衰弱した人が多かった。右大臣の姫を取りまく人々にはみられない症状の人々ばかりだ。それでもれんは、日々眺めていた医書の記述を思い出

しては有効な生薬を頭からひねり出し、答えていった。三つにひとつは誤りを指摘されたが、だからといって落ち込む間もなかった。

最後の患者を診終え、禅師が立ち上がる。

と、一緒に来た若い僧と布施屋ではたらく者たちだろう。彼らが禅師に問いかけた。

「近江にゆかれるとか」

「明朝、お発ちになるのですか」

「明朝もう一度うかがってからにします」

「なにか、気にかかることでも」

「鍼はりをうつとよさそうな方がいましたので」

「ああ、ありがたいことです。内道場の看病禅師さまに、これほどまでにお心遣いいただけるとは」

彼らは一様に深く拝謝した。

禅師も応えて合掌し、礼をとった。

そして彼らははじめに陣取った小屋のすみにゆき、誦経じゆきやうを再開する。その声はまるで軽やかに唄うようで、文机にあった箸を持つとなめし皮を広げた上に置いた小さな陶皿に粉にした薬草を落としていた。今、小屋を満たしている心やすまる芳香は、その器でいぶされている香であった。

小屋をあとにした禅師のあとをれんはついて歩く。

とても豊富な医術の知識をもつ、高位の禅師。内道場の看病禅師といえ、宮廷でみかどのために祈祷を行う方ではないか。その方は春時を知っていて、彼を『まはる』と呼んだ。春時はその名を呼ばれて困惑し、そして『今は』春時と名乗っていると、れんの目の前で答えたのだ。

（この禅師さまと春時どのは、どのようなご縁がおりなのでしょう）

れんがその疑問を頭の中でくり返し考えていると、

「そういえば！」

大声をあげて彼はふりかえった。

れんがすこし驚いて目を丸くした。

すると、この年になって未だにあわて者なのです、と禪師はばつの悪そうな、それでいて愛嬌のある照れ笑いを見せたのだった。

「すっかり名乗りを忘れていましたね。拙僧、道鏡どうきやうと申します」

## 第七話 禅師（五）

れんは粟の椀をすすり、芋煮と焼いたまこもの茎を口にし、あけびをかじった。

旅は疲れる。その上たくさんの人を診た。心身ともに疲れきっていた。だが、もっと苦しんでいる、飢えている人がある。そう思うと目の前の膳がひどく豪勢なように思えた。

箸がすすまず、れんは思いのたけをこぼす。

春時は芋を嚙下すると、

「道鏡禅師はあまり考えずに食べるだろうな」

と言った。

「そうでしょうか」

「そういう方だ」

「そういう方とは、どういう方ですか」

「可哀想なくらい単純な方さ」

春時はからかうような口ぶりで続けた。

「この膳と向き合ったならどう思われるか。そうだな。うまい、まずい、満腹だ、物足りない」

「なんですか、それ」

「考えるのはその程度。目の前のひとつのことしか考えられない。れんのようにあれこれ、他事まで思い悩める方じゃない」

「そのようなおっしゃりかた、ひどいではありませんか」

まるで小ばかにした物言いに、れんは憤慨して問いただす。

「禅師さまは、立派なお方でしたわ」

「確かにご立派であらせられる、なにしろ禅師だ」

「だいたい、禅師さまと春時どのは、いかなる関わりでいらっしゃるのですか」

「何年前、都でひどい流行り病があったらう」

「……豌豆瘡わんすかさのことでしょうか」

れんはまだ幼かったが伝え聞いてはいた。

都はさながら地獄の様相を呈していたという。市井の人も殿上の人も、次々と高熱を発し、全身に空豆のような疱瘡ほうそうが浮かびあがり、激しい苦痛にさいなまれながら亡くなっていった。

「禅師は、いやそのころは東大寺の修行僧であられたが」

「はい」

「民を施癒されていた」

僧たちは寺の内外で活動した。病の退散を祈祷し、医の心得あれば治療を施した。

といっても豌豆瘡。天然痘の治療法が確立したのは千二百年も後、十九世紀のこと。貴族なら症状を和らげるありとあらゆる薬を服用できるというくらいで、自然に癒えるわずかな幸運のおとずれを祈願するしか道がないのは、身分の上下なくみな同じであった。

それでも飯の施薬小屋は数多の患者であふれかえった。医僧たちは昼夜たがわず、救いを求めるかれらに正面から向き合った。道鏡も数多くの民を診てまわった、そのひとりであったという。

「それで、お二方は」

「そこで施しをうけて会った」

「禅師さまからの施しですか」

「そつだ」

「……春時どのは、名を百回でも唱えられておられたのですかいいかげんなことを、とれんは憤慨した。

あふれかえる患者の一人を、夕暮れの旅の路で呼び止められるほど覚えているとは到底信じがたい。そもそも春時には痘痕あはたひとつない。

「三百は唱えたかな」

「少のうございますね」

れんは膳に残る青菜をたいらげた。立腹ながら満腹になった。折りよく板戸の裏から顔を出したのは、話題の禅師である。

「れんどの、浴室を使われてはいいかな」

「よろしいのですか」

れんは喜々として身をのりだした。

「浴室で身を清めるのは、医書に接するより善きことです。そも遠慮は無用。布施屋の浴室は旅人のためにあります」

「では、おことばに甘えまして」

いそいそとれんが着替えをかかえると、春時がうながした。

「佐久。おまえも浴室へ行け」

「なんで？」

「お守りしろ」

「わかった！」

佐久はれんについて行つた。姫さまを守り助けるのが役割だ。桜の精の少年は、そう自認している。

「さて禅師」

両人の声も遠くかき消えると、春時が道鏡に向き直る。

「布施屋ではご迷惑ではありませんでしたか」

「とんでもない。正直、驚嘆しました」

道鏡がかぶりを振つた。

いわく　おそらく何十回も医書を読み返したのでしょうか。医書の文字の並びまでしかと覚えておられる。不安そうであつたのは最初のみで、病人の訴えにもよく耳を傾けられ、実にご立派でございました。しかるに、聞くにずっと家におり人に会うのは月例の礼にて参内するくらいしかなかったと、さように申される。まこと、芯の強いすぐれた御方よと感服いたしました。しいて瑕疵を挙げるならば、足りないのはより多くの人々を観ること。書物なぞは汎そのことを記した物に過ぎぬと解すること。それだけでございましょう。

その口上はすべらかで、おためごかしには聞こえなかった。

春時は苦笑した。うかつにも、れんは自分を宮中に参内する殿上の人と明かしたらしい。あとで苦言せねばなるまい。

ただ、言わずとも道鏡には見抜かれていたろう。それでも問題は

ない。

「おりいつて頼みがございます」

むしろ出自を明かさねばならないのだから。

「いかようなこと」

「都に人を遣わすふりをしていただきたい」

「ふり……都になにか障りがありますか」

「追われております」

「貴殿ですか、それともあの姫御に」

「藤氏の中將姫です」

道鏡は絶句した。

かまわず春時はたたみかける。

「横佩大臣・豊成公の邸に人を遣わすふりをお願いしたいのです。」

先刻はみつともない行く先争いの顛末をお聞かせしましたが、結局、

姫には人を遣わすただけ話し聞かせればそれで済む。実際に人は要

りません。なぜなら、そのむすめはすでに……」

「待つてください」

道鏡は困惑を隠さず話しをとどめた。

「なにか」

「いや、その話、いま少しゆるりと。拙僧は混乱しております」

「まさかこの私が、藤氏の姫御に手をさしのべようとは、と？」

「うむ……」

凶星か、道鏡は返答をのどにつまらせる。

正直なからだ。春時は口もとを上げた。

「人の心は移ろうもの。ひとえに民の救済を願った貴僧が、殿上を

目指されたように」

「……」

道鏡禅師は沈思する。

春時の言いようは決して非難ではない。むしろ好意的であった。

そして、まるで自らに言い含めるようでもある。彼の心のうちのあらわれだろう。

「さておき。姫は継母の妬みにて錢目当ての盗人どもにかどわかされ、邸を放逐された御身です。しかし、その身の不幸は放逐のみならず。藤氏を仇敵とみなし一矢報いんと徒党を組む輩からもつけ狙われているらしい」

「ゆえに、都に戻るはその身を危うくする」

道鏡はまぶたを上げた。

おおかたの事情は察した。

都へ薬を届けたいという病のむすめも、その騒動に巻き込まれて果てたか。なるほど、姫と少年が座をはずすや、時もおかず前段なしで本題から説いたのも道理である。二人の耳に入らぬよう、早々に切りあげたいはずだ。

「分かりました。瀬雲どのを診ましょう」

「診ると申されましてもその者は」

怪訝な顔で意を問おうとする春時に対し、道鏡は首を横にふる。

「拙僧にできるのは、話を心ゆくまでうかがうことと施療だけです」

佐久とれんの話し声が庭先から聞こえてきた。



## 第七話 禪師（六）

蒸し風呂にて軀の内外を洗い流しつつ、れんは思いに沈む。

売り言葉に買い言葉というほどでもないが、春時とはうまくいかない。

都には戻るべきでない。

頭では分かっていた。頭ごなしの否定に収まりがつかなかったのだ。それで言い争いになった挙句、偶々たまたま通りかかった道鏡禪師を巻き込んでしまった。どうにも始末が悪い。

道鏡は説教めいたものは語らなかった。布施屋を案内したのは、人を癒すことの実際を身をもって諭すためだろうと、れんは受け止めている。

「わたくしが行き、薬を与えねばならないと、思いこんでいたわ」それこそ思い上がりというものだろう。医書を座学で修めていようと、毒にも薬にもならぬ。

瀬雲には堅虫かたむしという立派な父がいる。思慮深い堅虫が、吾がむすめの身体を気遣わぬわけではない。都には本草に造詣の深い薬師がまた居るのだ。いざとなればかれらを訪ねればよい。

「かならず、わたくしが行かねばと、そう思ったけど、世間知らずのおろかな思いこみだったわ」

ただ、実際にはどう立ち回ればよかったのか……忘れればよいとも思えない。

そして わめいている佐久の声に気づいたあと、さらに落ち込んだ。

「浴室でぼんやりするのはやめてください」

「ごめんなさい」

佐久に叱られ、れんは恐縮した。

考えすぎたのぼせて意識が遠のいたところを、佐久により浴室から外へひっぱりだされたのだ。ついでに頭から冷水を浴びせかけら

れた。

もしこれが佐久でなく春時だったら、  
（恥ずかしくて、顔から火をふいて、焼けて消えてしまいたくなっ  
ていたでしょう）

いそいそとあてがわれた寝屋処ねやどに戻る途中、こっそり佐久に頼ん  
だ。

「このこと内密に」

「いいよ」

佐久は笑顔で応じた。

「父上が聞いたらぜったい姫さまに説教だろっし、そしたら姫さま  
は怒りだすでしょ。もう夜更けだもん、面倒くさいから言わない。  
また今度にするよ」

「また今度もやめてください」

嬉しいやら悲しいやらの答えに、れんもクスリと笑って答えた。

そして、やや間を置いて佐久に問いかける。

「佐久どのは、都に戻るのは、とんでもないとお思いですか」

佐久は少しうなづいて答えたことは、

「やめたほうがいいんじゃない？」

「やはりそうですね」

桜の精の子どもでもそう判断するのなら、自分の言い分など甚だ  
しく論外であろう。

（謝らなくては）

れんはそう心を定めて寝屋処に足をふみ入れたのだったが、

「れんどの」

すぐに道鏡から声がかかった。

「すっきりされましたかな」

「はい、とても」

どきりとしつつも、なんとか答えた。

春時に謝ろう。そう思っていたのに、禅師がいるはす向かいに春  
時がいるとなると正直、謝りにくい。気まずい、それでうまくこと

ばが出ない。

それでも決心したことであるからと、握るこぶしに力をこめた。

「春時どの、あのっ」

「れん、都の瀬雲どののことだが」

いきなりくじけた。

「禅師に都の瀬雲どのを診ていただけ」

「えっ」

思いがけない申し出にれんは固まった。

つづけて道鏡が問う。

「いいえ、拙僧が診るわけではないのだが……ともあれ、れんどの。経過と処方をお聞かせください」

れんは持ち物の袋にかけ寄ると、中をあわててかきまわし、ありましたと声はずませ木簡をとり出した。

道鏡は木簡の墨書にざっと目を通すと顔を上げる。

「寒滞肝脈の症があるようですね」

「はい」

「れんどのの見たてをお聞かせ願えますか」

「瀬雲はいつも青ざめた顔をなさっていて、なのに時折、たいへん顔が紅くなります。あと、めまいと手指にふるえがあります。ひどいときにはおからだすべて、ふるえています。おそらく寒虚で内熱があるのだと思います」

道鏡はうなずきながられんの話に耳をかたむけ、少し思案してからまた問診をつづける。

「瀬雲どののどのようなお方ですか。病に対する性分の意味あい」

「症状がひどくとも、苦しいとおっしゃらない、がまん強い方です。そういった心の強さがかえって我慢を重ねたすえに内熱をためて体を悪くしていると思う、とれんは所見をそえた。

道鏡はふむ、と深く息をついた。

「鍼はりはおこなっていますか」

「いいえ。わたくしは習得しておりませんので」

「しびれがあるなら鍼は非常に有効です。食が細いのなら養血を促すことが肝要。それと冬の気が強くなる中ですから、温経散寒の効をより強くする必要がありますかもしれない」

れんは感心しつつ何度もうなずいた。

「いずれにせよ難しい病のようです。季の変わり目でもありますから、こまめに脈診をしたほうがよいと感じました。その上で薬を調じるほうがよろしいでしょう」

「されど、わたくしは、ゆえあつて都に参れないのです」

「知り合いの薬師に頼んでみましょう」

「よろしいのでしょうか」

「易いことです」

「ありがとうございます」

ありがたい申し出だった。都には腕のいい薬師がいるのは分かっていた、ただ、れんには伝手が<sup>つて</sup>ない。どうすればよいか分からなかったのだ。

「この簡ですが、頼む者に送ってもよろしいですか。処方と経過が実によくまとめてありますから、参考になるでしょう」

「ぜひお持ちください」

「ほかに伝えるべきことはありませんか。その郎女のことに限らず、いっしょに携えさせますが」

「もし、父上に文を届けられるのなら」

「どうでしょう」

道鏡が春時に判断をうながした。春時が答える。

「良いかと」

「では手配してまいりましょう。文は朝の出立<sup>ふみ</sup>までにお渡しください」

道鏡は腰を上げた。

さて、禅師がいなくなり佐久がごろ寝しているところ。意を決し

てれんは口にした。

「春時どの、ごめんなさい」

春時はしばし黙っていたが、

「なにかやらかしたか」

と少し困った表情で逆に問いかけた。

れんはあつけにとられ、そして肩を落とした。

（覚えていらつしやらないのね）

言い争いを気に病んでいたのは自分だけだったらしい。これほど  
思い悩んだというのに。

「ええと」

説明をしようか。それも寝た子を起こして、わざわざ事を荒立て  
るようだ。

どうしたものかと答えあぐねているところ、

「くふふ」

春時のかたわらでかみ殺したような笑いがおこった。

床にころがっている佐久の脇腹に、春時が攻撃を加える。

「この、ためき寝入りの枝め」

「くふ、うひゃひゃ」

「なに笑ってる」

「くすぐるからだっ」

「そのまえに笑ったろ」

「うひゃ、やめて、降参」

佐久は派手に身をよじって逃げ、ごろりと身を反転させるや座っ  
てひざに手を添える。

「姫さま、浴室でのぼせてちゃったんです」

「さっ、佐久どの、約束したのに」

れんが顔を真っ赤にして抗議する。

「姫さまごめんなさい黙ってるの無理でした」

無理なのはれんの方だ。その件の弁解はまったく考慮外であった。  
「あのっ」

春時はれんの言葉を待たずに淡々と問い返した。

「佐久以外の、禪師さまや他の方に迷惑はかけてないのだろう」

「誓って、迷惑はかけていません」

「なら、いつもの馬上みたく寝ぼけたのまで小言をいう筋合いはないさ」

「いつも、ではありません！」

れんはむきになって反論する。

それに春時はやる気のない大あくびで応じた。

「分かったから早々に文書いて寝てくれ。俺は眠い。先に休む」

れんは無言でほおをふくらませた。

やはり春時とはうまくいかない、でもそれは春時どのが悪いのだ。売り言葉に買い言葉どころか、からかっておきながら、面倒になったらまともに取り合わないのだから。

日も暮れた屋戸の庭では蟋蟀ししゅうが互いに呼び合い、

室からは時折、苦吟が届く。異なる哀切な情緒をもたらす夜半の声。

それらに耳をかたむけつつ、れんはため息をついた。

あの木簡を禪師に渡すだけで、瀬雲を救うことができる。

今、筆を走らせんとする木簡はなにをもたらすだろう。

ただ、父に無事を知らせるだけでよいだろうか。思うに、春時は家司の堅虫に会っているから、れんの無事は父も知っているだろう。そこへあえて自らの筆になる文を送る必要があるのか。むしろ、継母に居場所を知られるほうが危ういのではないか。

春時は送って良いと判じたが。

「今一度、聞いてみましょう」

春時にも禪師にも。

「書く内容も、よくよく意見を聞いて、考えてからのほうが、よいかもしれません」

手元が暗くなってきたと思ったら、雲居の空に月が隠れてしまったようだ。

それもあるて、れんは筆をそつと置いて灯火を消すと、ゆっくりと身を横たえた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4281c/>

---

荷葉の路

2011年1月4日01時55分発行